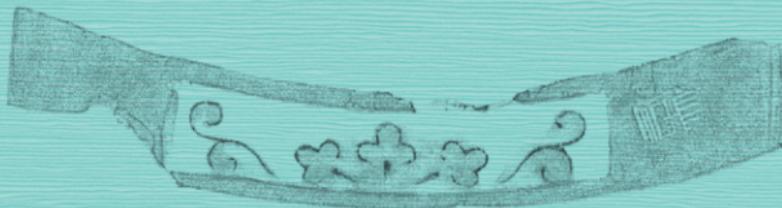


史跡 高知城跡

— 北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2011. 3

高知市教育委員会

史跡 高知城跡

— 北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2011. 3

高知市教育委員会



調査区風景（北より）



石列2



京都系綠釉陶器皿 (59)



同 (59)



土師質土器杯 (67)



備前焼甕 (87)



中国龍泉窯系青磁碗 (95)



中国漳州窯系青花大皿 (170)



高取焼碗 (238)



三ツ葉柏文軒丸瓦 (130)

序

史跡高知城跡－北曲輪地区は、国史跡高知城跡のある大高坂山の北麓に位置し、かつての堀の役目を果たしていた大川（江ノ口川）に接する地勢ありました。

高知市街地の大半は、古代以前には浦戸湾が深く入り込み、海中にあったとみられます。しかし丘陵部の当地周辺では弥生時代を原始とする遺物の出土から、人々の居住地として比較的早い時代に¹⁵⁶拓かれていたことが知られています。

この度、開発の計画により事前の緊急発掘調査を実施したところ、高知城の一郭とみられる石列のほか古墳時代の生活跡や中世の構跡など様々な時代の遺構が検出され、地域の歴史にとって重要な場所であることが確認されました。その後、史跡の管理者である高知県が地権者との同意に至り、取得する運びとなり、新たに国史跡として追加指定されることとなりました。

この報告書が、高知市の近世史を理解するうえで何らかの役割を果たし、また地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます

平成23年3月

高知市教育委員会

例　　言

1. 本書は、高知市教育委員会が平成18年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査対象地は、高知市丸ノ内2丁目37番1号に所在する。
3. 調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成19年度から22年度にかけて行なった。
試掘調査 平成18年11月9日～11月17日、調査面積176.0m²
本調査 平成19年2月13日～3月23日、調査面積約500.48m²
4. 調査体制は以下の通りである。
調査主体 高知市教育委員会
調査事務 高知市教育委員会 生涯学習課主事 丸山和代
調査担当 高知市教育委員会 生涯学習課指導主事 浜田恵子、梶原瑞司
5. 本書の執筆と編集は浜田が行い、遺物写真は梶原が撮影した。
6. 調査にあたっては、高知県教育委員会文化財課をはじめとする関係諸機関の方々の協力を得た。
7. 発掘調査にあたっては出原恵三、松田直則、池澤俊幸をはじめとする諸氏から助力を得た。
また、遺物の資料調査について池澤俊幸、大橋康二、岡本桂典、鈴田由紀夫、出原恵三、吉成承三、はじめ諸氏のご教示を賜った。(敬称略)
8. 発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。
〔発掘作業〕上田善右 岡崎速男 住田陽一 三谷哲彦
〔測量補助〕大野佳代子 田上浩
〔整理作業〕櫻尾洋子 島村加奈 松木富子 森木愛子 渡邊可奈子、酒井暢子
9. 掲載している平面図の方位は国土地標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。
10. 遺構の略号は、土坑:SK、溝状遺構:SD、柱穴及び小型の穴:P、性格不明遺構:SXとした。
11. 出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市教育委員会が保管した。注記の略号は「06-KC」である。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過·····	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境·····	2
2. 歴史的環境·····	2
第Ⅲ章 調査の方法·····	8
第Ⅳ章 調査の成果·····	9
第1節 試掘調査·····	9
第2節 基本層序·····	12
第3節 遺構と遺物·····	17
1. 概要·····	17
2. 古墳時代の遺構と遺物	
(1) 土坑·····	18
(2) 包含層出土の遺物·····	19
3. 古代の遺構と遺物	
(1) 土坑·····	20
(2) ピット·····	22
(3) 炭化物溜り·····	26
(4) 包含層出土の遺物·····	27
4. 中世の遺構と遺物	
(1) 土坑·····	27
(2) 溝·····	31
(3) ピット·····	32
(4) 包含層出土の遺物·····	32
5. 近世の遺構と遺物	
(1) 土坑 ·····	32
(2) 溝・溝状遺構 ·····	35
(3) ピット ·····	39
(4) 性格不明遺構 ·····	45
(5) 石列 ·····	45
(6) 瓦溜り ·····	50
(7) 包含層出土の遺物 ·····	55
6. 近世・近代の遺物 ·····	56
第V章 考察	
第1節 古墳時代から古代の検出遺構について·····	73
第2節 高知城跡北曲輪地区の性格と近世の検出遺構·····	76
第3節 高知城跡北曲輪地区出土の近世陶磁器・土器、近世瓦について ·····	84

挿図目次

Fig. 1	史跡高知城跡北曲輪地区平成18年度調査区位置図	1
Fig. 2	寛文己酉高知絵図(抜粋)	6
Fig. 3	高知城跡及び周辺の遺跡	7
Fig. 4	調査区位置図及び試掘坑配置図	8
Fig. 5	TP1～5セクション図	11
Fig. 6	基本層序(1)	13
Fig. 7	基本層序(2)	14
Fig. 8	検出遺構全体図	15～16
Fig. 9	SK3・4・10平面図・セクション図	19
Fig. 10	SK3・10・包含層IV層出土遺物実測図	19
Fig. 11	SK1平面図・セクション図・遺物出土状況図・SK1・5出土遺物実測図	20
Fig. 12	SK5・6・9・14平面図・セクション図・エレベーション図	21
Fig. 13	SK6出土遺物実測図(1)	23
Fig. 14	SK6出土遺物実測図(2)	24
Fig. 15	SK6出土遺物実測図(3)	25
Fig. 16	P2～5・7～9平面図・セクション図・エレベーション図・P7出土遺物実測図	26
Fig. 17	炭化物溜り1平面図・セクション図	26
Fig. 18	包含層III・IV層出土遺物実測図	27
Fig. 19	SK7・11・13・P6平面図・セクション図・SK7出土遺物実測図	28
Fig. 20	SD2平面図・セクション図・エレベーション図	29
Fig. 21	SD2出土遺物実測図(1)	30
Fig. 22	SD2出土遺物実測図(2)	31
Fig. 23	包含層III層出土遺物実測図	32
Fig. 24	SK2平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図	33
Fig. 25	SK8・12平面図・セクション図・溜出土状況図	34
Fig. 26	SD1平面図・セクション図・溜出土状況図	36
Fig. 27	SD1セクション図	37
Fig. 28	SD1出土遺物実測図(1)	38
Fig. 29	SD1出土遺物実測図(2)	39
Fig. 30	SD1出土遺物実測図(3)	40
Fig. 31	SD1出土遺物実測図(4)	41
Fig. 32	SD1出土遺物実測図(5)	42
Fig. 33	SD1出土遺物実測図(6)	43
Fig. 34	SD1出土遺物実測図(7)	44
Fig. 35	SD1出土遺物実測図(8)	45
Fig. 36	SD3セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図	46
Fig. 37	P1平面図・エレベーション図・SX1出土遺物実測図	47
Fig. 38	石列1・瓦溜1平面図・セクション図・溜出土状況図	48
Fig. 39	石列2・3・SD4・瓦溜2・3平面図・セクション図・エレベーション図・溜出土状況図	49
Fig. 40	石列2出土遺物実測図	50

Fig. 41	瓦溜1出土遺物実測図(1)	51
Fig. 42	瓦溜1出土遺物実測図(2)	52
Fig. 43	瓦溜1出土遺物実測図(3)	53
Fig. 44	瓦溜3出土遺物実測図	54
Fig. 45	瓦溜4・5出土遺物実測図	57
Fig. 46	包含層II層出土遺物実測図(1)	58
Fig. 47	包含層II層出土遺物実測図(2)	59
Fig. 48	包含層II層出土遺物実測図(3)	60
Fig. 49	包含層I・II層出土遺物実測図	61
Fig. 50	絵図にみる北曲輪の変遷(1)	82
Fig. 51	絵図にみる北曲輪の変遷(2)	83

表目次

Tab. 1	土坑一覧表	17
Tab. 2	ピット一覧表	18
Tab. 3～9	遺物観察表(陶磁器・土器)	62～68
Tab. 10	遺物観察表(石製品・金属製品)	68
Tab. 11	遺物観察表(古錢)	69
Tab. 12～15	遺物観察表(瓦)	69～72
Tab. 16	瓦溜1～3・SD1出土瓦の破片点数と推定個体数	89
Tab. 17	瓦溜1～3・SD1出土の刻印瓦	90
Tab. 18	瓦溜1～3・SD1出土遺物の器種別出土点数と組成比	90

写真図版目次

卷頭図版1	調査区風景、石列2	
卷頭図版2	京都系緑釉陶器皿・土師質土器杯・備前焼甕・中国龍泉窯系青磁碗・中国漳州窯系青花大皿 ・高取焼碗・三ッ葉柏文軒丸瓦	
PL. 1	調査前全景、調査区全景	93
PL. 2	調査区南壁、調査区南壁(西部)	94
PL. 3	SK3・4、SK4セクション	95
PL. 4	SK10遺物出土状況、SK6・10セクション	96
PL. 5	SK1遺物出土状況、SK1セクション	97
PL. 6	SK5、SK9セクション	98
PL. 7	SK6完掘状況、同上	99
PL. 8	SK7セクション、SK11セクション	100
PL. 9	SD2検出状況、SD2・SD3セクション	101

PL_10	SD2・SD3、SD2・SD3完掘状況	102
PL_11	SK1完掘状況、SK5、SK9、P2、SK13セクション、P6セクション、炭化物層り1、 IV'層出土状況	103
PL_12	SK2・瓦溜4、SK2遺物出土状況	104
PL_13	SD1完掘状況、SD1セクション	105
PL_14	石列1・瓦溜1検出状況、石列1・SD1	106
PL_15	石列1・SD1、石列1セクション	107
PL_16	石列2・3、石列2	108
PL_17	石列2、石列3・瓦溜3	109
PL_18	石列4、SX1セクション	110
PL_19	石列1・SD1、SD1セクション、SD1遺物出土状況、瓦溜1検出状況、瓦溜1・石列3・瓦溜3、 石列3・瓦溜3、石列3セクション	111
PL_20	石列2、石列2、石列2遺物出土状況、SK2検出状況、SK2セクション、石列4・SX1、 作業風景、現地説明会風景	112
PL_21	SK1・3・10・SD2遺物出土状況	113
PL_22	SK2・SD2遺物出土状況	114
PL_23	石列2・SD1・瓦溜1・3遺物出土状況	115
PL_24	SK1・6・10出土遺物	116
PL_25	SK6出土遺物	117
PL_26	SK6・包含層III層出土遺物	118
PL_27	SD2出土遺物	119
PL_28	SK2・SD1・2・包含層III層出土遺物	120
PL_29	SD1出土遺物	121
PL_30	SD1・3出土遺物	122
PL_31	SD3・SX1・石列2出土遺物	123
PL_32	瓦溜1出土遺物	124
PL_33	瓦溜1・3・4・包含層II層出土遺物	125
PL_34	包含層I・II層出土遺物	126

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

史跡高知城跡北曲輪地区平成18年度調査地点は、大高坂山の北麓に位置し、江戸時代には土佐藩の作事方や米倉、武器庫などの施設があったことが古絵図に記されている。明治にはこれらの建物は解体され公園や官舎となるが、近年は日本鉄道共済組合高知保養所「土佐荘」の敷地となり、その後も同施設がJR四国高知駅会所として活用されてきた。

平成18年、「土佐荘」跡地が民間に売却されるとともに、マンション建設が計画され、それに伴う埋蔵文化財の有無についての照会が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対し提出された。これを受け、高知市教育委員会では試掘確認調査を平成18年11月9日から11月17日にかけて実施した。工事予定地の8箇所に試掘坑を設定し、試掘調査を行った結果、数箇所の試掘坑において古墳時代から近世の遺構と遺物を検出した。

この結果を受けて、当時の地権者であった株式会社穴吹工務店、高知県教育委員会と高知市が協議を行い、建物の建設予定地内において、高知市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。本調査は平成19年2月13日から3月23日にかけて実施した。

なお、対象地はこれまで「郭中参考地域」とされてきたものであるが、試掘調査での遺構、遺物の新たな発見により、平成19年1月15日に埋蔵文化財包蔵地として追加された。さらに発掘調査の後、遺跡の保存を求める市民の声が高まることによって国・県・地権者との協議が進行し、平成21年7月23日には対象範囲が国指定史跡に追加されるに至った。

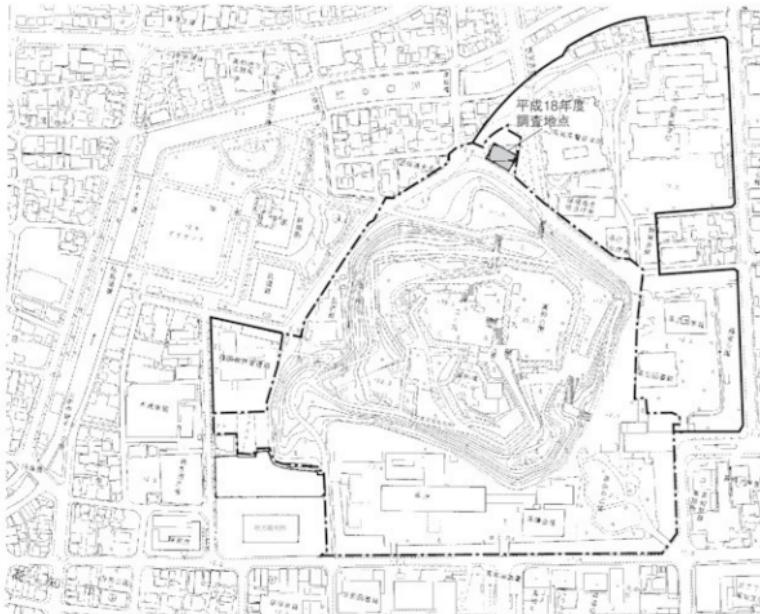


Fig.1 史跡高知城跡北曲輪地区平成18年度調査区位置図

— 史跡高知城跡
— 高知城跡
(※史跡・包蔵地の範囲は2011年3月現在のもの)

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

高知市は土佐湾に面し、東部には高知平野が広がり、市域の西部及び北部は東西に山地が連なる。河川は、鏡川が市の西北部から湾曲した後東流して浦戸湾に注ぎ、国分川が南国市北部及び香美市西部域から西流し、江ノ口川、舟入川と共に浦戸湾に注いでいる。現平野部のほとんどが古くは内海であったが、その後鏡川などの堆積や隆起、干拓による埋め立てなどによって、近世以降ほぼ現在の状態になったものである。

高知城跡が立地する高知市の中心市街地は、北部は標高400～600mの東西に連なる山地、南方を300m級の帯状の山地、西方をなだらかな丘陵によって囲まれた平野部にあり、周囲には大高坂山、小高坂山、能茶山、比島山、葛島山などの小分離丘陵が存在している。しかし、かつては鏡川によって形成された三角州上に広がる低湿地であったため、平野部の土地は総体的に低く、集中豪雨、台風、津波による水害が繰り返されてきた地域でもある。一方で、平野部に内陸深く入り込む浦戸湾は自然の良港となり、近世には、浦戸湾に注ぐ鏡川、江ノ口川の水運によって、交通至便の立地環境を得ることとなった。

高知城跡平成18年度調査地点は高知市の中心市街地にあり、大高坂山北側の山裾に接する微高地に立地している。北側を流れる江ノ口川は、現在は河川改修によって直線的に東へ向かっているが、かつては川筋が南側に大きく迂回し、本調査地点のすぐ北西側まで旧江ノ口川が迫っていたことが、近世の絵図及び近年の立会調査^(註1)等で知られる。

2. 歴史的環境

周辺の遺跡

縄文時代の遺跡としては、高知市北部の丘陵に位置する福井遺跡、宇津野遺跡で縄文時代の遺物が検出されている。また、長浜チドノ遺跡から縄文前期の羽島下層式土器、正蓮寺不動堂前遺跡からは縄文中期初頭の舟元I式土器や砾石錐、縄文後期～晩期の条痕土器や磨研土器、高知市西部の柳田遺跡からは縄文後期～晩期の土器が出土している。

弥生時代には、福井遺跡、高知学園裏遺跡、初月遺跡、北秦泉寺遺跡など、丘陵沿いを中心に遺跡が増加する。また、柳田遺跡では弥生前期の大籠式土器などが出土している。弥生時代中期から後期にかけては、山地・丘陵部に立地するからと口遺跡、城山遺跡、高天原遺跡などがある。注目されるものとして、県下最古の中広形銅矛2本が池地区の長崎より、県下唯一の有柄式石剣と片刃石斧が北秦泉寺遺跡より出土している。また、大高坂山の北西側に立地する尾戸遺跡においても、弥生前期の大型蛤刃石斧の出土が確認されている。

古墳時代では、北部山麓に吉弘古墳、愛宕不動堂前古墳、宇津野1号墳、2号墳等の後期古墳が点在する秦泉寺古墳群が存在する。また、高知市西部から南部にかけての丘陵部には、7世紀前半の横穴式石室をもつ朝倉古墳や、塚ノ原古墳群が存在する。また、平野部においては、中島町遺跡や西秦泉寺遺跡などの遺跡が確認されている。

古代では、白鳳～奈良時代の瓦を出土する秦泉寺廃寺跡がある。この他にも、東久万池田遺跡、西秦泉寺遺跡、吉弘遺跡、松葉谷遺跡、高知学園裏遺跡等がある。記録の上では、高知市中心部の北西側に高坂郷が成立し、以後中世にかけて、南側の低湿地へと開拓が進んでいったものと推察される。

中世には、大高坂城跡、福井中城跡、万々城跡、安楽寺山城跡など、多くの山城が丘陵部に立地するようになる。大高坂城跡は南北朝期に土佐の南朝方として活躍した大高坂氏の居城である。大高坂氏が暦応2～3年（1339～1340）に北朝方の攻撃を受け敗退^{〔註2〕}した後は、天正16年（1588）に長宗我部元親が岡豊城から大高坂山に移り、その後同氏が浦戸へ移る天正19年（1591）までの間、大高坂山が長宗我部氏の居城となった。天正16年『長宗我部地検帳』の『大高坂之村地検帳』には「弓場ヤシキ」「大テンスノ下」「御土居」などの記載がみられ、城下町形成の様子が窺われる。高知城三ノ丸跡の平成16年度発掘調査では、現存する東石垣の背面で長宗我部の時代に遡る天正期の石垣が検出され、桐文軒丸瓦も出土している。

近世の遺跡では、高知城跡の他、高知城伝下屋敷跡、弘入屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などが確認されている。高知城は享保12年に焼失するが再建され、現在、国の重要文化財に指定されている。平成5年度の御台所屋敷跡の発掘調査では、ビット、礎石、溝、石垣などの遺構が検出されている。城下町では、藩閥連の屋敷跡である高知城伝下屋敷跡、上級～中級武士の屋敷跡である弘入屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などの調査が行われ、近世城下町の様相が次第に明らかになってきている。近世の窯跡には、尾戸窯跡、能茶山窯跡がある。尾戸窯は高知城の北西に位置する尾戸の地に、承応2年（1653）に開かれた藩の陶器窯で、文政5年（1822）に窯場が能茶山に移転する。文政3年（1820）には、城下の西方に位置する能茶山に能茶山磁器窯と陶器窯が開かれている。

開成館跡は慶応2年（1866）に土佐藩が創立した勸業貨殖および技術教育の統括機関であり、慶応3年に山内容堂と英公使の通訳官アーネスト・サトウとの会見がなされた。明治初期には外客接待の場として「寅賓館」と改まり、明治4年（1871）に、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、杉孫三郎と板垣退助、福岡孝弟による、会談が行われている。

大高坂山と周辺の景観－古代・中世

高知城及び高知城跡平成18年度調査地点が所在する大高坂山とその北側の地点は、古代には高坂郷に属していた。高坂郷の名称は、10世紀初めの『和名類聚鈔』^{〔註3〕}に見えており、そこには「土佐郡

五郷 土佐・高坂・鶴部・朝倉・神戸」とある。こうした記述から、律令制下における高坂郷の開発は、平安時代にはすでに進められていたと考えられる。

南北朝時代には、土佐の在地領主らが二派に分かれて争い、大高坂を主戦場に度々合戦が行なわれたとされる。『佐伯文書』によると、在地の有力地頭とみられる大高坂氏が城を構え、「大手」「一城戸」「西大手」「西之城戸」などがあったとされている。またこの際、城主である大高坂松王丸は戦死し、暦応3年（1340）、所領は堅田氏に恩賞として与えられたと記されている。

中世末期、長宗我部元親は、天正16年（1588）に居城を岡豊城から大高坂に移し、城下町の設営を開始した。『長宗我部地検帳』によると当地には「弓場ヤシキ」「大テンスノ下」「御土居」などの語

もみられ、一定の築城がなされていたことが推察される。しかし城下町建設は不調に終わり、2年余りで浦戸城への再移転となる。

高知城と周辺の景観－近世

関ヶ原合戦後、土佐国を与えられた山内一豊は、慶長6年（1601）に長宗我部氏の居城であった浦戸城に入城した。その後、国内統治の要衝の地として大高坂山を城地に選び、慶長6年9月に築城を開始した。慶長8年（1603）には、本丸の建物と二ノ丸石垣までが竣工し、慶長16年（1611）に三ノ丸が完成して高知城の竣工に至った。築城当初、城山の名称は「河中山」とされたが、城下がたびたびの水害に悩まされたためその名を忌んで、慶長15年（1610）に「高智山」と改めた。

正保年間（1644～1648）の『正保城絵図』^{〔註3〕}、及び慶安5年（1652）の『慶安五年高知郭中絵図』^{〔註4〕}によると、城の南側と西の搦手門付近には下屋敷があり、南東及び北東には侍屋敷が置かれていた。また、寛文9年（1669）の『寛文己酉高知絵図』^{〔註5〕}（Fig.2）では、城の南東に「御馬場」、東北には江ノ口川に接して「御作事場」「御米蔵」「御武具蔵」等の藩の施設がみえている。

これらを囲んで、城の東・西・南に内堀が巡らされ、北は江ノ口川（当時の大川）が堀としての役割を果たした。城門は東西南北の4棟が設けられ、東を追手とし、西を搦手とした。

築城に並行して、城下町の造営も進められた。南の鏡川と北の江ノ口川を天然の外堀とし、東側と西側は新たに堀を設けて外堀とした。これらの外堀に囲まれる区域が郭中とされ、上級・中級武士の居住区となった。さらに郭中を挟んで、西には上町、東には下町を配した。上町は主に足軽、武家奉公人など下士の者を住まわせ、下町には武士の生活を賄うための町人の居住地区が設けられた。上町、下町と郭中の境界は、東は廿代橋より南に堀詰を経て鏡川に至る線、西は江ノ口川より南に金子橋、築屋敷に至る線がこれにあたり、郭中との境には外堀とともに、土堤を築いて両者を区画している。

今回の高知城跡平成18年度調査地点は、高知城北側の曲輪部分にあたっており、先の『寛文己酉高知絵図』では「御作事場」「御米蔵」「御武具蔵」等の藩の施設が設けられた一画となっている。これらの施設が幕末頃まで当地に引き続き置かれたことが、後の絵図^{〔註6・7〕}からも窺うことができる。

近代以降

明治初年の廢藩置県を経て、明治6年（1873）に高知城の建物の一部は解体され、公園となった。明治11年から26年の概況を表わした市街地図^{〔註8〕}によると、高知城北側の今次調査区に該当する一画は諸官舎の一つとなっている。

[註]

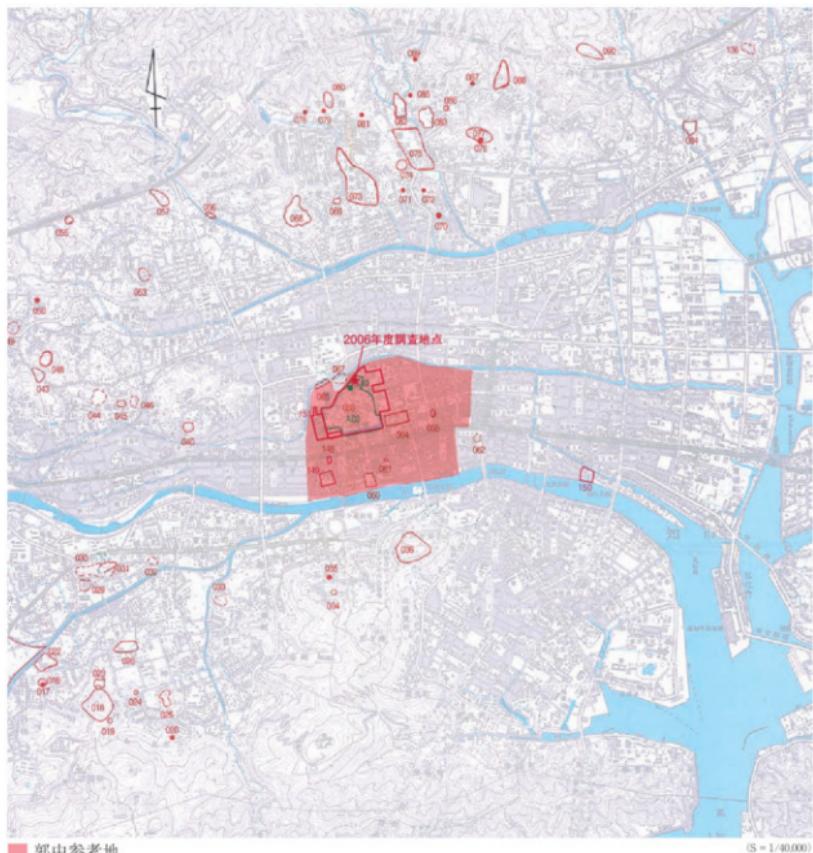
- 1) 高知市教育委員会による平成17年度立会調査では、今次調査区北西側の道路北隅にて旧江ノ口川の南岸に伴うとみられる石垣の一部が確認されている。
- 2)『土佐國盡簡集拾遺』
- 3)『正保城絵図』国立公文書館所蔵
- 4)『慶安五年高知郭中絵図』高知市民図書館所蔵
- 5)『寛文己酉高知絵図』高知市民図書館所蔵
- 6)『高知郭中図』『高知城下町読本』土佐史談会・高知市教育委員会より引用。原本は幕末頃の高知郭中図をベン字にて写したもの。
- 7)『高知城の図』高知城憲徳館蔵より引用。明治6年5月城内の建築物を取り壊す前に測量調査した記録を図示したもの。
- 8)『新撰高知市街地図』明治11年発行河田小龍製作の高知市街全国を参考として明治26年11月久保田祥然堂発行の『旅行必携新撰高知市街地図』を模写したもの。『高知城下町読本』土佐史談会・高知市教育委員会より引用。

[参考文献]

- 横川末吉「第一編 古代・中世」『高知市史 上巻』高知市1958年
- 平尾道雄「第二編 近世」『高知市史 上巻』高知市1958年
- 『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会2004年
- 『史跡高知城跡1－高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書』高知県教育委員会1994年
- 『高知城跡－伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター1995年
- 『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁宇舎敷地跡文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
- 『史跡高知城跡－本丸石垣整備事業報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2004年
- 『史跡高知城跡－丸ノ内緑地試掘確認調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2006年
- 『史跡高知城跡－三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2010年
- 『尾戸窓跡』高知市教育委員会2007年
- 『開成館』高知市教育委員会2007年
- 『金子橋遺跡』高知市教育委員会2008年
- 『西弘小路遺跡』高知市教育委員会2010年



Fig.2 寛文己酉高知絵図(抜粹)(高知市立市民図書館平尾文庫所蔵)



(S = 1/40,000)

■ 郭中参考地

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
063	高城城跡	近世	046	福井元尾城跡	中世	075	安風寺廢寺跡	古代
016	舟岡山道路	弥生	048	からと口道路	弥生	076	上居の古墳	古墳
017	舟岡山古墳	古墳	049	福井別城跡	中世	077	前里城跡	中世
018	神田南城跡	中世	050	福井古墳	古墳	078	宇津野2号墳	古墳
019	ケシカ浦遺跡	弥生	053	高武字守城跡	中世	079	宇津野1号墳	古墳
020	高原古墳	古墳	055	福井古跡	編文～中世	080	宇津野道路	編文
022	驚道橋付近道路	弥生～中世	056	矧月道路	弥生	081	安風寺廢寺跡古墳	古墳
023	シルタニ遺跡	弥生・古代	057	万々城跡	中世	082	古弘遺跡	古代
024	高神道路	古墳・古代	060	南朝御敷跡	近世	083	松葉行跡	古代～中世
025	神田道路	弥生～中世	061	中町町道跡	古墳	084	莉野道路	古代
026	神田ムク入道跡	弥生～中世	062	国沢城跡	中世	085	日の岡古墳	古墳
029	鴨部道路	弥生	063	大高丸城跡	中世	086	北菴泉寺遺跡	弥生
030	神田山城跡	中世	064	弘人屋敷跡	近世	087	鷺谷古墳	古墳
031	能茶山空跡	近世	065	帝町町道跡	古墳	088	安風寺城跡	中世
032	石立城跡	中世	066	尾ノ口道路	弥生	089	安風寺守・井田神社裏古墳	古墳
033	久寿駒ノ丸道路	弥生～中世	067	尾ノ口空跡	近世	090	莉野城跡	中世
034	小石木町道路	弥生	068	安美山山城跡	中世	136	一宮別城跡	中世
035	小石木山古墳	古墳	069	東久万造田道路	古代～中世	146	高田城下下屋敷跡	古墳～近世
036	潮上城跡	中世	070	愛宕ノ木野曾前古墳	古墳	149	金子橋跡	近世
040	井口城跡	中世	071	安小学校原古墳	古墳	150	瀬成船跡	近世～近代
043	高知学園裏道路	弥生～古代	072	愛宕神社裏古墳	古墳	151	西弘小路道路	近世
044	福井西城跡	中世	073	西条寺道路	古墳			
045	福井中城跡	中世	074	秦風寺御城跡	中世	A02	国指定史跡高知城跡	近世

※No.は高知市道路地図による。

Fig.3 高知城跡及び周辺の遺跡

第Ⅲ章 調査の方法

本調査においては、重機を用いて表土と搅乱層を除去し、その後、人力にて検出作業と遺構掘削を行った。遺構検出面以下の無遺物層については、部分的にトレンチ調査を行い、遺構と遺物の有無を確認した。

検出された遺構については、土層観察を行うとともに土層図と平面図を作成し、写真撮影を行った。遺構の測量については、世界測地系公共座標に基づく4m×4mの方眼区画を設定し、それをもとに実測を行った。平面実測及び土層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。

水準については、高知市丸ノ内1-2-20に設置されている一等水準点より導いた。また、都市再生街区基本調査により設定された基準点を利用して多角測量を行い、調査対象地内にて座標を測定した。



Fig.4 調査区位置図及び試掘坑配置図

第IV章 調査の成果

第1節 試掘調査

試掘確認調査では、調査対象地内に8箇所の試掘坑を設定し調査を行った。(Fig.4) 各試掘坑の堆積層と検出遺構、遺物の概要は以下の通りである。なお、TP6・7南壁セクション図については本調査区南壁(Fig.6)とはほぼ同様であり、TP8セクション図も殆どが搅乱層であったため、ここでは図示していない。またTP1・2・6・7の検出遺構と遺物については、本調査と内容が重複する部分があるため詳細を本編に譲ることとした。

TP1 (Fig.5)

調査対象地の南東部に設けた試掘坑である。近現代の搅乱と整地層であるI-1層・I-2層は現表土下60cmの深さまであり、その直下で近世の遺物包含層であるII層：灰黄褐色シルト層、標高2.28m以下で古代から中世の遺物包含層であるIII層：にぶい黄褐色シルト層を検出している。

検出遺構としては、II層中位で、溝SD1 (Fig.26~35) と石列1 (Fig.38) を検出している。このSD1と石列1の周辺には瓦片と漆喰を多量に含む瓦溜1 (Fig.38・41~43) が広がっている。遺物は、II層より近世陶磁器と瓦片、III層より古代から中世の土師器・土師質土器片と須恵器片が出土している。

TP2 (Fig.5)

調査対象地の東部に設けた試掘坑である。セクションを観察した試掘坑の東側部分は、近現代の搅乱層が深部に達するためII層は残存せず、搅乱層の直下で古代から中世の遺物包含層にあたるIII-1層・III-2層を検出した。標高1.06m以下はIV層：褐灰色粘質シルト層であり、IV層の下位には倒木や木片を多量に含むIV'層と砂を含むIV''層が堆積する。さらに標高0.7m以下ではV層：緑灰色砂質シルト層が堆積している。

検出遺構としては、II層が良好に残存する試掘坑西側部分の標高2.3mのレベルにて、石列2 (Fig.39・40) を検出している。また試掘坑の東側では、III層の上位にあたる標高1.72mのレベルにて、炭化物を多量に含む浅い落ち込み状の遺構、炭化物溜り1 (Fig.17) を検出している。遺物は、II層より近世陶磁器と瓦片、III層より古代から中世の土師器・土師質土器片と須恵器片が出土しており、IV層以下では遺物は出土していない。

TP3 (Fig.5)

調査対象地の北東部に設けた試掘坑である。近現代の整地層と搅乱層は表土下120cmの深さまで及んでおり、その下面にてII層、標高2.1m以下でIII層を検出した。

遺構は未検出であるが、II層下位にあたる標高2.24mの位置で径30cm前後の石灰岩の角礫2個が並んで検出されている。出土遺物としては、II層より近世陶磁器と瓦片、III層より古代から中世の土師器・土師質土器片と須恵器細片が少量出土している。

TP4 (Fig.5)

調査対象地の南部に設けた試掘坑である。近現代の搅乱層が深部に及ぶため、II層は残存しない。搅乱層の直下ではIII層を確認しており、古代から中世の土師器・土師質土器片と須恵器細片が少量

出土している。

TP5 (Fig.5)

調査対象地の中央部に設けられた試掘坑である。近現代の搅乱によってⅡ層は残存しないが、擾乱層の直下で、古代から中世の遺物包含層であるⅢ-1、Ⅲ-2層を確認している。Ⅲ層以下では、標高1.2m以下でⅣ層：褐灰色粘質シルト層、標高0.9～1.0m以下でⅤ層：暗灰色シルト質砂層を検出している。

遺構は未検出であるが、Ⅲ層より古代から中世の土師器・土師質土器片と須恵器細片が少量出土している。

TP6

調査対象地の南部に設けた試掘坑である。南壁のセクション (Fig.6) によると、西側部分では、近現代の整地層の直下にあたる標高2.4m前後まで白色系の岩盤 (a層) が露出しており、東側部分では岩盤を掘り込んで近世の土坑SK8と溝SD3、中世の溝SD2が掘削されている状況が観察された。

遺構は、近世の溝SD3 (Fig.36)、土坑SK8 (Fig.25)、中世の溝SD2 (Fig.20～22) を検出している。

TP7

調査対象地の南部に設けた試掘坑である。南壁セクション (Fig.6) によると、近現代の整地層の直下に、近世の遺物包含層であるⅡ層 (標高2.2～2.6m) が残存し、その下面で古代から中世の遺物包含層Ⅲ層を検出している。しかし、試掘坑の西寄りの位置では岩盤層 (a層) が標高2.2mの高さまで現れており、中世の溝SD2が岩盤の上面を削平する様子が観察される。

検出遺構としては、試掘坑西側の岩盤層の上面で中世の溝SD2、試掘坑北側のⅢ層下位、標高2.15m前後のレベルで古墳時代の土坑SK3 (Fig.9・10) とSK4 (Fig.9)、試掘坑南壁で時期不明のP10・P11を確認している。

TP8

調査対象地の北西部に設けられた試掘坑である。現代の搅乱が深部にまで及んでおり、Ⅴ層以上の堆積層の確認が出来ていない。Ⅴ層は暗灰色シルト質砂層で無遺物である。

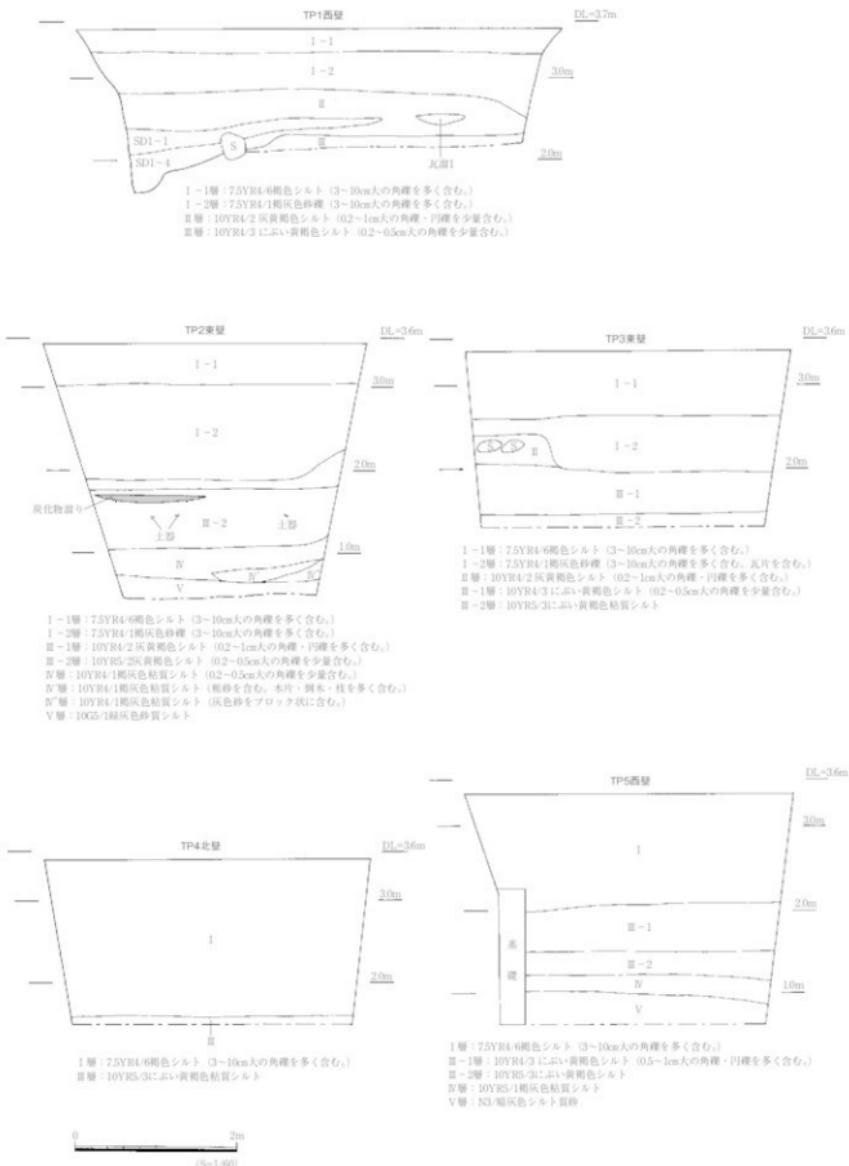


Fig.5 TP1~5セクション図

第2節 基本層序

本調査区は、旧建物が存在していた中央部付近 (Fig7-C-C')において搅乱が著しく、近世以前の遺物包含層は殆どが削平されている。そこで、遺物包含層が比較的良好に残存した調査区南壁 (Fig6-A-A') と北壁 (Fig7-B-B') にて堆積状況の観察を行った。また、試掘調査の際に観察したTP1~8の堆積状況 (Fig5) も加えて参考とした。

各堆積層の概要は次の通りである。

I層：褐色シルト・橙色シルト・褐灰色砂礫

II層：灰黄褐色シルト

III層：褐色シルト・ぶい黄褐色シルト

IV層：灰色粘質シルト・褐灰色粘質シルト

V層：緑灰色砂質シルト・暗灰色シルト質砂

a：岩盤

I層は近現代の整地層及び搅乱層で、瓦片、煉瓦、陶磁器など近世から現代までの遺物が多く含まれる。このうち近世のものでは、江戸後期以降の遺物片が特に多く混在している。

II層は近世の遺物包含層にあたり、主に江戸後期の遺物を多く含んでいる。

III層は古代から中世の遺物包含層で、土師器・土師質土器片と須恵器片を含んでいる。調査区南部では南部のTP1で標高2.28m以下、北部TP3では標高2.1m以下で検出される。

IV層からの出土遺物は僅少であるが、調査区中央部に設けた試掘坑TP5内から土師器片が出土している。また調査区北東部の試掘坑TP2では、IV層の下位にて木片、枝、倒木の幹などの植物遺体を多く含むIV'層を確認している。IV層は、TP2で標高1.06m、TP5で標高1.2m以下のレベルで検出されている。

V層は砂質シルトとシルト質砂からなるもので、無遺物である。TP2で標高0.7m以下、TP5で標高0.9~1.0m以下のレベルで検出されている。

a層は白色系の軟質な岩盤であり、調査区の南部から中央部にかけて検出されたものである。南壁セクション (Fig6) によると、東部側ではII層・III層の直下に岩盤が存在し、中央より西側はI層の直下が岩盤層となっている。この岩盤層は中・近世の遺構によって部分的に掘り下げられ、西側では上面を平坦に揃えられている。こうしたことから、調査区の南西部部分には、かつては城山の山裾に連なる岩盤層が広がっていたと考えられ、中・近世以降の開発と整地によってこれらが削平され平場が拡張されたと思われる。

一方、TP2・TP5セクション (Fig5) によると、調査区の北部付近では土師器片を含むIV層の下面にて、河川堆積とみられる砂質シルトとシルト質砂が確認されている。このため、古墳時代及び古代以前には、調査区北部側は南に迂回して流れる江ノ口川の河道に近く、河川の影響を受け易い立地環境にあったと推定される。

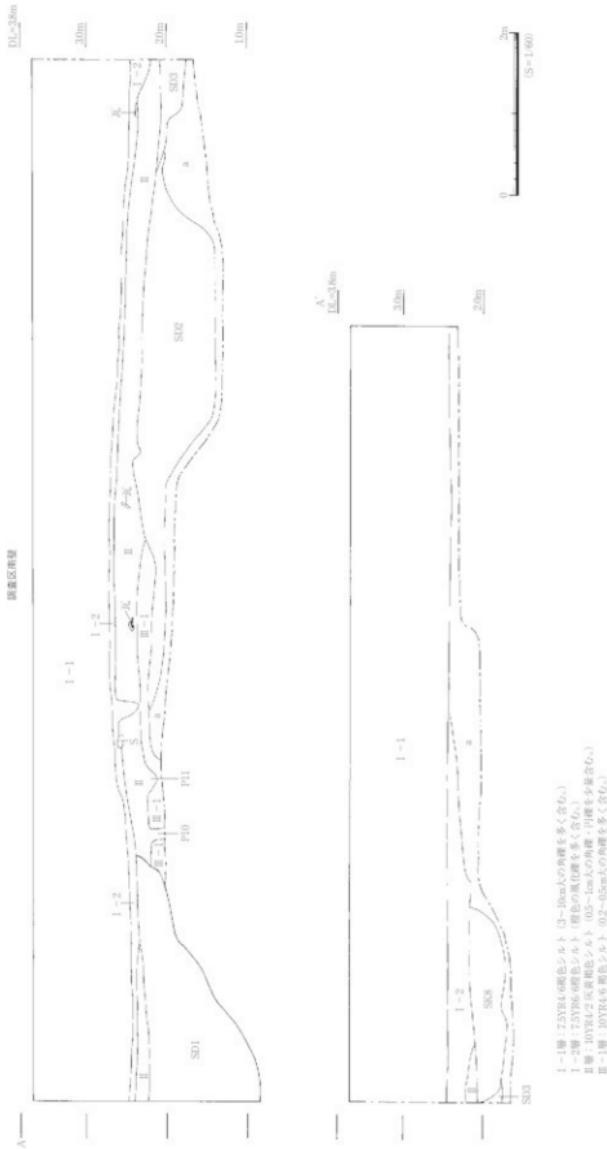


Fig.6 基本層序 (1)

Fig.7 基本層序 (2)

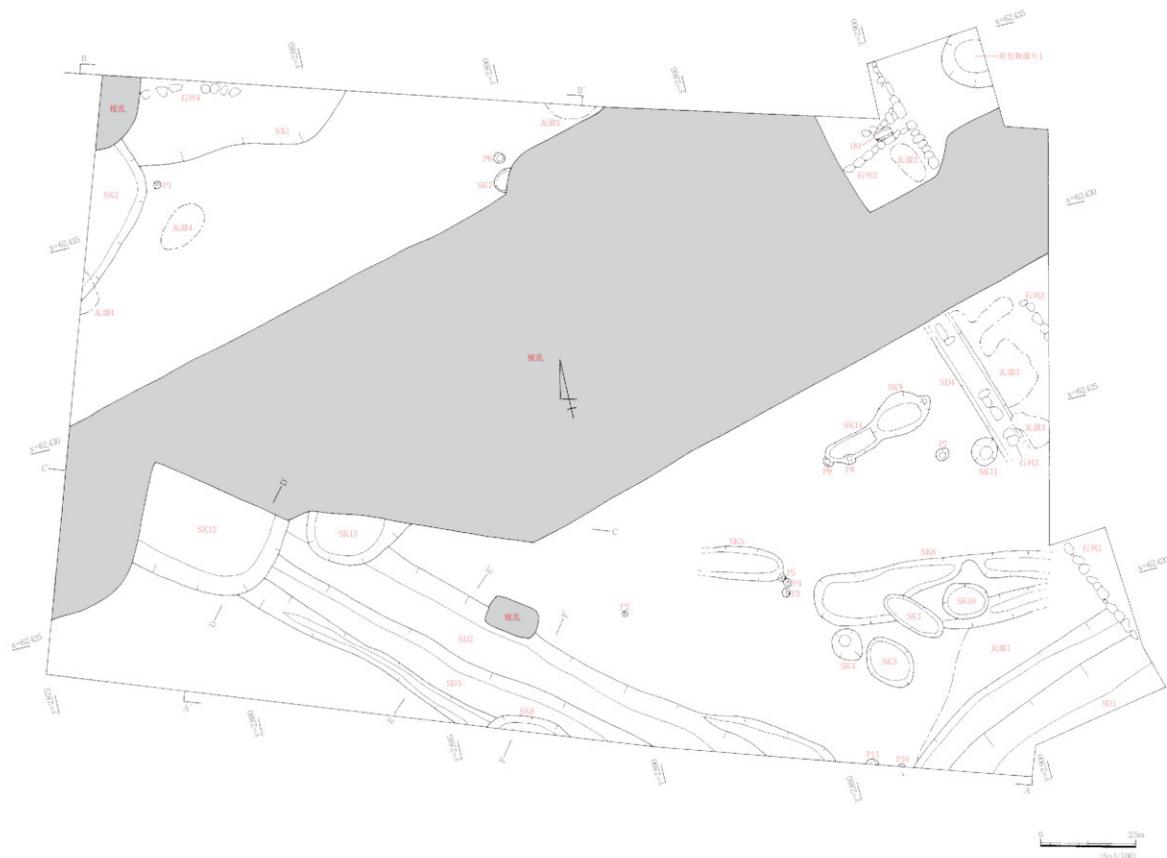


Fig.8 検出構造全体図

第3節 遺構と遺物

1. 概要

今回の調査では、近現代の搅乱が著しかった調査区中央部を除く、東部、南部、北部にて古墳時代から近世の遺構を検出した。

検出遺構は、古墳時代の土坑3基、古代の土坑5基、ピット7個、炭化物溜り1箇所、中世の土坑3基、溝1条、ピット1個、近世の土坑3基、溝3条、ピット1基、性格不明遺構1基、石列4箇所、瓦溜り5箇所である。

近世の遺構群は、近世の遺物包含層II層の下位で検出したもので、調査区の全域にわたって検出されている。一方、古代、中世、古墳時代の遺構は、III層内で検出したもので、南の山裾に近い調査区南側に集中する傾向が認められた。こうした遺構分布の在り方や時代間の違いは、旧江ノ口川の南岸に臨んだ当遺跡の立地環境と、土地利用の変化を反映したものと考えられる。

Tab.1 土坑一覧表

遺構番号	検出位置 検出レベル (標高)	形態	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	埋土	切り合い関係	時期
SK1	南東部 2.2m	長楕円形	1.72	0.63	13	暗褐色粘質シルト	SK6を切る。	古代
SK2	北西部 1.9m	不明	確認長 4.08	確認長 150	41	灰黃褐色粘質シルト		近世
SK3	南東部 2.15m	楕円形	1.50	1.10	19	暗褐色粘質シルト		古墳時代
SK4	南東部 2.0m	楕円形	0.95	0.68	10	暗褐色粘質シルト		古墳時代
SK5	南東部 1.95m	長楕円形か	残存長 1.96	0.80	25	暗褐色粘質シルト	P5に切られる。	古代
SK6	南東部 2.2m	長楕円形か	確認長 6.00	1.95	48	暗褐色粘質シルト	SK10を切る。 SK1に切られる。	古代
SK7	北部 1.16m	楕円形か	0.60	残存長 0.36	12	にぶい黄褐色粘質シルト		中世
SK8	南部 2.16m	不明	確認長 2.36	確認長 0.64	40	灰黃褐色シルト	SD3を切る。	近世か
SK9	南東部 2.0m	楕円形	1.82	1.06	20	暗褐色粘質シルト	SK14に切られる。	古代
SK10	南東部 SK6床面	楕円形	1.10	0.92	16	暗褐色粘質シルト	SK6に切られる。	古墳時代
SK11	南東部 2.0m	楕円形	0.72	0.70	36	にぶい黄褐色シルト		中世か
SK12	南西部 2.2m	不明	残存長 3.88	残存長 2.64	72	灰黃褐色シルト	SD2を切る。	近世か
SK13	南西部 1.9m	不明	2.68	残存長 1.70	56	暗褐色粘質シルト	SD2に切られる。	中世
SK14	南東部 2.0m	長楕円形	3.12	0.60	8	暗褐色粘質シルト	SK9を切る。	古代か
炭化物 溜り1	北東部 1.72m	楕円形か	1.40	確認長 1.20	14	炭化物・褐色紗質シルト		古代

Tab.2 ピット一覧表

遺構番号	検出位置 検出レベル (標高)	形態	径 (cm)	深さ (cm)	埋土	切り合い関係	時期
P1	北西部 1.82m	円形	20	14	灰黄褐色粘質シルト		近世
P2	南東部 2.08m	円形	23	5	にぶい黄褐色粘質シルト		古代か
P3	南東部 2.03m	梢円形	22	6	にぶい黄褐色粘質シルト		古代
P4	南東部 2.0m	円形	22	8	にぶい黄褐色粘質シルト		古代か
P5	南東部 1.95m	円形	20	8	にぶい黄褐色粘質シルト		古代か
P6	北部 1.42m	円形	28	10	にぶい黄褐色シルト		中世か
P7	南東部 1.98m	円形	30	33	灰黄褐色シルト		古代
P8	南東部 1.98m	円形	30	19	にぶい黄褐色粘質シルト	SK14に切られる。	古代
P9	南東部 1.98m	円形	24	40	にぶい黄褐色粘質シルト	SK14に切られる。	古代か
P10	南東部 2.24m	円形	30	25	にぶい黄褐色粘質シルト		不明
P11	南東部 2.5m	円形	40	30	灰黄褐色シルト		不明

2. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構では、土坑3基 (SK3・4・10) が調査区南東部の標高2.15m前後の位置で集中して検出された。該当部分より3m程南側の地点には、岩盤層と風化礫からなる地山が広がっており、これらの遺構が山裾の微高地上に掘削されたことが窺われる。

なお、山裾に近い調査区南西部側では近代の堆積層直下に岩盤が露出する状態であり、古墳時代の遺物包含層と遺構面は、削平を受けすでに消失したと思われる。また南東部側でも検出遺構が非常に浅くなっていること、古墳時代の遺物包含層は後世の整地によって削平されている。

(1) 土坑

SK3 (Fig9・10)

調査区南東部に位置する。平面形は梢円形を呈し、検出規模は長軸1.5m、短軸1.1m、深さ19cmを測る。断面形態は不整形で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色粘質シルトである。

出土遺物は土師器片25点で、これには外面にタタキ目を伴う甕の体部片(1)、ナデ調整で丸底の壺又は甕の底部(2)などが含まれる。SK3は古墳時代初頭に比定される。

SK4 (Fig9)

調査区南東部に位置し、SK3の西に接する。平面形は梢円形を呈し、検出規模は長軸0.95m、短軸0.68m、深さ10cmを測る。断面形態は不整形である。埋土は暗褐色粘質シルトである。

出土遺物は無いが、埋土の共通性や位置関係などから古墳時代の遺構であった可能性が高い。

SK10 (Fig.9・10)

調査区南東部に位置し、古代のSK6に上面を切られている。また古墳時代の土坑SK3・4の北東側に近接する。平面形は橢円形を呈し、検出規模は長軸1.10m、短軸0.92m、深さ16cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は1層：暗褐色粘質シルト、2層：明褐色シルトであり、2層には焼土と炭化物が多量に含まれている。

出土遺物としては、1層から土師器小型丸底鉢(3)、2層から土師器高杯の脚部(4)が出土している。SK10は古墳時代前期に位置付けられる。

(2) 包含層出土の遺物

調査区南東部、SK3・SK4の周辺において、古墳時代前期の壺体部片(5)が出土している。

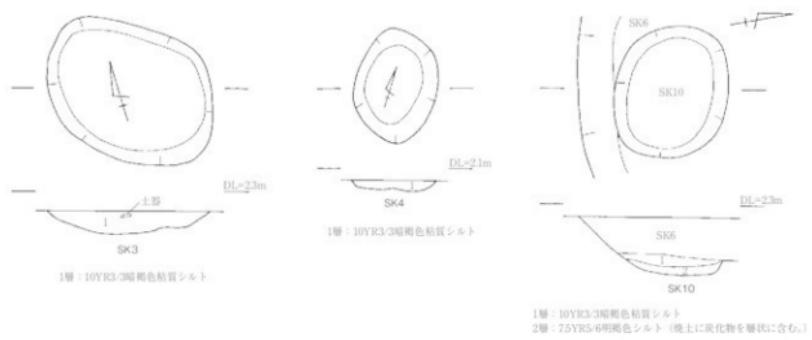


Fig.9 SK3・4・10平面図・セクション図

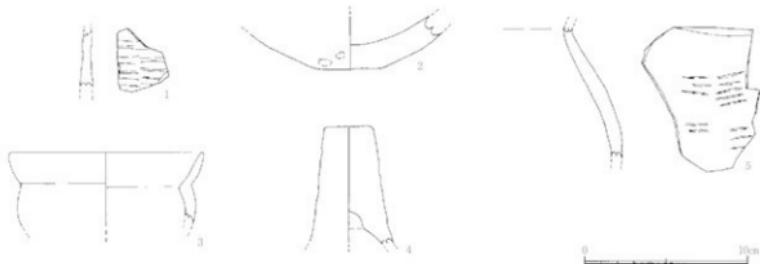


Fig.10 SK3・10・包含層IV層出土遺物実測図 (SK3:1・2、SK10:3・4、包含層IV層:5)

3. 古代の遺構と遺物

古代の遺構では、土坑5基 (SK1・5・6・9・14) とピット7個 (P2～5・7～9) が、調査区南東部の標高20.0～22.0m前後のレベルで近接して検出された。周辺には古墳時代から近世の遺構が集中するが、各々の検出レベルの高低差は少ない。一方、調査区の北東部側では、Ⅲ層の上位にあたる標高1.72mのレベルで炭化物溜り1が検出されており、北へ向かうに従って古代の遺物包含層と遺構検出面が若干低くなっている。

(1) 土坑

SK1 (Fig.11)

調査区南東部に位置する土坑で、古代のSK6を切っている。平面形は長楕円形で、検出規模は長軸1.72m、短軸0.63m、深さ13cmを測る。断面形態は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色粘質シルトで、埋土中に炭化物を多量に含んでいる。

出土遺物は土師器杯・皿11点、壺3点、須恵器杯・皿3点、蓋1点、須恵器甕体部片2点、須恵器細片2点、製塙土器2点で、8世紀後半～9世紀前半の遺物が出土している。

図示したものは、土師器杯(6)・皿(7)・壺(14)、須恵器杯又は皿(11)・皿(12)・蓋(13)、製塙土器(8・9)である。

SK1は8世紀後半～9世紀前半に位置付けられる。

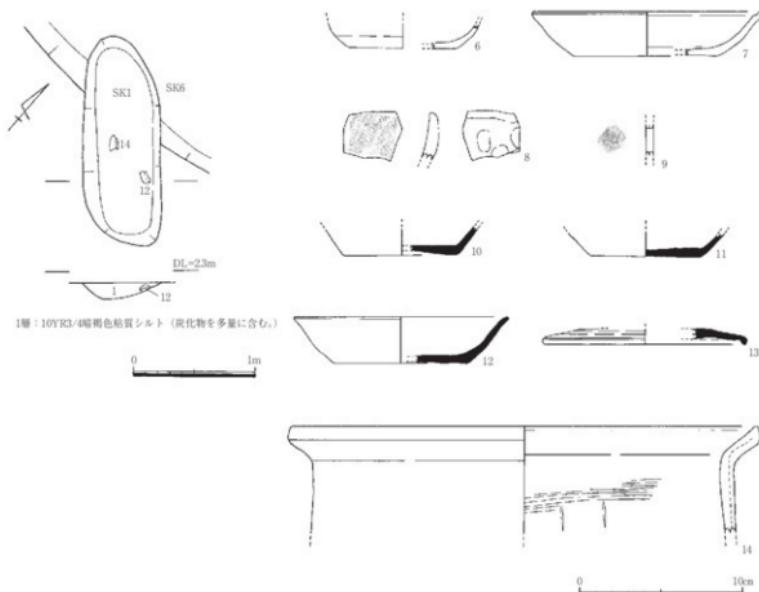


Fig.11 SK1平面図・セクション図・遺物出土状況図・SK1・5出土遺物実測図
(SK1: 6～9・11～14, SK5: 10)

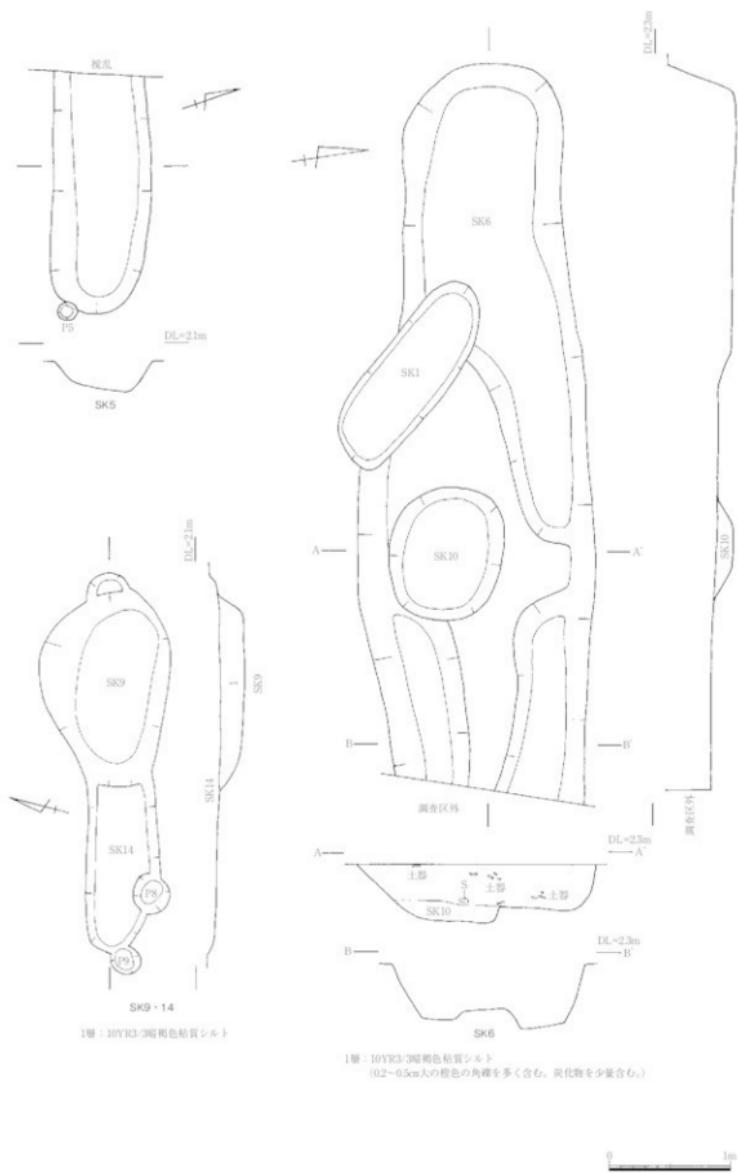


Fig.12 SK5・6・9・14平面図・セクション図・エレベーション図

SK5 (Fig.11・12)

調査区南東部に位置する土坑で、時期不明のP5に切られている。また東側には古代の土坑SK6が近接する。西部側が搅乱を受けるが、平面形は長楕円形とみられ、検出規模は東西残存長1.96m、南北長0.8m、深さ25cmを測る。断面形態は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色粘質シルトである。

出土遺物は、土師器杯又は皿の口縁部片1点、土師器甕の体部片1点、土師器細片3点、須恵器杯2点、須恵器甕の体部片1点、須恵器細片3点である。

図示したものは、須恵器杯(10)である。

SK6 (Fig.12・13～15)

調査区南東部に位置する土坑で、古代の土坑SK1に切られ、古墳時代のSK10を切っている。東部側が搅乱を受けるため全体の規模は不明であるが、平面形は長楕円形とみられ、検出規模は東西残存長6.0m、南北長1.95m、深さ48cmを測る。断面形態は逆台形で、壁は斜め上方に立ち上がる。床面は西部側が窪んでおり、東部側も高低差をもつ。埋土は暗褐色粘質シルトで、炭化物を少量含んでいる。なお、SK6は後述する遺物の内容からみて2時期の遺構が重複している可能性をもつが、埋土の違いが殆ど無く、確認できなかった。

出土遺物は、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・蓋・瓶・甕、灰釉陶器杯、綠釉陶器杯、土鍤、製塙土器である。8～9世紀の遺物を主体とするが、一部に19・36・37等の10～11世紀の遺物が混入している。

図示したものは、土師器杯(15～19)・皿(20～24)・甕(49～52)、須恵器杯(25～34)・皿か(35)・蓋(38～40)・瓶類か(41)・瓶(42)・甕(43～48)、灰釉陶器杯か(36)、綠釉陶器杯(37)、土鍤(56)、製塙土器(53～55)である。

SK9 (Fig.12)

調査区南東部に位置し、古代のSK14に切られる。平面形は楕円形で、長軸1.82m、短軸1.06m、深さ20cmを測る。床面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色粘質シルトである。

出土遺物は土師器甕の体部片1点、土師器細片7点、須恵器細片3点であり、須恵器片は何れも軟質である。

SK14 (Fig.12)

調査区南東部に位置し、古代のSK9を切る。平面形は長楕円形で、長軸3.12m、短軸0.60m、深さ8cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトである。

出土遺物は無いが、SK9との位置関係や埋土の共通性などから、古代の可能性をもつ。

(2) ピット

P2 (Fig.16)

調査区南東部に位置する。規模は径23cm、深さ5cm、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで炭化物を含んでいる。出土遺物は確認できていないが、周辺のピットとの位置関係及び埋土の共通性などから、古代の遺構であった可能性がある。

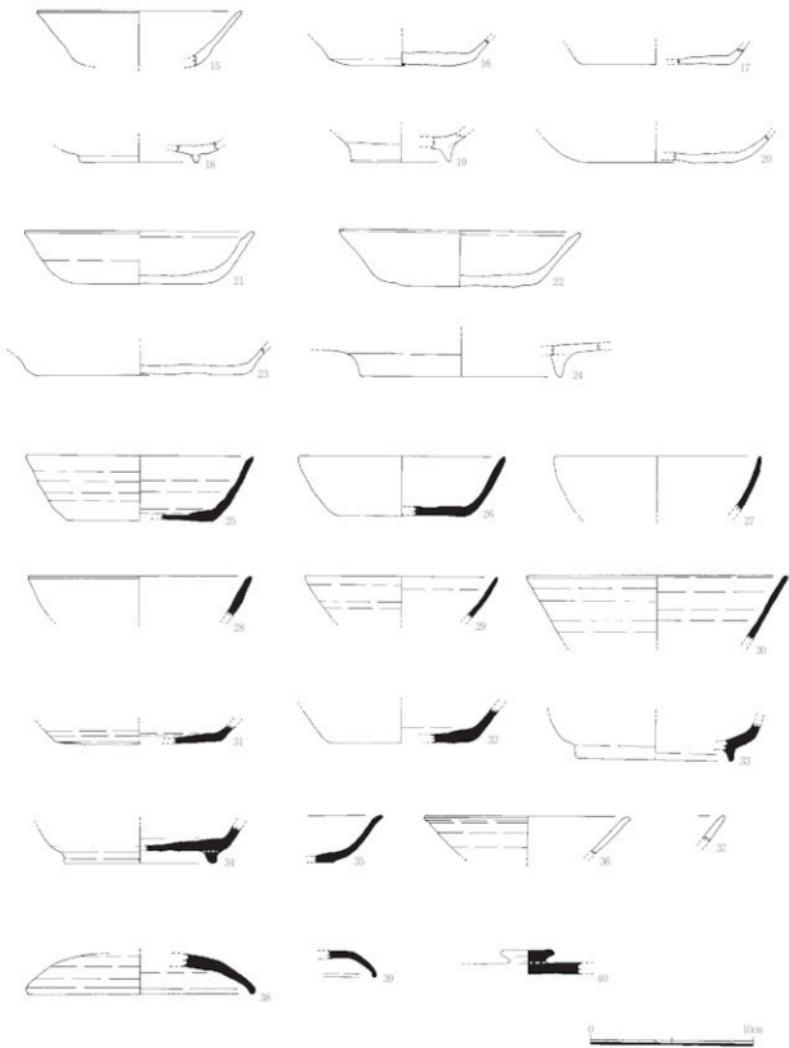
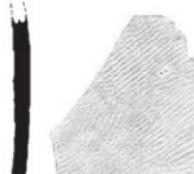
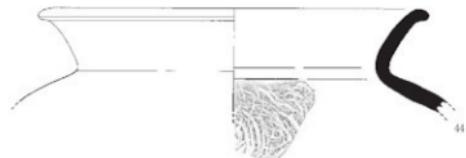
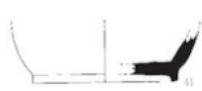


Fig.13 SK6出土遺物実測図 (1)



47

48

49

0 10cm

Fig.14 SK6出土遺物実測図 (2)

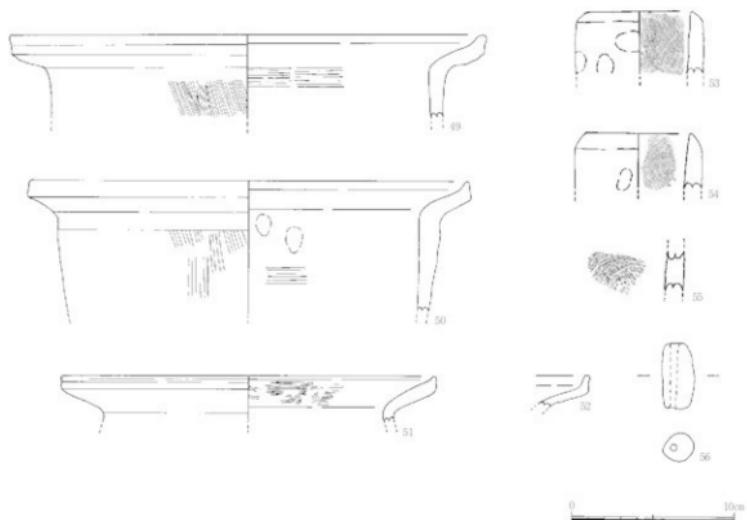


Fig.15 SK6出土遺物実測図 (3)

P3 (Fig.16)

調査区南東部に位置しP4・5と近接する。規模は径22cm、深さ6cm、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで炭化物を含んでいる。埋土中から須恵器壺の体部片1点が出土している。

P4 (Fig.16)

調査区南東部に位置しP3・5と近接する。規模は径22cm、深さ8cm、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで炭化物を含んでいる。出土遺物は確認できていないが、周辺のピットとの位置関係及び埋土の共通性などから、古代の遺構であった可能性が高い。

P5 (Fig.16)

調査区南東部に位置しP3・4と近接する。規模は径20cm、深さ8cm、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトである。出土遺物は確認できていないが、周辺のピットとの位置関係及び埋土の共通性などから、古代の遺構であった可能性が高い。

P7 (Fig.16)

調査区南東部に位置する。規模は径30cm、深さ33cm、埋土は灰黄褐色シルトである。埋土下層から須恵器杯(57)、須恵器蓋(58)、土師器細片2点が出土している。

P8 (Fig.16)

調査区南東部に位置し、P9と近接する。切り合い関係では古代のSK14に切られている。規模は径30cm、深さ19cm、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトである。埋土中から土師器細片1点と須恵器壺の体部片1点が出土している。

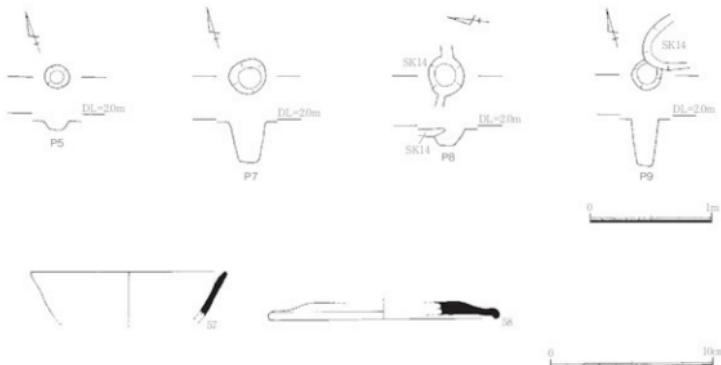


Fig.16 P2~5・7~9平面図・セクション図・エレベーション図・P7出土遺物実測図

P9 (Fig.16)

調査区南東部に位置し、P8と近接する。切り合い関係では古代のSK14に切られている。規模は径24cm、深さ40cm、埋土はにぶい黄褐色粘質シルトである。出土遺物は確認できていないが、P8との埋土の共通性及びSK14との切り合い関係などから、古代の遺構であった可能性が高い。

(3) 炭化物溜り

炭化物溜り1 (Fig.17)

調査区北東部に位置する。炭化物溜り1は試掘調査の際、TP2のⅢ層上位から検出されたもので、検出規模は南北長140m、東西確認長120m、深さ14cmを測る。埋土中には炭化物が多量に含まれており、床面には褐灰色砂質シルト層が薄く堆積している。遺物は、炭化物層内から土師器片が出土している。

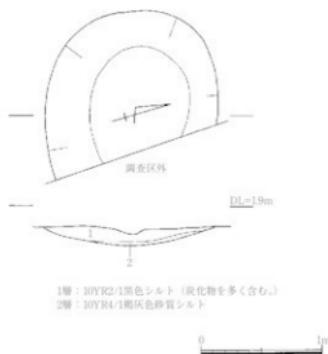


Fig.17 炭化物溜り1平面図・セクション図

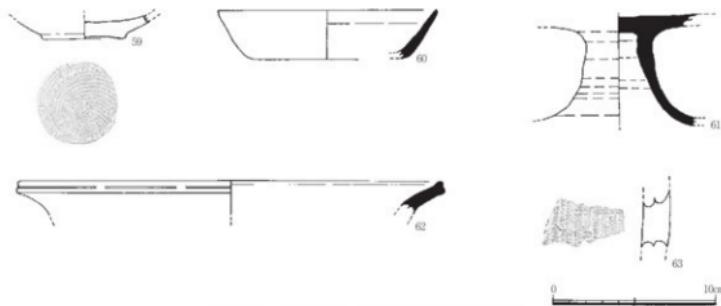


Fig.18 包含層Ⅲ・Ⅳ層出土遺物実測図

(4) 包含層出土の遺物

古代の遺物は、調査区南東部の包含層Ⅲ層内より出土している。図示したものは、59～63である。59は京都系の緑釉陶器小皿で、外底に回転糸切り痕を認める。灰オリーブ色の釉を薄く刷毛塗りする。60は須恵器皿、61は須恵器高杯、62は須恵器甕である。63は瓦で、内面に布目痕を認める。胎土はにぶい黄橙色を呈する。

4. 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、土坑3基 (SK7・11・13)、溝1条 (SD2)、ピット1個 (P6) を検出している。

土坑とピットは調査区の南東部、南西部、北部で検出された。上面を搅乱層によって削平されているものもあり比較が困難であるが、各々の検出面の標高は、南東部のSK11で標高2.0m、南西部のSK13で標高1.9m、北部のSK7とP6で標高1.16～1.42mとなっており、北部側が低くなる傾向がみられる。

溝は、調査区南部にてSD2を検出した。SD2が存在する調査区南部付近では、標高2.2m前後の高さまで白色系の岩盤層が検出されており (Fig.6)、SD2はこの岩盤を掘削することによって形成されている。

(1) 土坑

SK7 (Fig.19)

調査区北部に位置する。東部側が搅乱を受け、また直上まで搅乱層が及んでいたため、浅く全体の規模も不明であるが、検出規模は南北長0.60m、東西残存長0.36m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで、床から西壁にかけて炭化物が厚く堆積している。

出土遺物としては、下層から土師質土器杯 (64・65)、備前焼甕の体部片1点が出土している。

SK11 (Fig.19)

調査区南東部に位置する。平面形は不整円形で長軸0.72m、短軸0.70m、深さ36cmを測る。埋土

はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は土師質土器細片6点のみであるが、埋土の共通性などから、中世の遺構であった可能性をもつ。

SK13 (Fig.19)

調査区南西部に位置し、中世の溝SD2に南壁の上面を切られている。北部が擾乱を受けるため全体の規模は不明であるが、東西長2.68m、南北残存長1.70m、深さ56cmを測る。断面形態は逆台形で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質シルトで、床面から径25cm、厚さ6cmの砂岩角礫が出土している。

出土遺物は、須恵器壺の体部片1点、瓦器椀の体部片2点、土師質土器細片6点、須恵器細片3点である。瓦器椀の出土等からみて、SK13は12世紀後半～13世紀に位置付けられる。

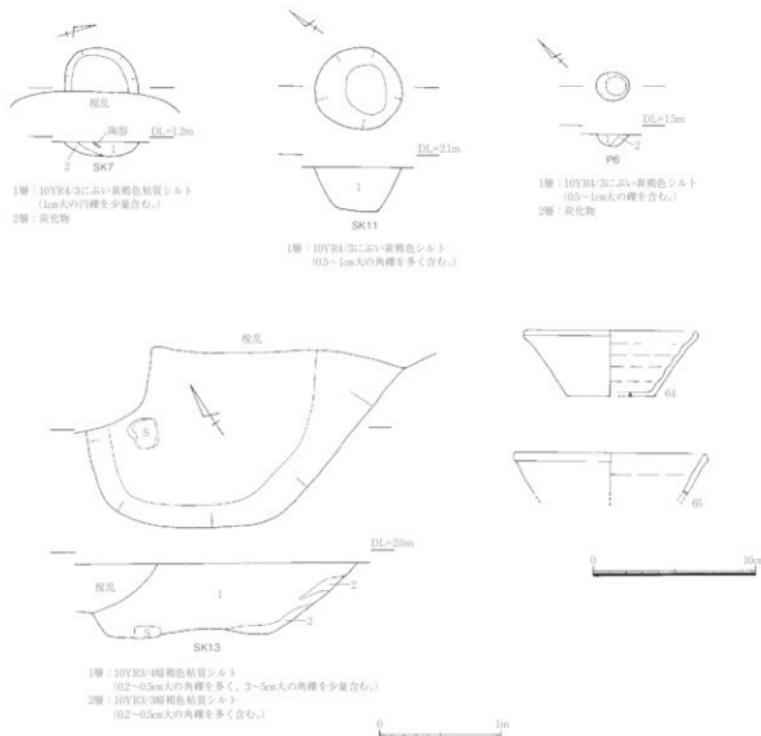
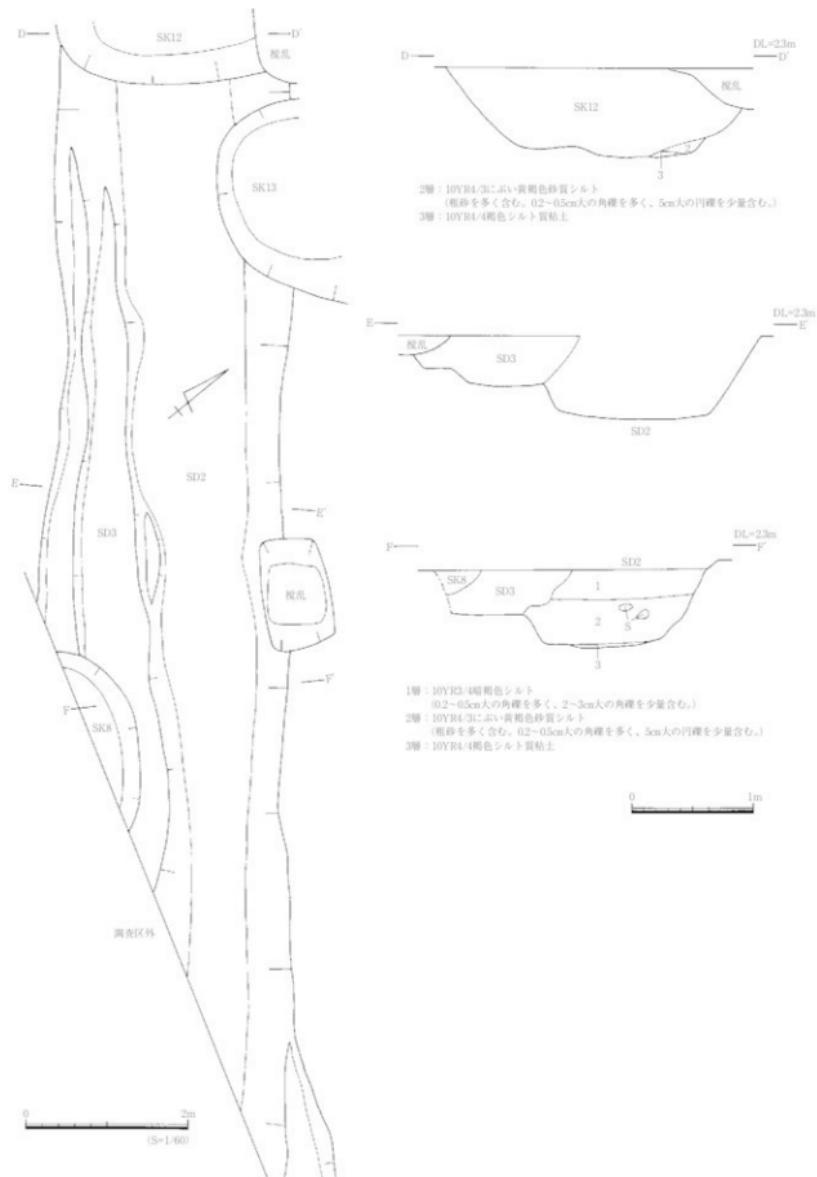


Fig.19 SK7・11・13・P6平面図・セクション図・SK7出土遺物実測図



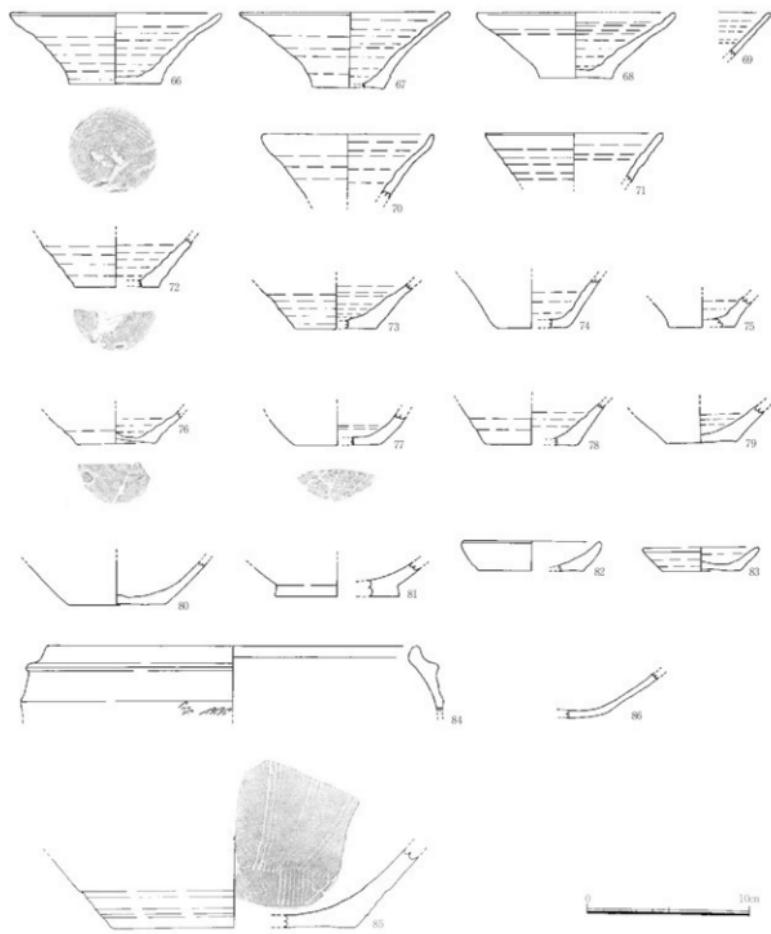


Fig.21 SD2出土遺物実測図(1)

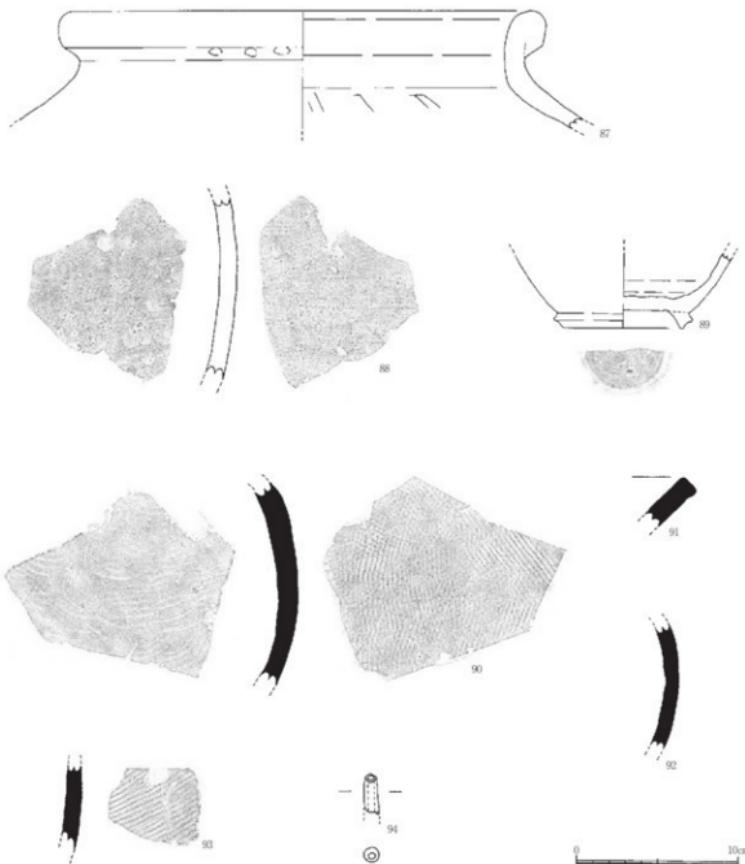


Fig.22 SD2出土遺物実測図 (2)

(2) 溝

SD2 (Fig.20~22)

調査区南部を東西方向に延びる溝で、N-49°-Wの軸方向をもつ。切り合い関係では、近世のSK12・SD3に切られ、中世のSK13を切っている。南部側の上面をSD3によって削平されているため南肩が未検出であるが、検出長は14.1m、検出規模は中央部で残存幅1.80m、深さ68cm、東部で残存幅1.60m、深さ68cmを測る。また断面形態から復元される溝の規模は、中央部で幅1.9m前後になると考えられる。断面形は逆台形で、平坦な床面から壁が斜め上方に立ち上がる。埋土は1層が

暗褐色シルト、2層がにぶい黄褐色砂質シルト、3層が褐色シルト質粘土である。

出土遺物は、土師質土器杯・皿・鍋・土鍤・須恵器壺、陶器擂鉢・壺である。何れも1層からの出土で、特に1層の下位に集中する傾向がある。

図示したものは66～94である。66～80は土師質土器杯。66～71は内外面に強い多段のロクロ目が残り、体部が外方に大きく開く。72～76・78・79も同タイプと考えられるものである。81は円盤状に張り出す底部をもつ。82・83は土師質土器小皿である。84は擂磨型の土師質土器鍋で、体部外面に叩き目を残す。86は土師質土器鍋の底部である。85は備前焼擂鉢。胎土は浅黄橙色を呈し、内面に櫛目が残る。87・88は備前焼壺。89は備前焼の壺又は瓶。90・91・93は須恵器壺。92は須恵器壺又は壺である。94は土鍤である。

出土遺物の内容からみて、SD2の廃絶年代は16世紀に比定される。

(3) ピット

P6 (Fig.19)

調査区北部に位置し、中世のSK7に接する。規模は、径28cm、深さ10cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていないが、SK7との位置関係及び埋土の共通性などから、中世の遺構であった可能性がある。

(4) 包含層出土の遺物 (Fig.23)

Ⅲ層から青磁碗(95)が出土している。95は中国龍泉窯系の青磁碗で、外面にヘラ形による菊弁文、見込みに印花文を施す。酸化焼成氣味で、釉は浅黄色を呈する。

5. 近世の遺構と遺物

近世の遺構は土坑3基(SK2・8・12)、溝及び溝状遺構3条(SD1・3・4)、ピット1基(P1)、性格不明遺構1基(SX1)、石列4箇所(石列1～4)を検出し、その他、瓦溜りを5箇所で確認している。

これらの遺構は何れもⅡ層の下位で検出されている。石列遺構や瓦溜りの検出レベルからみると、近世の生活面は、南部と東部側で標高23m前後にあったとみられる。また、北西部については、標高19m前後にあったことが推定され、当時は北西部側が40cm前後低くなっていたことが分かる。

(1) 土坑

SK2 (Fig.24)

調査区北西部に位置する。西側部分が調査区外に出ているため、全体の規模と形態は不明である

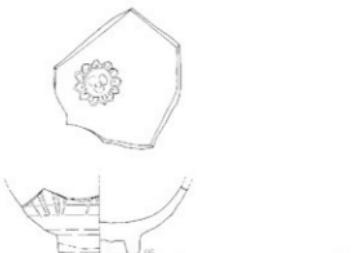


Fig.23 包含層Ⅲ層出土遺物実測図

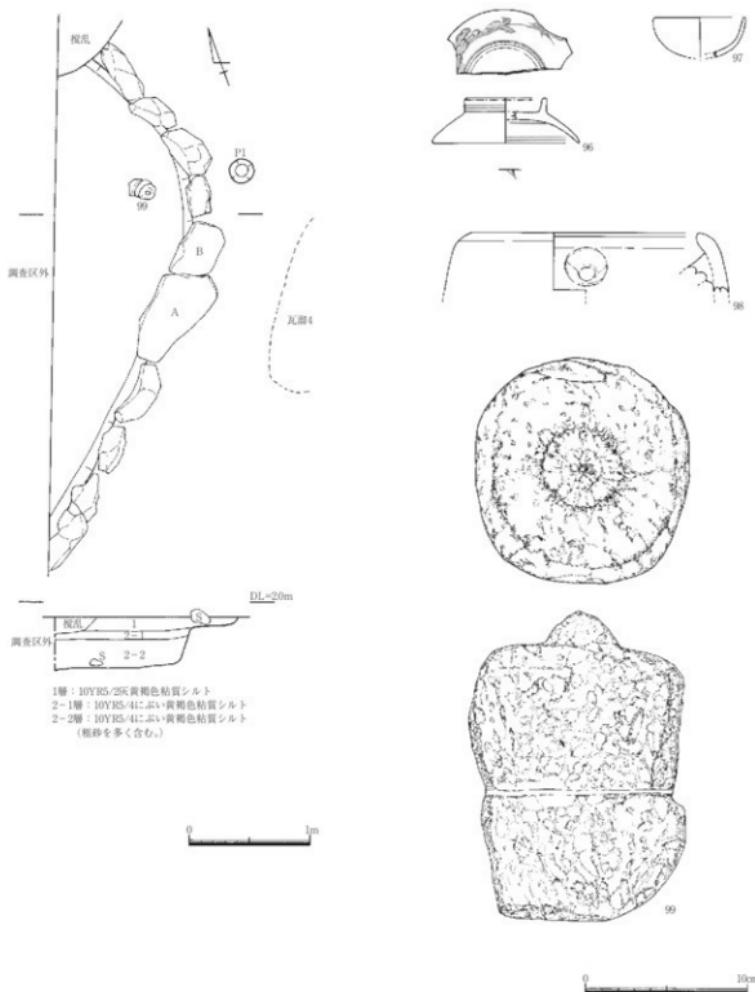


Fig.24 SK2平面図・セクション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

が、南北確認長4.08m、東西確認長1.50m、深さ41cmを測る。床面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。また、壁上部の周縁に沿って10cm程度の浅い掘り込みがあり、径30~50cm大の石灰岩、チャートの角礫が巡らされる。このうち東側の肩部分には、扁平で粗く面取りした径85×40cm大の砂岩礫（礫A）と、扁平で四角く面取りした径45×30cm大の砂岩礫（礫B）が並んで置かれている。埋土は1層：灰黄褐色粘質シルト、2-1層・2-2層：にぶい黄褐色粘質シルトで、2-2層には粗砂が多く含まれる。また最上面には、瓦溜4の遺物が広がっている。

遺物は、1層から染付碗蓋(96)・灰釉小杯(97)・土師質土器焜炉(98)等の近世陶磁器・土器、2-2層内から灰釉土瓶の口縁部片、肥前産の刷毛目鉢、堺産擂鉢、瓦片、床面上から五輪塔の空・風輪(99)が出土している。

図示したものは、染付碗蓋(96)・灰釉小杯(97)・土師質土器焼炉(98)、五輪塔(99)である。99は砂岩製五輪塔の空・風輪の部分である。風輪部の三面は転用のためか削られて平たくなっている。一面は旧状を残しており、梵字が彫り込まれていた痕跡はあるが摩滅により判読は不能である。96

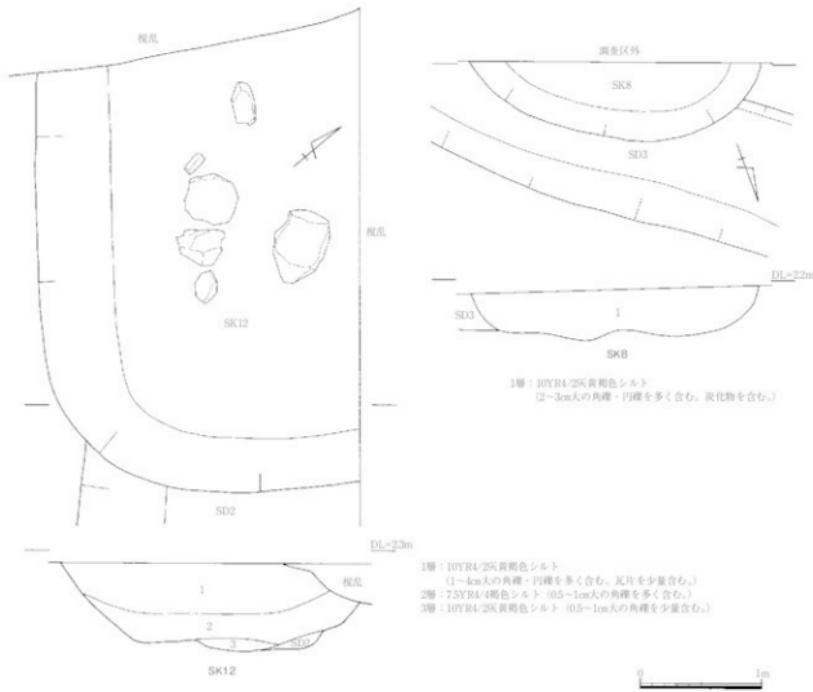


Fig.25 SK8・12平面図・セクション図・礫出土状況図

は能茶山窯産の碗蓋で19世紀中葉の製品である。

SK2の廃絶年代は19世紀中葉に比定される。

SK8 (Fig.25)

調査区の南部に位置し、近世の溝SD3を切っている。南部の大部分が調査区外に出ているため規模、形態は不明であるが、東西確認長2.36m、南北確認長0.64m、深さ40cmを測る。断面形は不整形で、床面は高低差をもつ。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいる。

出土遺物は確認できていないが、埋土及びSD3との切り合い関係からみて、SK8は近世に比定される。

SK12 (Fig.25)

調査区の南西部に位置する大型の土坑で、中世の溝SD2と近世の溝SD3を切っている。北部と西部が搅乱を受けるため全体の形状は不明であるが、東西残存長3.88m、南北残存長2.64m、深さ72cmを確認している。埋土は灰黄褐色シルトと褐色シルトである。

出土遺物は確認できていないが、1層から径30～60cm前後のチャート角礫が出土している。

(2) 溝・溝状遺構

SD1 (Fig.26～35)

調査区南東部を東西方向に延びる溝で、N-72°-Eの軸方向をもつ。切り合い関係では、近世の石列1が溝北岸の埋土上面に乗っており、石列1が後続する。北岸のライン以外は調査区外に出ているため、全体の規模は不明であるが、幅26m、深さ130cmまでを確認している。

部分的な検出にとどまっているため、床部分及び溝断面の形状は不明であるが、北岸に向かって壁が斜め上方に立ち上がっていく状況が確認できた。また、北肩部分には幅70～80cm前後のテラス状の段があり、溝北岸のテラスに沿って径40cm前後の灰白色石の角礫が並ぶ様に出土している。

埋土は1～1層：灰黄褐色シルト、1～2層：黒褐色質シルト、2層：褐色シルト質粘土、3～1層：褐色砂質シルト、3～2層：黒褐色シルト質砂である。最下層の3～1・3～2層はSD1機能時の埋土にあたり、木片や木屑、粗砂が多く含まれている。また、2層と1～1・1～2層は、溝が機能を失い埋没する際の埋土と考えられるものである。このうち1～1・1～2層内には瓦片と漆喰のブロックや、灰白色的角礫が多量に含まれており、周辺の瓦葺き建物や塀の取り壊しに伴う廃棄遺物がSD1の最上面に廃棄された段階のものと考えられる。

出土遺物は近世陶器と土器、瓦片、鉄釘で、その殆どが1層から出土している。2・3層からの出土遺物は少量であるが、2層から鉄釉の陶器鉢(112)、3層から17世紀後半～18世紀前半の肥前産灰釉丸碗の体部片と土師質土器片が出土している。

図示したものは100～168である。このうち、112が2層、その他は何れも1層からの出土である。100～108は磁器。100～104は肥前産及び肥前系の染付中碗。105は肥前産の染付小碗。106は肥前産の色絵酒杯である。107は肥前産の白磁紅皿。108は肥前産又は肥前系の染付鉢である。

109～115は陶器。109は肥前産又は肥前系の灰釉中碗。110は能茶山窯の鉄釉小皿で、見込みを蛇の目釉剥ぎし白土を刷毛塗りする。111は肥前内野山窯の蛇の目釉剥ぎ緑釉小皿で18世紀前半の



Fig.26 SD1平面図・セクション図・礫出土状況図

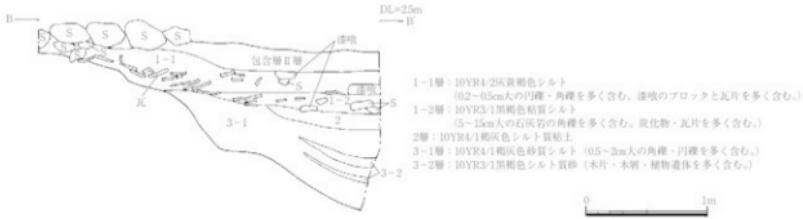


Fig.27 SD1 セクション図

製品である。112は鉢で内外面に鉄錆を施す。113は土瓶、114は土瓶の蓋で、ともに鉄軸を施す。能茶山窯の製品とみられる。115は瀬戸・美濃産の火鉢で、六角形に面取りし外面に型による陽刻文様を施す。

116は土師質土器の五寸皿で外面に回転ケズリを施す。117は蓋で、土師質土器又は陶器の未製品か。118~121は寛永通宝。122~127は鉄釘である。

128~168は瓦。128は鬼瓦で、陰刻による猪の目文を施す。二次焼成を受けにぶい橙色に発色している。129は三巴文の棟飾瓦。130・131は軒丸瓦で、130は三ツ葉柏文、131は三巴文である。143は軒平瓦で、中心飾りが略化した丁字文又は三花文。132~142・144は軒棟瓦及び、軒棟瓦とみられる瓦片である。このうち132~136・139~141が右棟瓦、137・138が左棟瓦にあたる。132~134・136は中心飾りが三巴文、137・138・141は中心飾りが丁字文である。145~147は丸瓦、148~150は小片で形態が分かり難いが棟瓦の一部か。151は平瓦、157・161は棟瓦。152~156・158~160・162~168は、棟瓦や平瓦等の一部とみられるが小片のため形態が良く分からず。これらのうち、146は「□キ」、155・156は「アキ」、145・158は「アキ五」、136・157は「アキ□」、147は「安喜」、133~135・151~154は「御瓦師」銘印をもち安芸（高知県安芸市）産。139は「中友」、150は角棒内「中山林」、140・149・159は小判杵内「中己」、160は角棒内「中己」銘印をもち、中山田（高知県香南市野市町中山田）産。137・138・161~163は角棒内「徳民」銘印をもち、徳王子（高知県香南市香我美町徳王子）産。148は角棒内「葦生□」銘印をもち葦生野（高知県香美市香北町葦生野）産。164は角棒内「堺大小路」、166・167は「○」、168は丸棒内「堺」銘印をもち、堺（大阪府堺市）の製品である。165は角棒内「横濱源」銘印か。また、143も銘印をもつ。

SD1の廃絶年代は19世紀中葉に位置付けられる。

SD3 (Fig.36)

調査区南部を東西方向に延びる溝で、N~50°~Wの軸方向をもつ。切り合い関係では、近世のSK8・SK12に切られ、中世のSD2を切っている。検出長は10.8m、検出規模は幅1.5m、深さ44cmを測る。断面形態は不整形で、平坦な床面から壁が段をもしながら立ち上がっている。また南側の岸に沿ってテラス状の高まりをもつ。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は近世陶磁器と土器、瓦片である。

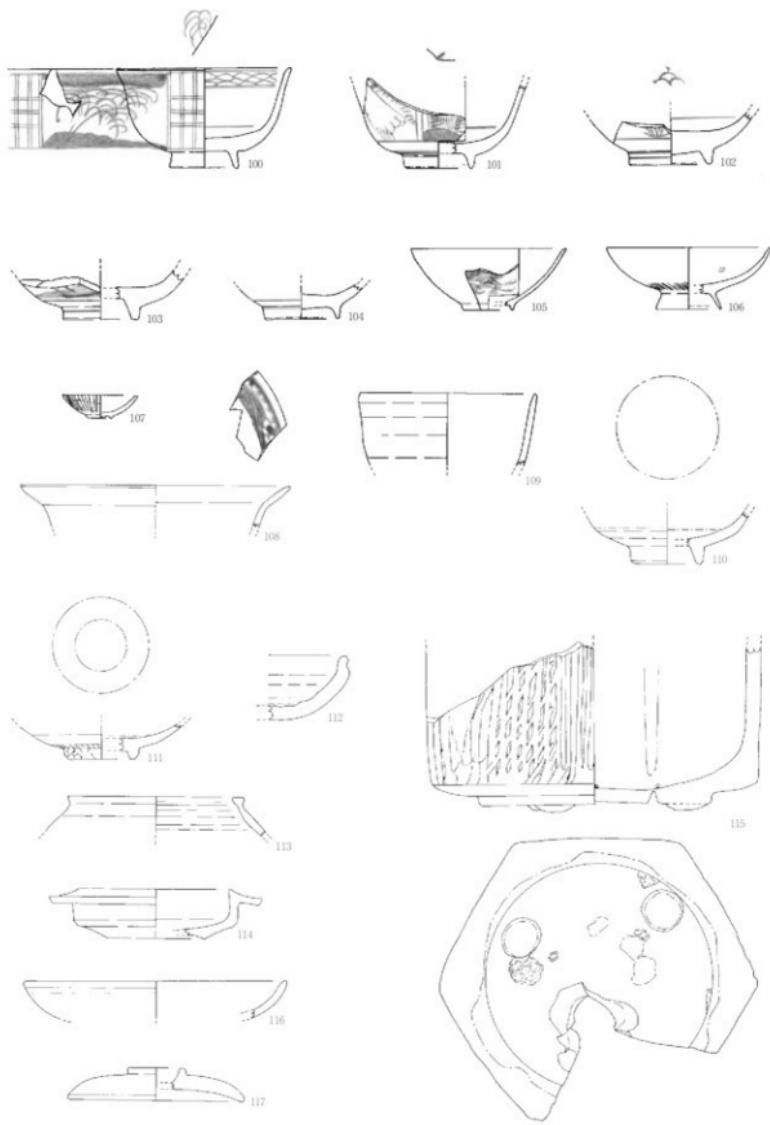


Fig.28 SD1出土遺物実測図 (1)

0 10mm

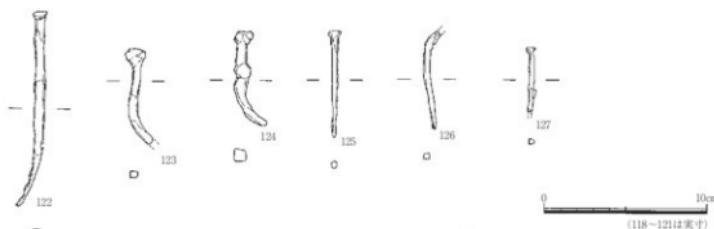


Fig.29 SD1出土遺物実測図 (2)

図示したものは169～179である。169～175は磁器。169は肥前産の染付端反形小皿。170・173は中国漳州窯系の青花大皿。171は肥前産の染付鉢。172は肥前産の染付中皿で、高台内銘は「大明成化年製」か。174・175は青磁製品で器種不明。ともに外面に型による陽刻文様を施す。

176～179は陶器。176・177は肥前産又は肥前系の灰釉碗。178は肥前産の灰釉小皿。179は肥前内野山窯の見込み蛇の目釉剥ぎ小皿で、外面に灰釉、内面に銅緑釉を施す。

SD3の廢絶年代は18世紀以降に比定される。

SD4 (Fig.39)

調査区東部を南北方向に延びる溝状遺構で、N - 17° - W の軸方向をもつ。周囲には瓦溜3が広がっており、SD4の上面には石列3が同じ軸方向をもって伸びている。南北が搅乱されており、検出長は3.8m、検出規模は幅0.85～1.0m、深さ10cmを測る。床面はほぼ平坦である。埋土は褐灰色シルトで、埋土中に瓦片を少量含んでいる。

SD4の性格、時期等の詳細は不明であるが、石列3に先行する。

(3) ピット

P1 (Fig.37)

調査区北西部に位置し、西側には近世のSK2が近接している。検出規模は径20cm、深さ14cm、埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は、埋土中から瓦片1点が出土している。

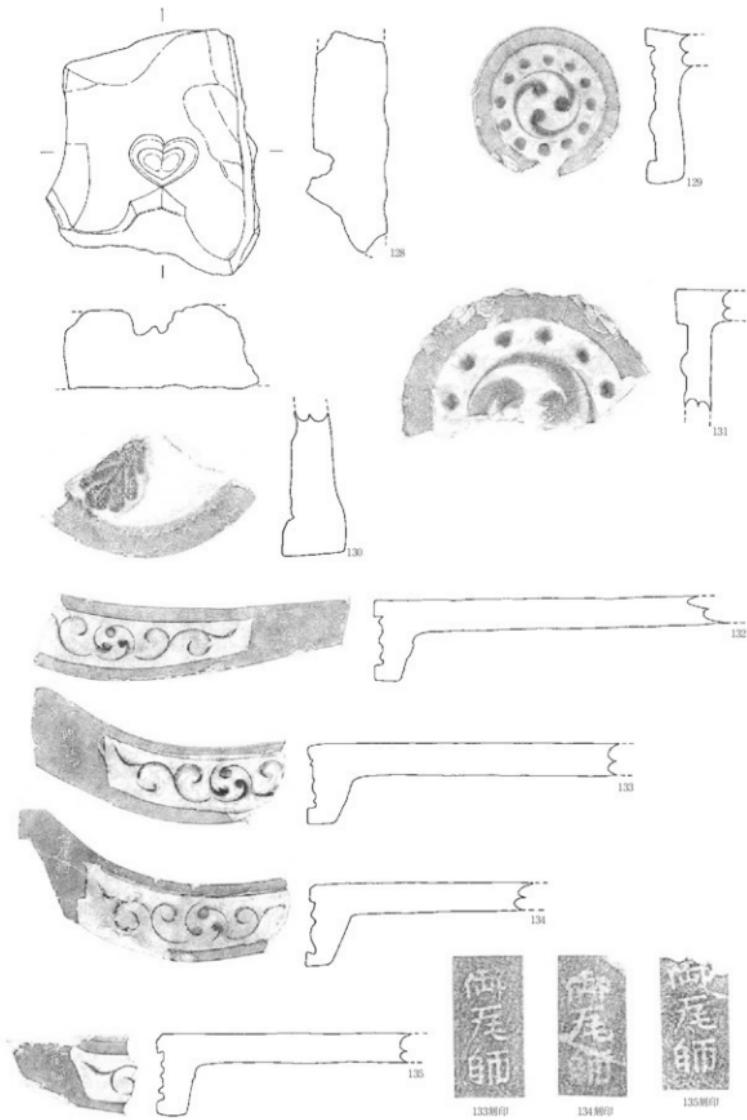


Fig.30 SD1出土遺物実測図 (3)

0 10cm
(刻印は実寸)

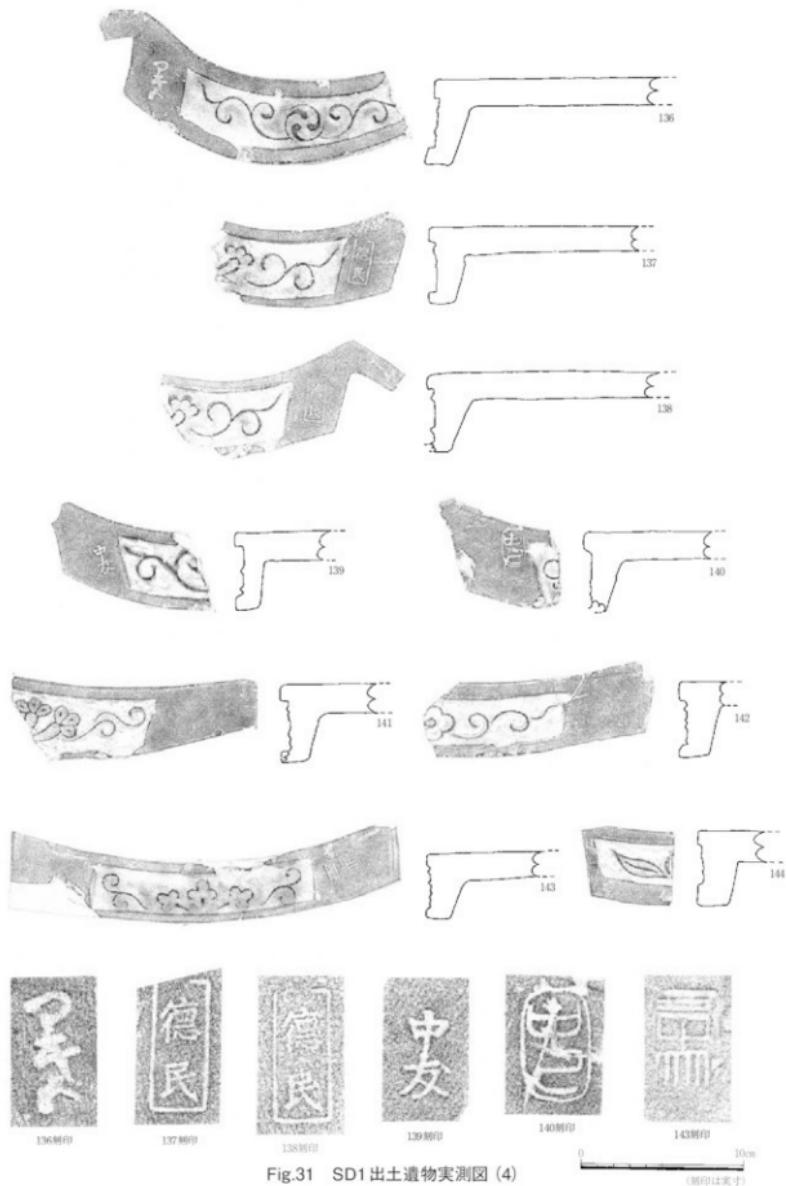


Fig.31 SD1出土遺物実測図(4)

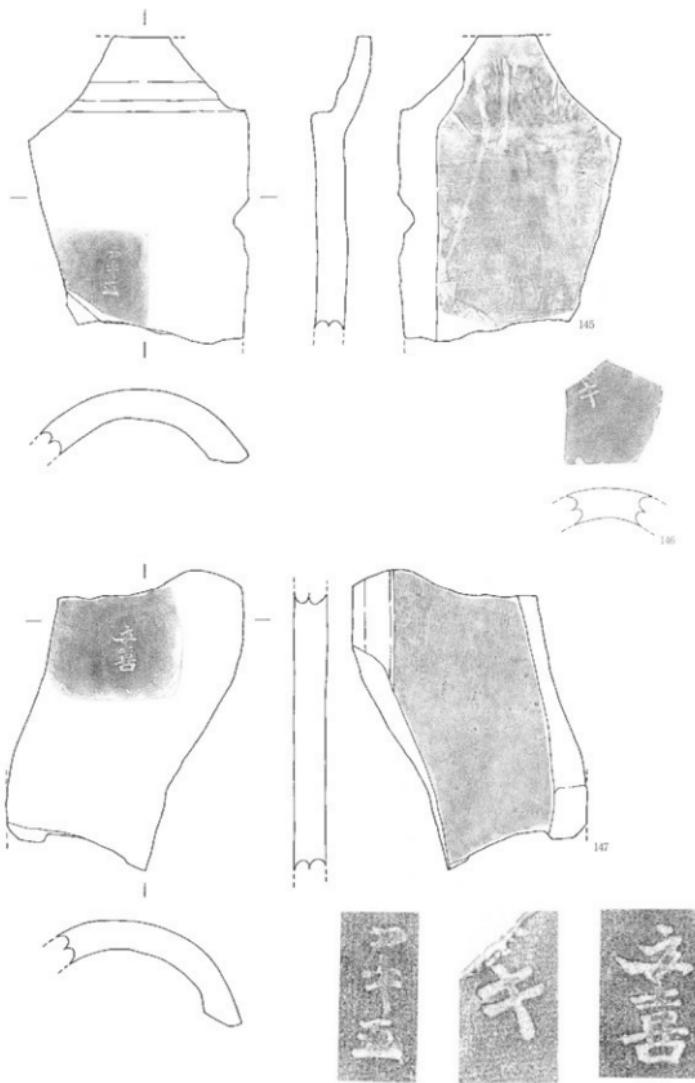


Fig.32 SD1出土遺物実測図 (5)

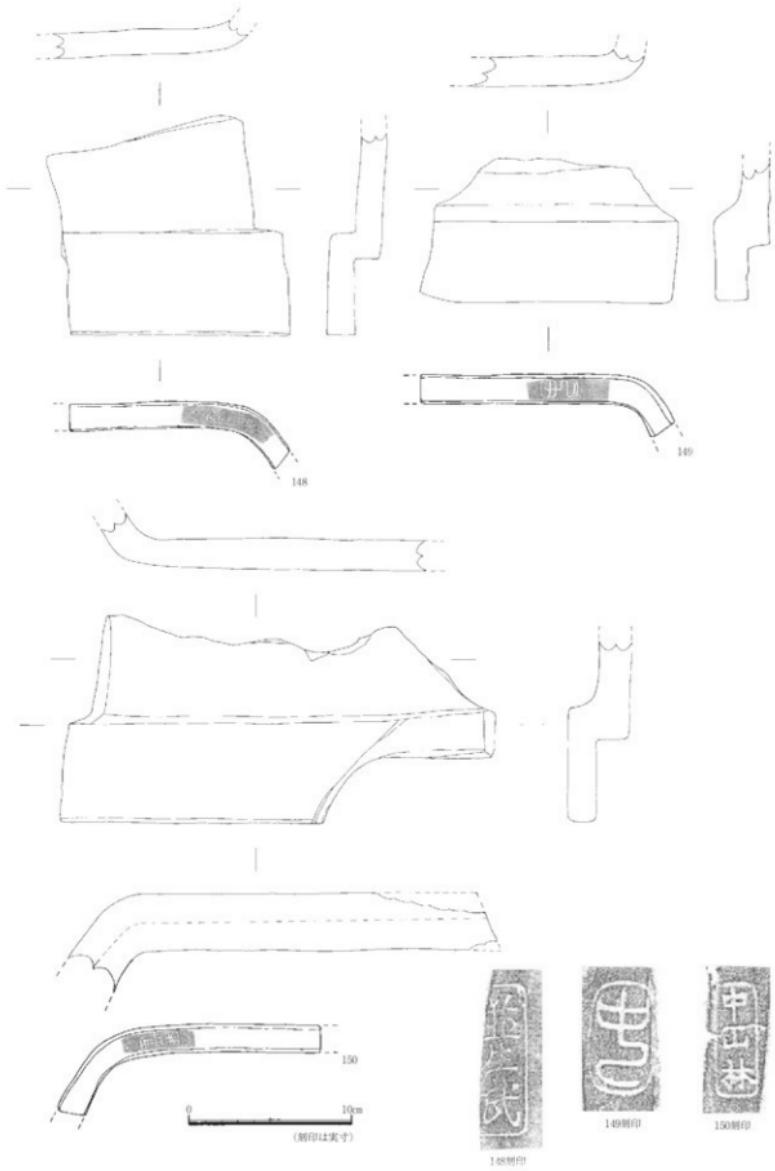


Fig.33 SD1出土遺物実測図(6)

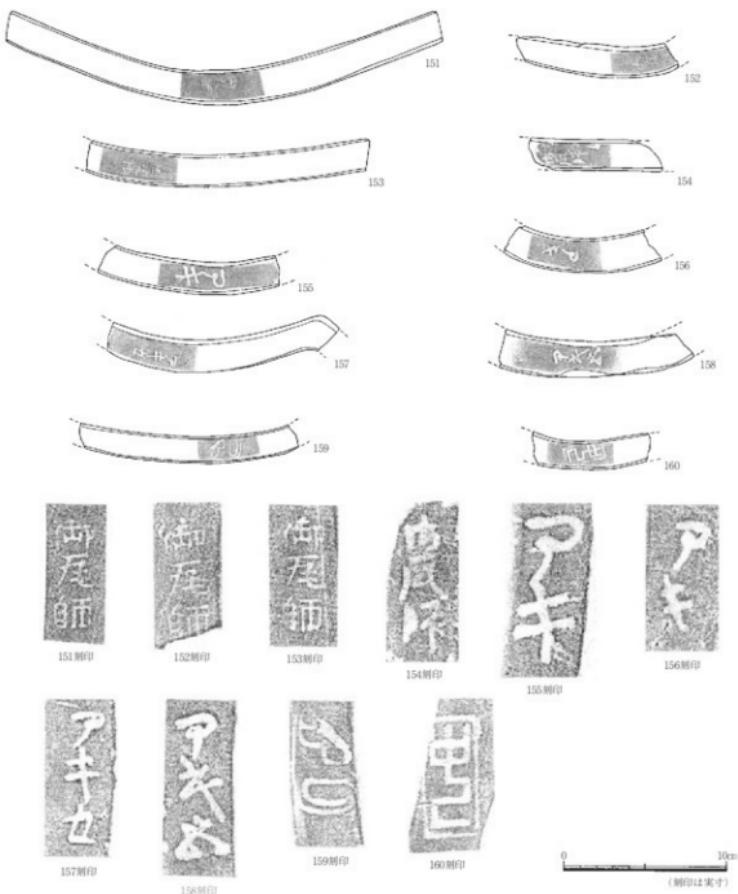


Fig.34 SD1出土遺物実測図 (7)

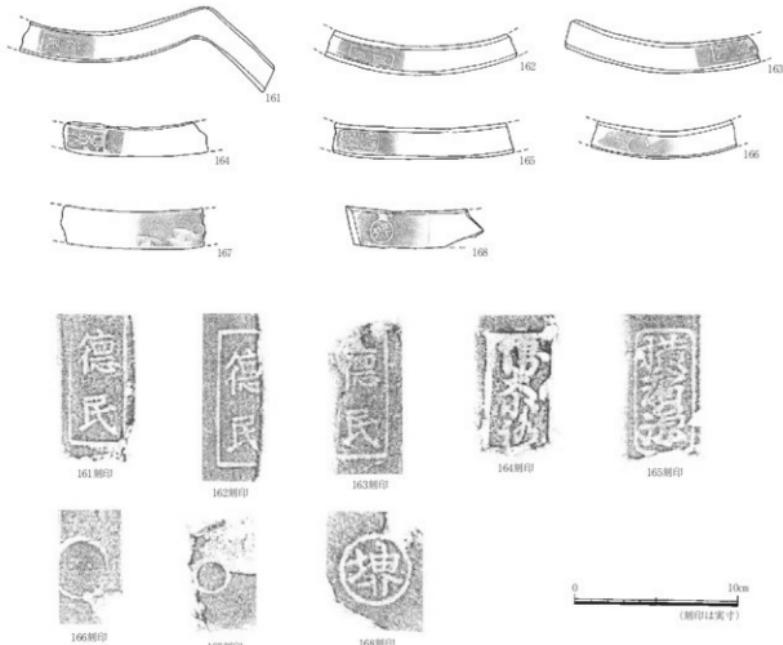


Fig.35 SD1出土遺物実測図 (8)

(4) 性格不明遺構

SX1 (Fig.7・37)

調査区の北西端に位置する落ち込み状の遺構で、西侧をSK2に切られる。また、調査区の北壁セクション (Fig.7) によると、SX1の上面には包含層Ⅱ層が堆積するとともに、西侧部分の上面に石列4が並んでいる。部分的な検出であるため全体の形態と規模は不明であるが、東肩から床面までの深さは約80cmを測る。床面は平坦で、壁が斜め上方へ緩やかに立ち上がっている。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中に砂を多く含んでいる。

出土遺物は僅少であるが、埋土中から肥前産の染付丸形中碗 (180) が出土している。SX1は18世紀以降に比定される。

(5) 石列

調査区東部で数組の石列を検出した。搅乱を受ける部分が多いため、各々の正確な規模を把握することができないが、南北方向の石列は何れも同じ軸方向をもっており、南北16.5m以上の範囲にわたって同延長上に延びる様子が確認された。また2条の石列が並行することや、直角に交わる東

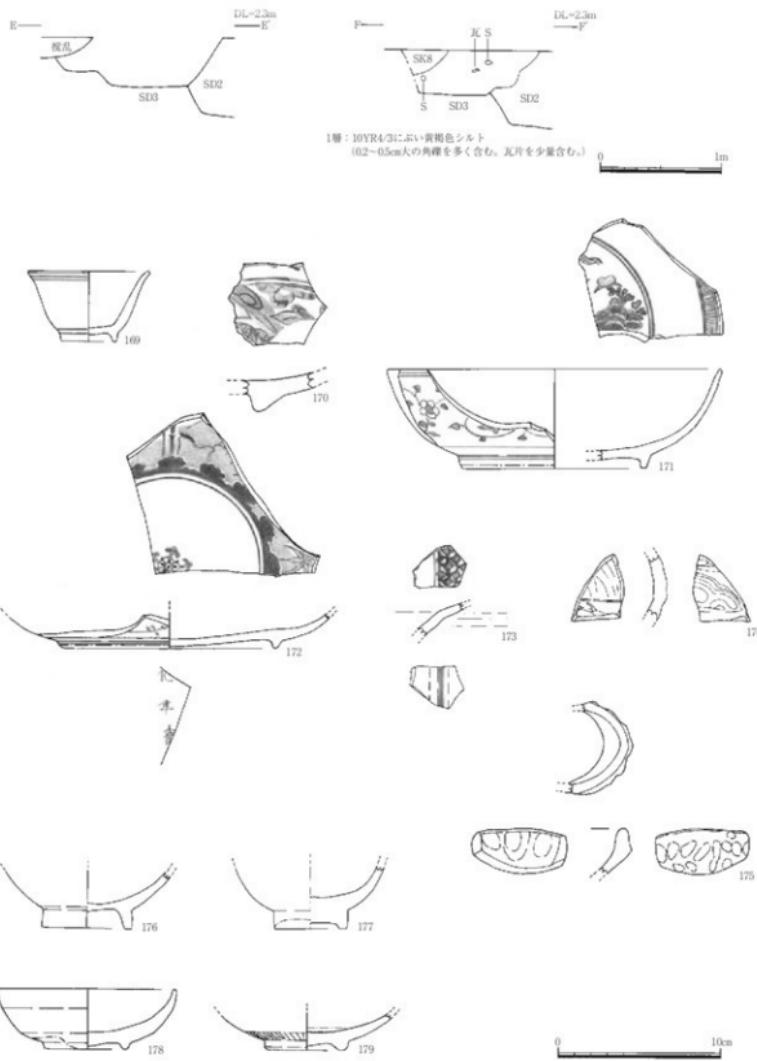


Fig.36 SD3 セクション図・エレベーション図・出土遺物実測図

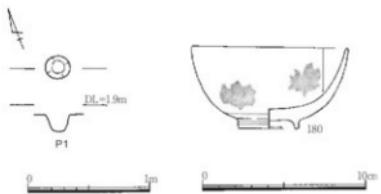


Fig.37 P1平面図・エレベーション図・SX1出土遺物実測図

西方向の石列が存在することなどから、本来は東西幅2.5mで長方形のプランをもつ石列の一群であったことが分かる。

石列1 (Fig.38)

調査区南東隅にて検出された石列で、N - 17° - Wの軸方向をもつ。南部と北部が調査区外に出るため検出長は3.2mで、径30~40cm前後の石灰岩とチャートの角礫が南北方向に並んでいる。周辺の石列2・3との関係や石組の状況からみて、西側を正面にするとみられる。

他遺構との前後関係についてみると、南北セクション (Fig.38.A - A') では、漆喰や瓦片を含むSD1 - 1層の上面に石列1の一部が乗っており、SD1廃絶後に石列1が設けられたと考えることができる。また、石列の西側には瓦溜1が広がっている。

堆積状況 (Fig.38.B - B') を見ると、中世以前の包含層Ⅲ層を掘り込むようにして石列が設置され、列の背面に5~10cm大の石灰岩角礫を含む褐色シルト層（1層）が堆積している。また石列の西側正面には近世の遺物包含層Ⅱ層が堆積し、その上面に漆喰と瓦片を含む瓦溜1が広がる。

出土遺物としては、石列背面の1層内から関西系の鉄釉壺、鉄釉擂鉢、染付磁器、土師質土器焜炉など19世紀の遺物が出土している。

1層からの出土遺物及び周辺遺構との関係からみて、石列1はSD1廃絶直後の19世紀中葉に構築され、その後瓦溜1~3・石列2・3とともに廃絶したとみられる。

石列2 (Fig.39・40)

調査区東部に位置する。軸方向はN - 17° - Wで、チャートと石灰岩の角礫が南北方向と東西方向に並ぶ。南部側と西部側が搅乱を受けて残存せず北部も調査区外となるため、石列の一部を検出したのみであるが、石列1・3の配列との関係性をみると、本来は東西幅2.5mの長方形のプランをもつ石列が、南北に2組存在していたと推定される。

この南北の石列の間には幅30cm程の空間があり、この間に素焼きの土管(181)が据え置かれている様子が確認された。形態からみて、数個の土管が組み合わされて排水機能を果たしたとみられるが、残存するものはこれのみであった。また、石列の背面側には10cm前後の小型の石灰岩角礫が散在し、その間に瓦と陶磁器が廃棄された瓦溜2が広がっている。

図示したものは土管(181)である。素焼きで、胎土はにぶい黄橙色を呈する。粘土紐積み上げ成形で、外面にハケ目調整を施す。法量は径21.0~21.5cm、孔径17.0cm、厚さ1.4cm、残存長62.3cmを測る。

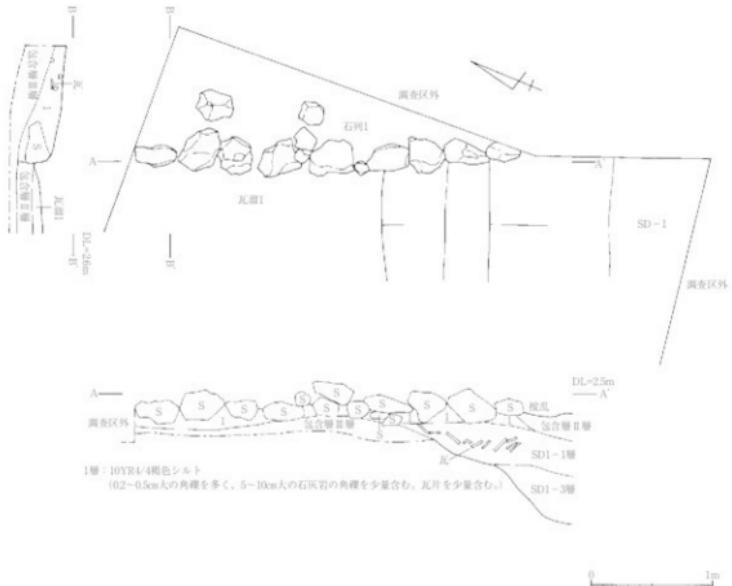


Fig.38 石列1・瓦溜1平面図・セクション図・礫出土状況図

石列1・3、瓦溜1～3との関係性からみて、石列2の廃絶年代は19世紀中葉に比定される。

石列3 (Fig.39)

調査区東部に位置する。軸方向はN-17°-Wで、チャートと石灰岩の角礫からなる石列2条が並行して南北方向に延びる。南部側と北部側が搅乱を受けて残存しないが、石列1・2とは、同延長上にある。

西側の下面では、同方向に延びる浅い溝状遺構SD4が検出されている。SD4の埋土上面に石列3が乗っていることからSD4が先行することが分かるが、溝が石列の掘り方として掘削されたのか、別途の遺構であったのかは特定できない。また、石列3の背面側には瓦片と陶磁器が廃棄された瓦溜3が広がっている。

石列1・2、瓦溜3との関係性からみて、石列2の廃絶年代は19世紀中葉に比定される。

石列4 (Fig.7)

調査区北西端にて検出したもので、SX1の上面を切っている。石は径30～40cmの大形の大型の角礫と径15～20cmの大形の小型の角礫からなり、石組の面も不揃いである。石材はチャートと石灰岩である。

性格は不明であるが、SX1との前後関係からみて18世紀以降に比定される。

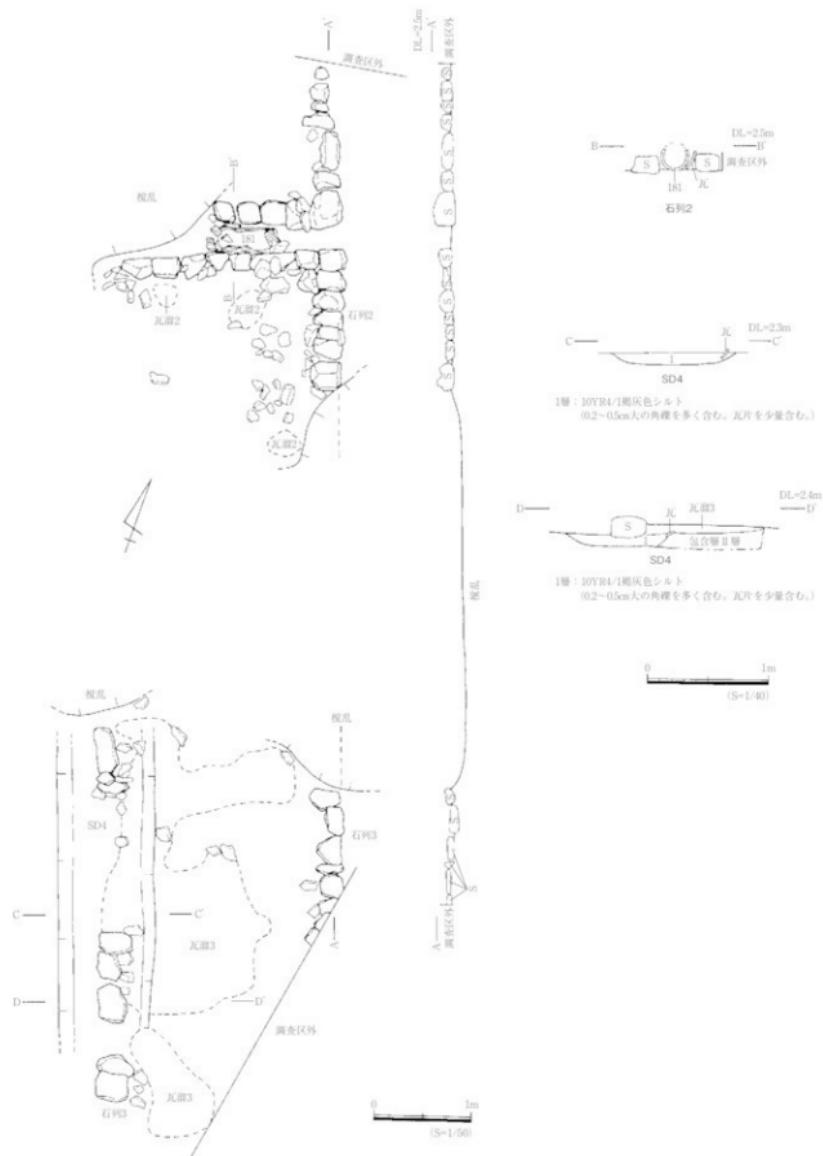


Fig.39 石列2・3・SD4・瓦溜2・3平面図・セクション図・エレベーション図・礫出土状況図

(6) 瓦溜り

瓦溜1 (Fig.38・41～43)

調査区南東部、石列1の西側に広がる瓦溜りである。瓦片とともに、陶磁器・土器が廃棄されたもので、漆喰のブロックを多く含んでいる。出土遺物は陶磁器、土器、瓦片、鉄釘である。

図示したものは182～217である。

182～185は染付磁器。182は能茶山窯の端反形中碗。183は肥前産の丸形小皿。184は能茶山窯産の皿又は鉢で、高台内に角枠内「茶」銘をもつ。185は肥前産の小瓶である。

186は中国龍泉窯系の青磁碗で、オリーブ灰色の釉を施釉する。

187～193は陶器。187・188は尾戸窯の灰釉碗。187は絵を描き、灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施釉する。189は京都系の灰釉半球形小碗である。190は広東形中碗で、胎土は黄灰色を呈し、光沢の強い灰オリーブ色の釉を施釉する。能茶山窯産の可能性をもつ。191は能茶山窯の鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿である。192は鉄釉鍋で、能茶山窯の製品か。193は備前焼の掻鉢である。

194・195・197は土師質土器、196は瓦質土器である。194は関西産の丸形焜炉で、胎土中に金雲母を含む。195は関西系の丸形焜炉である。196は火鉢で、外面に多段の沈線を巡らせる。197は竈で、前方に窓をもつ。

198～217は瓦。198・199は軒棟瓦で、ともに右棟瓦にあたる。198は中心飾りが三巴文である。200は軒棟瓦又は軒平瓦とみられ、中心飾りが花文である。201～203は丸瓦、217は棟瓦、204～216は棟瓦又は平瓦等の一部とみられる。これらのうち、198・199は角枠内「いおろい榮」銘印をもち、五百歳（高知県香美市香北町五百歳）産。201・206は「アキ」、207は「安㐂」、204は角枠内「御瓦師」、205は「御瓦師」銘印をもち安芸（高知県安芸市）産。208は角枠内「中山林」、209は角枠内「中

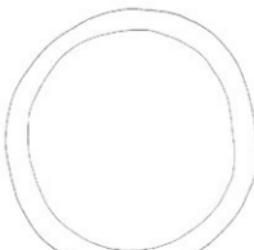
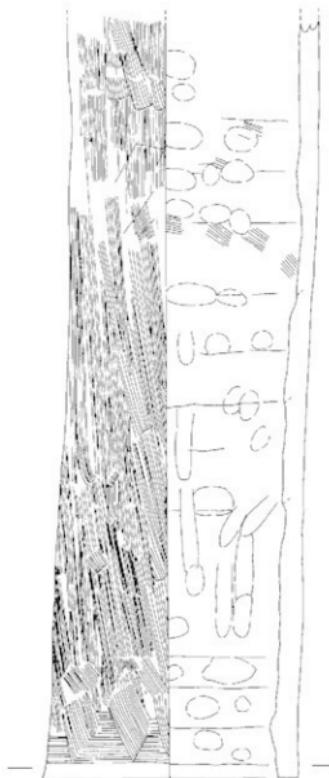


Fig.40 石列2出土遺物実測図

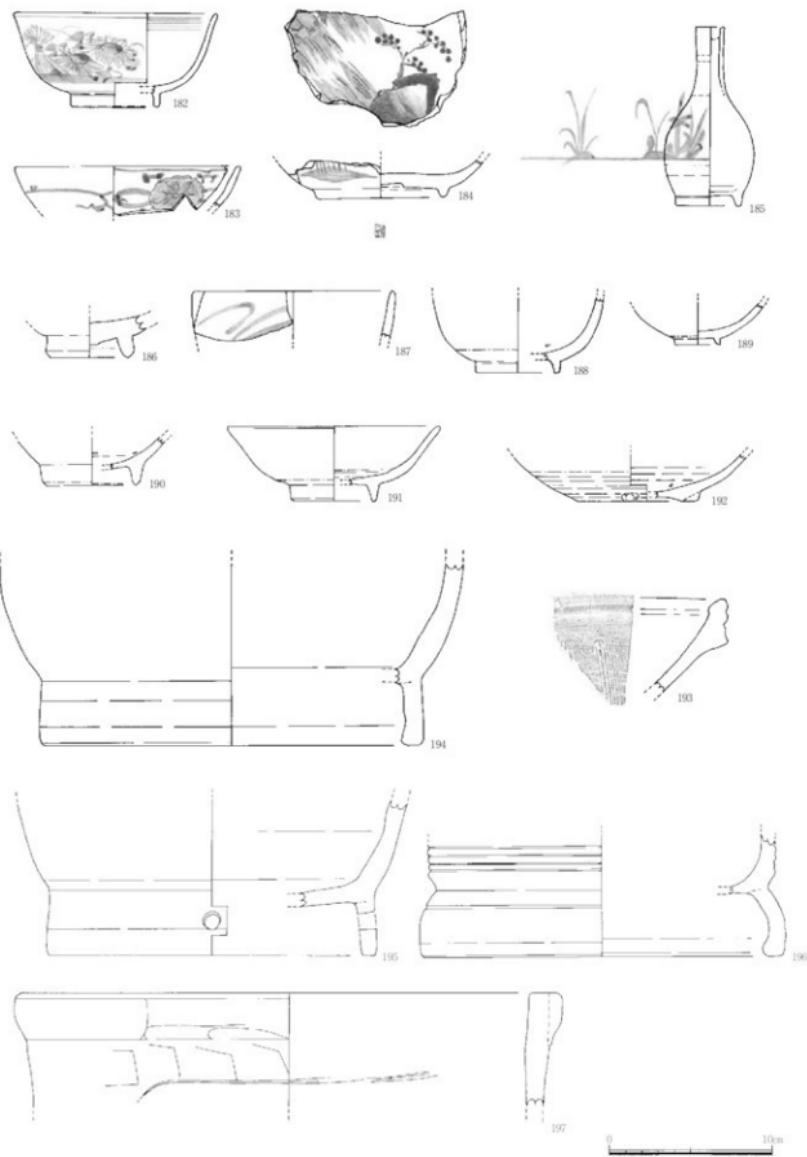


Fig.41 瓦溜1出土遺物実測図(1)

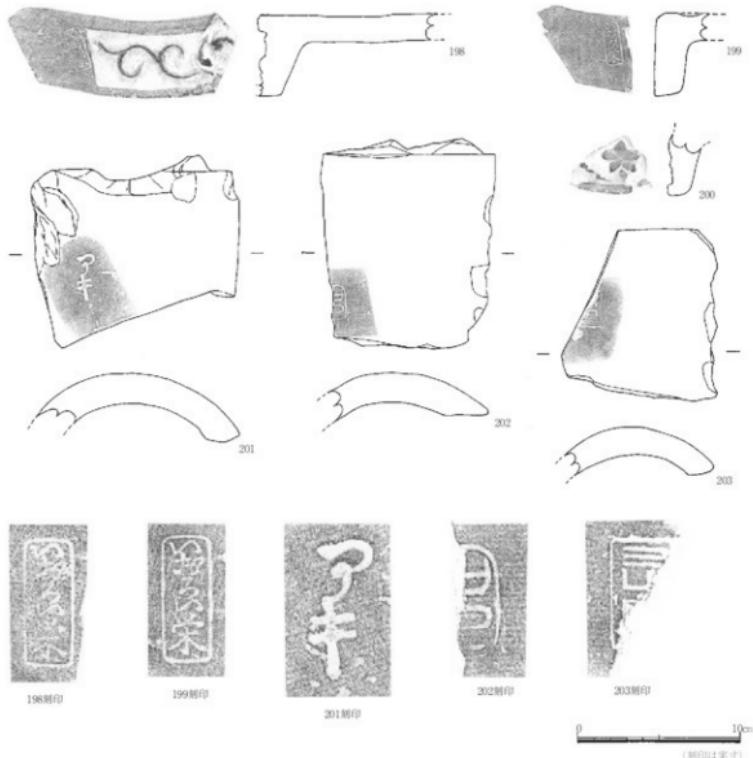


Fig.42 瓦溜1出土遺物実測図(2)

山乙」、202は小判枠内「中己」、210は角枠内「中己」、211は小判枠内「中□」銘印をもち、中山田(高知県香南市野市町中山田)産。203・212は不明。213は「小の忠」銘印、214は角枠内銘をもつが産地不明である。215は角枠内「堺大小路」、217は「○」、216は丸枠内「堺」銘印をもち、堺(大阪府堺市)の製品である。

瓦溜1は19世紀中葉に比定される。

瓦溜2 (Fig.39)

調査区東部、石列2の背面に散在する瓦溜りである。瓦片とともに19世紀を主体とする陶磁器・土器が少量出土している。

瓦溜3 (Fig.39・44)

調査区東部、石列3の下面から背面にかけて広がる瓦溜りで、瓦片とともに19世紀を主体とする



Fig.43 瓦溜1出土遺物実測図(3)

陶磁器・土器、鉄釘が少量出土している。

図示したものは218～229である。218は肥前産の染付猪口。219は能茶山窯産の鉄釉灯明受皿。220は堺・明石系の擂鉢である。221～229は瓦。221・222は丸瓦、227は棟瓦、223～226・228・229は棟瓦又は平瓦等の一部とみられる。このうち、221は「アキ」、223は「御瓦師」、224は「安喜」銘印をもち安芸(高知県安芸市)産。226は「中□」、227は角棒内「中山乙」、222は小判棒内「中己」銘印をもち、中山田(高知県香南市野市町中山田)産。225は角棒内「徳民」銘印をもち、徳王子(高知

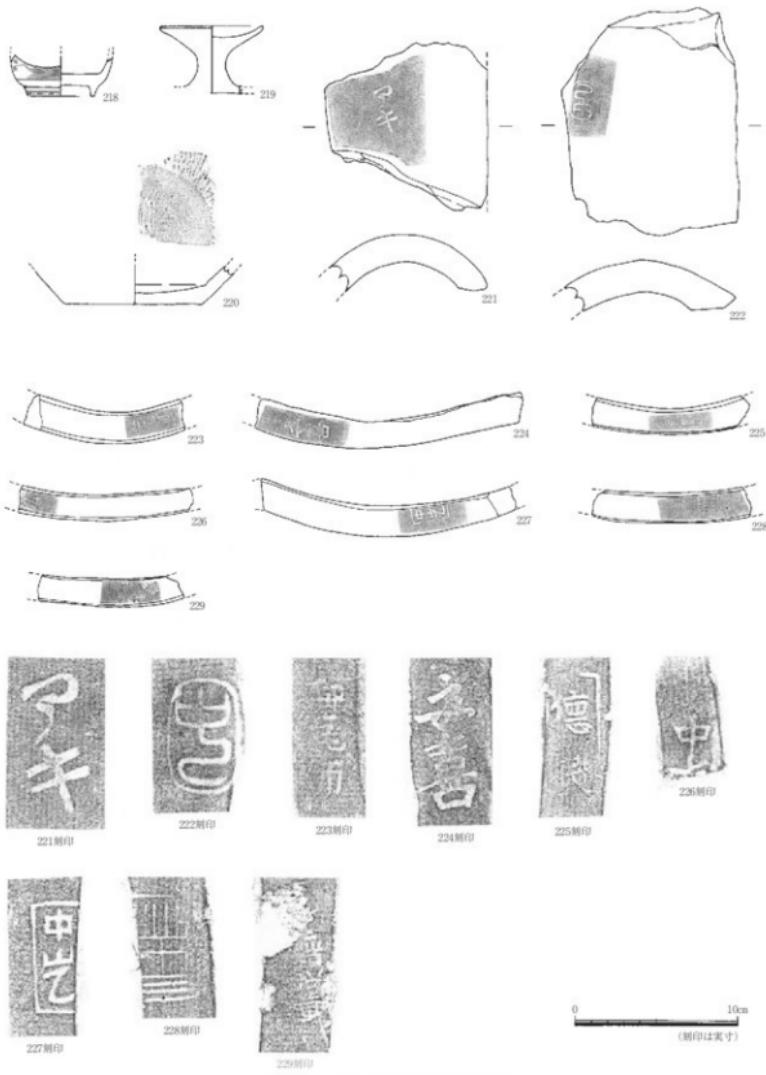


Fig.44 瓦窯3出土遺物実測図

県香南市香我美町徳王子) 産である。また、228・229も銘印をもつ。

瓦溜4 (Fig.24・45)

調査区北西隅に位置するもので、近世のSK2の上面から周囲にかけて瓦と陶磁器・土器が廃棄されている。

図示したものは230～245である。230～233は染付磁器。230は草花文の端反形中碗で能茶山窯産か。231は能茶山窯の広東形中碗で、葦と雁を描く。232は肥前産の丸形小碗、233は肥前産又は肥前系の端反形小碗である。234は肥前産の白磁小杯。235は器種不明の青磁製品で、輪花形の体部の数箇所に円孔を設け、明綠灰色の釉を施す。236は白磁又は染付の瓶である。

237～241は陶器。237は灰釉の鉢で、尾戸窯又は能茶山窯の製品か。高台無釉で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。238は高取焼の碗で、黒色の釉と白濁した灰黄色の釉を掛け分ける。1610～1620年代の製品である。239は肥前系の褐釉の皿で、オリーブ黒色の釉を施す。福岡産17世紀初頭の製品である。240は能茶山窯の小鉢で、にぶい黄橙色の胎土に灰釉を施す。241は備前焼擂鉢である。

242・243は土師質土器の丸形焜炉。244は匣鉢。245は粘板岩製の砥石である。

瓦溜4は19世紀中葉に比定される。

瓦溜5 (Fig.7・45)

調査区北端に分布する瓦溜りである。図示したものは白磁皿(246)、肥前産の染付小皿(247)である。

(7) 包含層出土の遺物 (Fig.46～49)

包含層Ⅱ層から近世の遺物が出土している。248は肥前産の色絵染付の碗蓋で、外面に赤の上絵付による亀甲文と呉須による鶴文、内面に亀を描く。249は肥前産の白磁紅皿。250は肥前産の色絵染付の小皿で、赤・黒・緑の上絵付による文様を描く。251は京焼の碗又は蓋物で、鉄錆と呉須で梅文を描く。252は灰釉の土瓶蓋で、呉須で蝶を描く。253は灰釉の瓶。254は寛永通宝である。

255～276は瓦。255は丸瓦、256は三巴文の軒丸瓦。257は鬼瓦の一部か。263は軒平瓦又は軒棟瓦、258～262・264は軒棟瓦、又は軒棟瓦とみられる瓦片で、258は中心飾りが三巴文、259～262・264は丁字文、263が萬文である。265・269は棟瓦、276は平瓦、266～268・270～275は棟瓦又は平瓦等の一部とみられる。このうち、276はほぼ完形の平瓦で、全長27.2cm、狭端面(屋根に葺いた状態で軒側)の幅23.0cm、広端面幅25.4cmである。

これらのうち、258・265・266は「御瓦師」、255は「安喜」、267は「安堺」、268は「アキ五」銘印をもち安芸(高知県安芸市)産。271は角枠内「中山林」、272は「中友」、264・269・270は小判枠内「中己」銘印をもち、中山田(高知県香南市野市町中山田)産。273・274は角枠内「徳民」銘印をもち、徳王子(高知県香南市香我美町徳王子)産。275は丸枠内「堺」銘印をもち、堺(大阪府堺市)の製品である。

6. 近世・近代の遺物 (Fig.49)

包含層Ⅰ層及び搅乱層内から近世及び近代の遺物が出土している。277は染付中碗で、高台内に「大□□京□柏山製」銘をもつ。278は磁器色絵の皿で、赤の上絵付による文様を描く。胎土は透明感をもち関西系の製品の可能性をもつ。279は磁器色絵の皿で、赤・黄その他の上絵付で宝文を描く。280は焼締めの碗又は鉢。胎土はにぶい赤褐色を呈し、外面に型による陽刻の文字を施す。

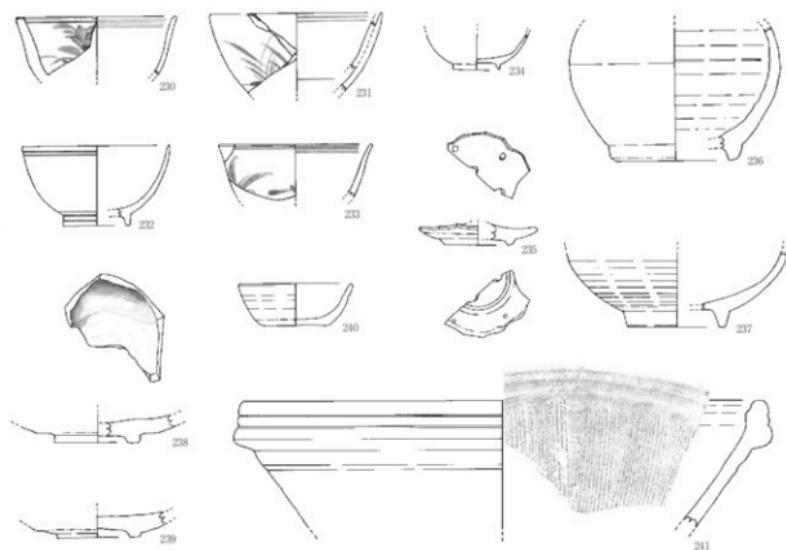


Fig.45 瓦溜4・5出土遺物実測図（瓦溜4:230～245、瓦溜5:246・247）

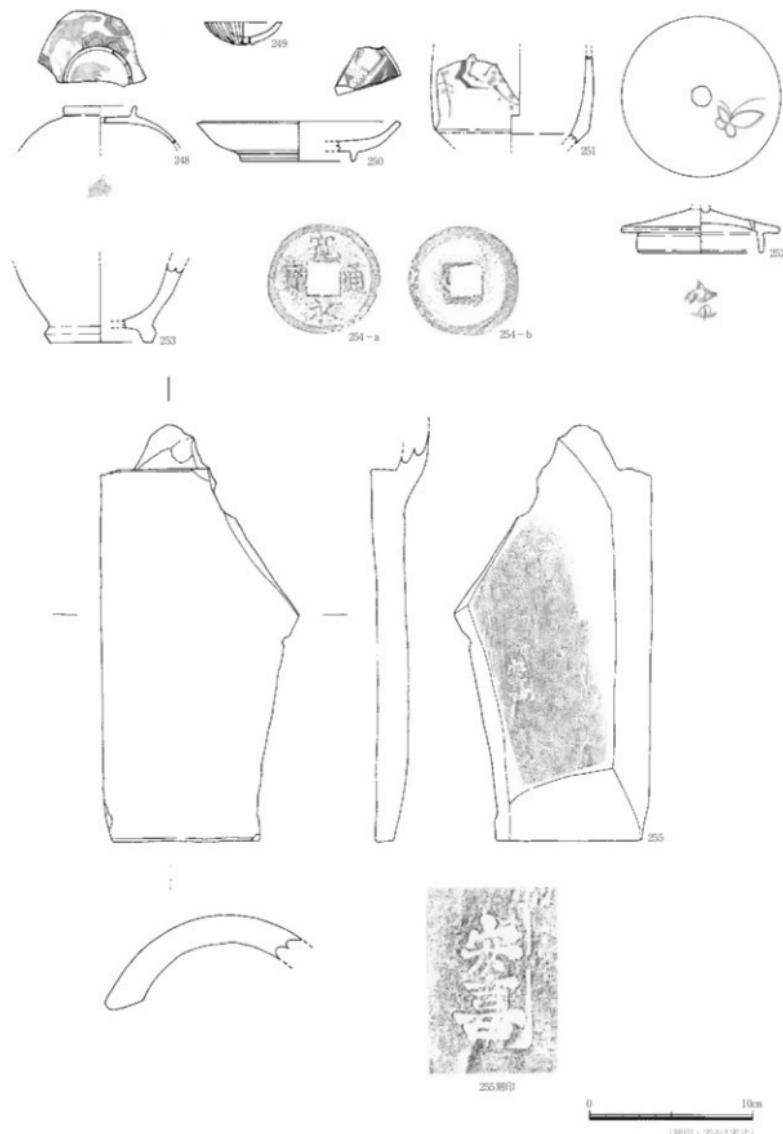


Fig.46 包含層Ⅱ層出土遺物実測図(1)

(刻印・254は実寸)

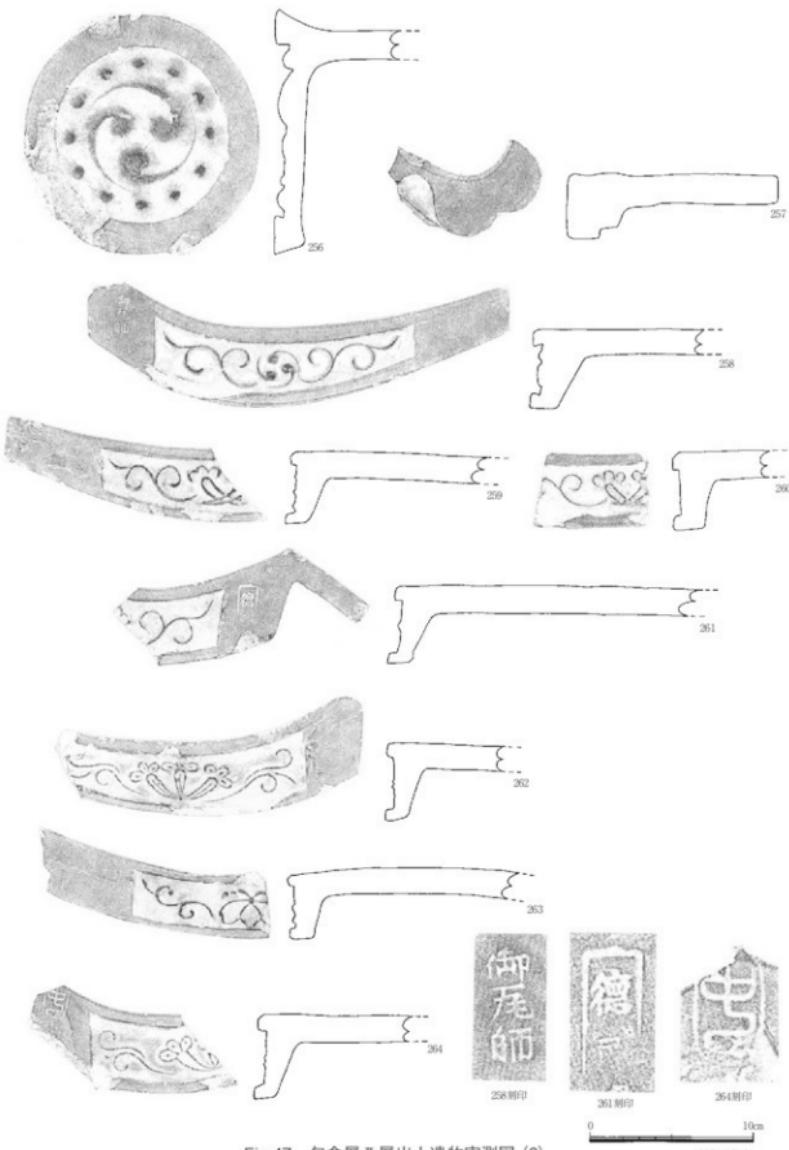


Fig.47 包含層Ⅱ層出土遺物実測図(2)

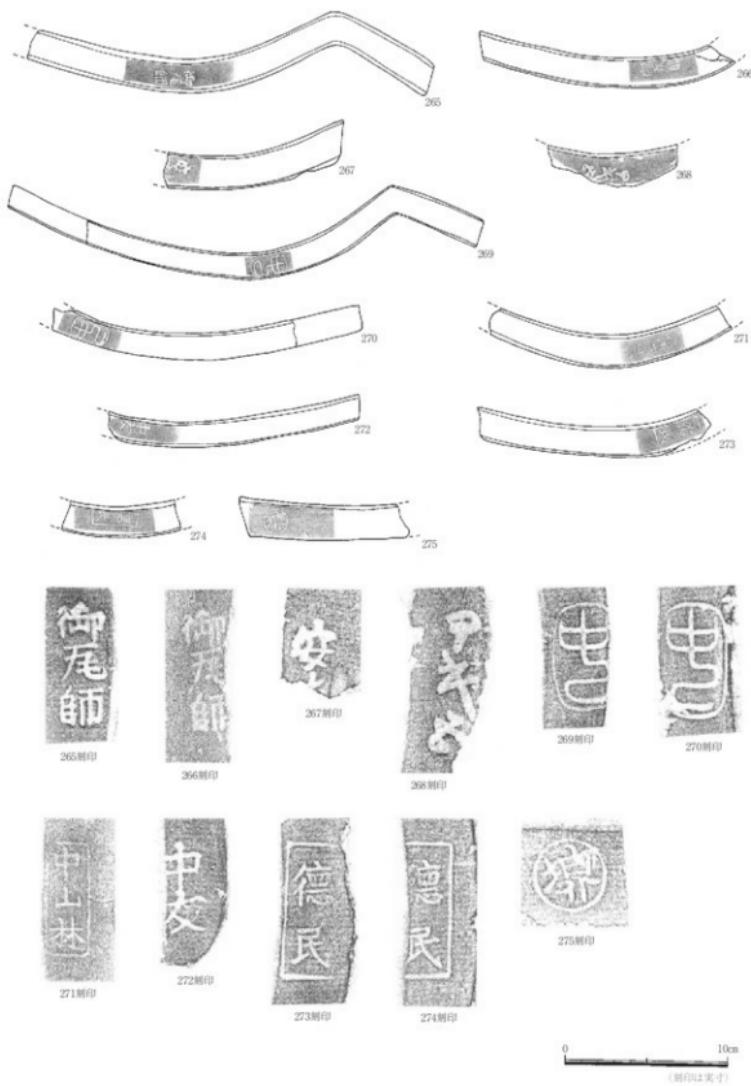


Fig.48 包含層Ⅱ層出土遺物実測図(3)

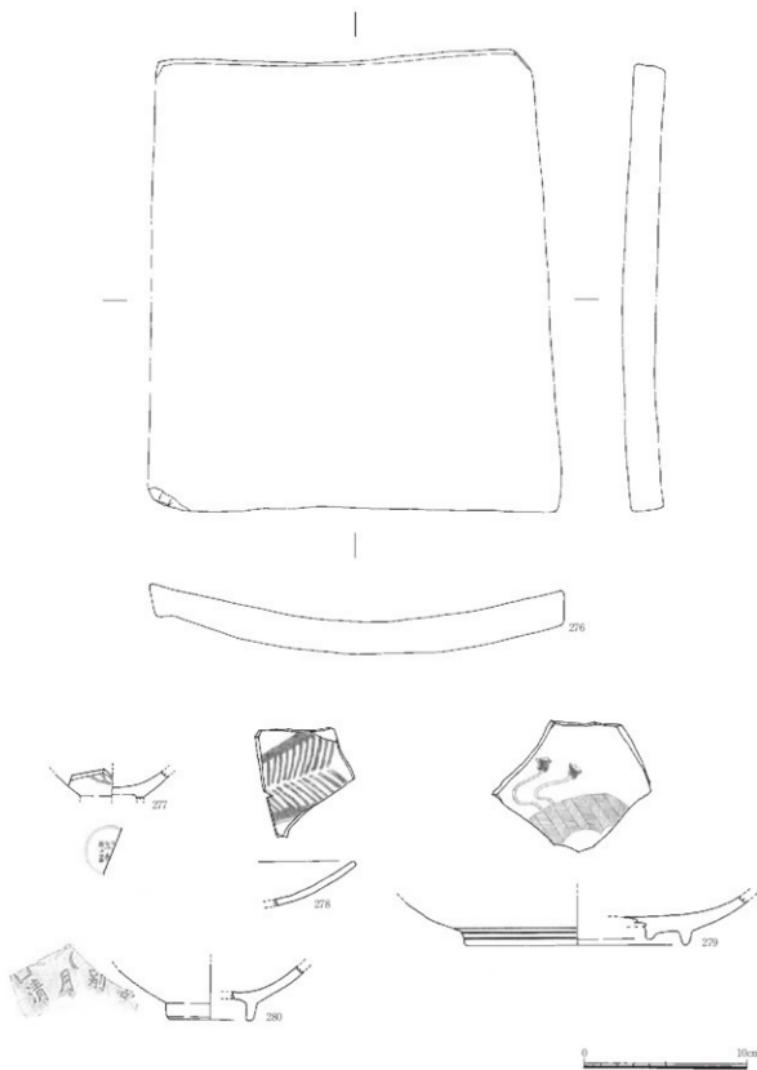


Fig.49 包含層Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図(4)

Tab.3 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・生産年代・器・使用痕跡)
				口径	器高	底径				
1	SK3	土師器	甕	—	—	—	にふい・橙7.5YR6/4		外表面タキ。内面ナデ。	古墳時代初頭
2	SK3 下層	土師器	甕又は甌	—	—	—	橙7.5YR6/6		内外面ナデ。	古墳時代
3	SK10 1層	土師器	鋤 小型丸底	11.8	—	—	橙7.5YR7/6		内外面ナデ。	古墳時代前期
4	SK10 底	土師器	高杯	—	—	—	にふい・黄橙10YR7/2		外表面ナデ。脚部は接合部で剥離。	古墳時代
5	包含層 里層	土師器	甕	—	—	—	橙7.5YR6/6		外表面タキ後ナデ。内面ナデ。	古墳時代前中期 (縄部外縁に煤。)
6	SK1	土師器	杯	—	64	—	橙7.5YR6/6	軟質	摩耗し調整不明。	8世紀後半～9世紀前半
7	SK1	土師器	皿	10.2	27	9.0	にふい・橙7.5YR7/4	軟質	口縁部内面に段。摩耗し調整不明。外底へア切り。	8世紀後半～9世紀前半
8	SK1	土師器	製塙土器	—	—	—	外) 橙7.5YR7/6 内) にふい・黄橙10YR6/4 断) 黄灰25Y5/1		外表面ユビオサエ・ナデ。内面布目。	
10	SK5	頬窓器	杯	—	—	7.0	灰5Y5/1	軟質	摩耗し調整不明。外底へア切り。	8世紀後半～9世紀前半
11	SK1	頬窓器	杯又は皿	—	—	6.8	灰白5Y7/1	軟質	摩耗し調整不明。外底へア切り。	8世紀後半～9世紀前半
12	SK1	頬窓器	皿	13.4	28	8.2	灰白7.5Y8/1	軟質	摩耗し調整不明。	8世紀後半～9世紀前半
13	SK1	頬窓器	蓋	笠部径 12.4	—	—	灰白5Y7/1	硬質	内外面回転ナデ。	8世紀後半～9世紀前半
14	SK1	土師器	甕	28.6	—	—	外) にふい・黄橙10YR6/4 内) 橙5YR6/6		口縁部外表面ユビオサエ後ナデ。内面回転ナデ。体部外表面タケハテ、内面ヨココハ、横方向のイナナ。	古代
15	SK6 下層	土師器	杯	12.6	—	—	にふい・橙7.5YR7/4	軟質	摩耗し調整不明。	古代
16	SK6 下層	土師器	杯	—	—	8.6	橙7.5YR7/6	軟質	摩耗し調整不明。内底ロクロ目。外底へア切り。	
17	SK6 上層	土師器	杯	—	—	9.4	にふい・黄橙10YR7/3		摩耗し調整不明。	古代
18	SK6 上層	土師器	杯	—	—	7.0	にふい・黄橙10YR7/4		摩耗し調整不明。高台貼付。	古代
19	SK6 下層	土師器	杯	—	—	6.0	外) にふい・黄橙10YR7/3 内) 橙5Y7/2		内外面回転ナデ。高台貼付。	9世紀後半～10世紀
20	SK6 下層	土師器	皿	—	—	9.0	浅黄25Y7/3	軟質	摩耗し調整不明。外底へア切り。	古代
21	SK6 下層	土師器	皿	14.0	3.2	8.0	橙7.5YR7/6	軟質	摩耗し調整不明。外底へア切り。	8世紀
22	SK6	土師器	皿	14.8	3.4	9.0	橙7.5YR7/6	軟質	摩耗し調整不明。外底へア切り。	8世紀
23	SK6 上層	土師器	皿	—	—	13.0	浅黄橙10YR8/4	軟質	摩耗し調整不明。外底へア切り。	古代
24	SK6	土師器	皿	—	—	12.2	浅黄橙10YR8/4	軟質	摩耗し調整不明。高台貼付。	古代
25	SK6	頬窓器	杯	14.0	4.0	9.0	外) 灰白25Y8/2- 黄灰25Y6/1 断) 灰N4/	軟質・部分的に酸化焼成氣味	内外面に穢やかなロクロ目。外底摩耗し調整不明。	古代
26	SK6	頬窓器	杯	12.8	3.7	8.0	灰白7.5Y7/1		外底へア切り。内底に穢やかなロクロ目。	古代
27	SK6 下層	頬窓器	杯	11.6	—	—	灰白7.5Y7/1	軟質・部分的に酸化焼成氣味	摩耗し調整不明。	古代
28	SK6 上層	頬窓器	杯	13.7	—	—	灰白5Y7/1		内外面回転ナデ。	古代
29	SK6	頬窓器	杯	11.8	—	—	灰白5Y7/1		内外面回転ナデ。	古代
30	SK6 下層	頬窓器	杯	16.0	—	—	灰NS/	硬質	内外面回転ナデ。	古代
31	SK6	頬窓器	杯	—	—	10.2	灰7.5Y5/1		内外面回転ナデ。内底穢やかなロクロ目。外底へア切り。	古代
32	SK6 上層	頬窓器	杯	—	—	8.6	灰白5Y7/1	軟質	摩耗し調整不明。	古代

Tab.4 遺物觀察表(陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調他)	備考(生産地・ 生産年代・鉢 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
33	SK6	瓶	杯	—	—	96	—	外:灰N6/ 内:灰白25Y7/1	軟質	輪高台を貼付。	古代
34	SK6 上層	瓶	杯	—	—	92	—	灰白25Y7/1	硬質	内外面回転ナデ。外底ナデ。高台 貼付。	古代
35	SK6	瓶	黒か	—	29	—	—	灰白5Y7/1	軟質	摩耗し調整不明。	古代
36	SK6 上層	灰釉 両唇	杯か	126	—	—	—	灰白25Y7/1	硬質	内外面回転ナデ。	10~11世紀
37	SK6 上層	綠釉 両唇	杯	—	—	—	—	外:灰オーリー 5Y4/2 内:灰75Y5/1		内外面回転ナデ。	10世紀
38	SK6 下層	瓶	壺	笠部径 140	—	—	—	灰5Y6/1	硬質	天井部回転ケズリ。外面周縁削輪 ナデ。内面回転ナデ。	8世紀中頃
39	SK6 上層	瓶	壺	—	—	—	—	灰25Y6/1	硬質	天井部削り後ナデ。外面周縁削 輪ナデ。内面回転ナデ。	古代
40	SK6 下層	瓶	壺	—	—	—	—	摸み押 30	硬質	摸みを貼付。天井部回転削り後 ナデ。内面ナデ。	8世紀
41	SK6	瓶	瓶壺か	—	—	88	—	外:灰N6/ 内:灰白N7/	硬質	内外面回転ナデ。高台貼付。	古代
42	SK6 上層	瓶	壺	—	—	64	100	外:灰10Y4/1 内:灰白N7/	硬質	内外面ロクロ目。外底へタ切り。	古代
43	SK6 下層	瓶	壺	226	—	—	—	外:灰5Y6/1 内:灰白5Y7/1	硬質	口縁部内外面回転ナデ。	古代
44	SK6 上層・ 下層	瓶	壺	226	—	—	—	灰N5/	硬質	口縁部内外面回転ナデ。体部外 面並行タタキ後ナデ。内面凹円 状のタタキ。	古代
45	SK6	瓶	壺	—	—	—	—	外:黄灰25Y4/1 内:灰白25Y7/1	硬質	外縁並行タタキ。内面同心円状 のタタキ。	古代
46	SK6	瓶	壺	—	—	—	—	外:黄灰25Y4/1 内:灰白25Y7/1	硬質	外縁並行タタキ・ハケ。内面同 心円状のタタキ。	古代
47	SK6	瓶	壺	—	—	—	—	黄灰25Y6/1	硬質	外縁並行タタキ・ハケ。内面ナ デ。	古代
48	SK6	瓶	壺	—	—	—	—	外:灰7.5Y5/1 内:灰白5Y7/1	硬質	外縁並行タタキ・イタナデ。内面 同心円状のタタキ。	古代
49	SK6	土器	壺	290	—	—	—	にふい縁7.5YR5/3		口縁部内外面回転ナデ。体部外 面タタキハ、内面ヨコサエ・ヨコハ ケ。	9世紀
50	SK6	土器	壺	270	—	—	—	橙25YR6/8		口縁部内外面回転ナデ。体部外 面ハケ、内面ヨビオサエ・ヨコハ ケ。	古代
51	SK6	土器	壺	230	—	—	—	にふい縁10YR7/3		口縁部内面ヨコハケ。外縁調整不 明。	古代
52	SK6	土器	壺	—	—	—	—	外:灰褐7.5YR4/2 内:にふい縁 7.5YR5/4	硬質	口縁部外縁回転ナデ。内面横方 向のイタナデ。	古代
53	SK6 上層	土器	製塙 土器	64	—	—	—	灰5Y5/1	硬質	外縁ユビオサエ・ナデ。内面布目。古代	
54	SK6 上層	土器	製塙 土器	64	—	—	—	外:褐7.5YR7/6 内:にふい・黄褐 10YR7/3		外縁ユビオサエ・ナデ。内面布目。古代	
55	SK6	土器	製塙 土器	—	—	—	—	外:灰7.5Y5/1 内:灰5Y6/1		外縁ユビオサエ・ナデ。内面布目。古代	
56	SK6 上層	土器	土錐	全长 4.0	全幅 2.0	孔径 0.4	重量 1kg	浅黄褐10YR8/4		外縁ナデ。	古代
57	P7 下層	瓶	杯	120	—	—	—	灰白5Y8/1	軟質	摩耗し調整不明。	8世紀後半~ 9世紀初頭
58	P7	瓶	壺	笠部径 140	—	—	—	外:灰白25Y7/1 内:灰25Y7/2	硬質	天井部ナデ。外面周縁削輪回転 ナデ。内面ナデ。	8世紀後半~ 9世紀初頭
59	包含層 Ⅲ層	綠釉 両唇	小瓶	—	—	50	—	外:灰白5Y7/2 内:灰白5Y7/1	綠釉	外底回転系切り。灰オーリー色 の釉を薄く刷毛塗り。	京都系 10世紀
60	包含層 Ⅲ層	瓶	壺	13.5	—	—	—	外:灰白25Y7/1 内:灰白25Y7/1		摩耗し調整不明。	古代
61	包含層 Ⅲ層	瓶	高杯	—	—	—	—	外:灰5Y6/1 内:灰白5Y7/1		内外面回転ナデ。	8世紀
62	包含層 Ⅲ層	瓶	壺	26.0	—	—	—	外:黄褐25Y5/3 内:灰白25Y7/2		内外面回転ナデ。	古代

Tab.5 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 形態	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・生産年代・器・使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
64	SK7 下層	土師質 土器	杯	10.6	4.0	5.4	—	にふい橙7.5YR6/4	軟質	内面に強いロクロ目。摩耗し調整不明。	中世
65	SK7 F層	土師質 土器	杯	11.8	—	—	—	にふい橙7.5YR7/4	軟質	摩耗し調整不明。	中世
66	SD2 1層最下	土師質 土器	杯	12.8	4.3	5.6	—	浅黄橙7.5YR8/4		内外面に多段の強いロクロ目。外底回転系切り。	16世紀
67	SD2 1層最下	土師質 土器	杯	12.9	4.7	4.4	—	浅黄橙7.5YR8/4		内外面に多段の強いロクロ目。外底摩耗し調整不明。	16世紀
68	SD2 1層最下	土師質 土器	杯	12.2	4.0	4.4	—	橙7.5YR7/6	軟質	内外面に多段の強いロクロ目。外底回転系切り。	
69	SD2 1層最下	土師質 土器	杯	—	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/6		内面に多段の強いロクロ目。	
70	SD2 1層最下	土師質 土器	杯	10.4	—	—	—	橙7.5YR7/8	軟質	内外面に多段の強いロクロ目。	15世紀
71	SD2 1層最下	土師質 土器	杯	10.8	—	—	—	橙7.5YR7/6		内外面に多段の強いロクロ目。	
72	SD2 1層最下	土師質 土器	杯	—	—	5.2	—	橙7.5YR7/8		内外面に多段の強いロクロ目。外底回転系切り。	
73	SD2 1層最下	土師質 土器	杯	—	—	5.0	—	橙7.5YR7/6		内外面に多段の強いロクロ目。外底摩耗し調整不明。	
74	SD2 1層最下	土師質 土器	杯	—	—	4.4	—	橙7.5YR7/6		内面に多段の強いロクロ目。	
75	SD2 1層	土師質 土器	杯	—	—	4.1	—	橙7.5YR6/6		内面に多段の強いロクロ目。外底回転系切り。	
76	SD2 1層	土師質 土器	杯	—	—	4.8	—	橙7.5YR7/6		内面に多段の強いロクロ目。外底回転系切り。	
77	SD2 1層最下	土師質 土器	杯	—	—	5.2	—	にふい黄澄10YR7/4		内面に多段の強いロクロ目。外底回転系切り。	
78	SD2 1層最下	土師質 土器	杯	—	—	5.6	—	にふい橙7.5YR7/4		内面に多段の強いロクロ目。外底回転系切り。	
79	SD2 1層	土師質 土器	杯	—	—	4.5	—	橙7.5YR7/6		内面に多段の強いロクロ目。	
80	SD2 1層	土師質 土器	杯	—	—	6.0	—	浅黄橙7.5YR8/4		摩耗し調整不明。内底凸凹。	
81	SD2 1層	不明	楕円	—	—	7.6	—	外) にふい黄澄10YR7/3 断) 黄灰25Y6/1		内外面ナデ。外底回転ケズリ。	
82	SD2 1層最下	土師質 土器	小皿	8.4	1.8	6.6	—	にふい黄澄10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転系切り。 口縁部に灯芯痕。	
83	SD2 1層最下	土師質 土器	小皿	7.0	1.4	4.8	—	浅黄橙10YR8/4	軟質	内底に湯状の強いロクロ目。摩耗し調整不明。	
84	SD2 1層	土師質 土器	鍋	22.8	—	—	—	橙7.5YR6/6		口縁部外面回転ナデ。体部外面上位ヨコナデ、中位並行タキ。	播磨 15世紀 外面上位に瘤、内下面に焦げ。
85	SD2 1層最下	陶器	擂鉢	—	—	15.0	—	浅黄橙7.5YR8/4		外表面回転ナデ、内面横目。外底に凹凸。	備前
86	SD2 1層	土師質 土器	鍋	—	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/6		内表面ナデ。	外底に瘤。
87	SD2 1層最下	陶器	甕	28.0	—	—	—	外) 黄褐7.5YR4/2 断) 白灰5Y7/1	燒結め	口縁部内外面回転ナデ。体部外面上位、内面横方向のイタナデ。	備前 15世紀
88	SD2 1層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰2.5Y6/1 断) 黄灰7.5YR4/2	燒結め	外表面イタナデ、内面ユビキサエ、イタナデ。	備前
89	SD2 1層	陶器	壺又は 瓶	—	—	7.4	—	外) 黄灰2.5Y4/1 断) 黄灰7.5YR5/1		外表面横方向のイタナデ、内面ロクロ目。貼付高台。外面上に自然釉、一部に黒褐色の釉が流れ。	備前 高台内にヘラ形。
90	SD2 1層	頃窓器	甕	—	—	—	—	外) 黄灰2.5Y5/2 断) 黄灰2.5Y6/2		外表面平行タキ。内面同心円状のタキ。	
91	SD2 1層	頃窓器	甕	—	—	—	—	灰10Y6/	硬質		
92	SD2 1層	頃窓器	壺又は 瓶	—	—	—	—	外) 黄灰2.5Y6/1 断) 黄灰5Y6/1		内外面回転ナデ。上半に自然釉が残る。	
93	SD2 1層	頃窓器	甕	—	—	—	—	灰白2.5Y8/1		外表面並行タキ。内面ナデ。	
94	SD2 1層	土師質 土器	土鍤	残存長 24	全幅 0.8	孔径 0.4	重量 11g	にふい橙7.5YR7/4		外表面ナデ。	

Tab.6 遺物觀察表（陶磁器・土器）

図版 番号	出土 地點	種類	器種 形	法量 (cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴 (成形・調整・精調他)	備考 (生産地・ 生産年代・鉢・ 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
95	包含層 Ⅲ層	青磁	中碗	—	—	46	—	外) 淡黄25Y7/4 断) 从白25Y8/2	外) ヘラ形による 菊文 見込み) 印花文	外面強いクロ目。高台内無釉。 淡黄色を帯びる半透明の釉。	中国 龍泉窯系 16世紀
96	SK2 1層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 90	27	摘み径 48	—	外) 白 断) 白	外) 草花文挿み 外) 二重團襪 口綫内) 二重團襪 見込み) 水に岩、 團襪		龍窯山窯 1820年代～幕末
97	SK2 1層	陶器	小杯	56	—	—	—	外) 灰黄25Y7/2 断) 从白25Y8/1	灰釉		尾戸窯又は京都 系
98	SK2 1層	土師質 土器	楕円	14.0	—	—	—	外) 棱7.5YR7/6 断) 棱7.5YR7/6		製作による突起を貼付。内外 面回転ナデ。	在地系
100	SD1 1層	磁器 染付	中碗 環反形	106	61	40	—	外) 灰白5GY8/1 断) 从白N8/	外) 口縁間に格子 文・柳か. 口綫内) 菓鏡に青 海波文の文様 見込み) 柳か・團 襪	瓶頸は緑灰色	肥前系
101	SD1 1層	磁器 染付	中碗 環反形	—	—	40	—	外) 白 断) 白	外) 口縁間に山水 文か. 高台外) 二重團襪 見込み) 团襪・不 明		肥前窯
102	SD1 1層	磁器 染付	中碗	—	—	48	—	外) 灰白5GY8/1 断) 从白5GY8/1	外) 草・土坡・團襪 高台外) 二重團襪 見込み) 不明	瓶頸は青灰色。	肥前系
103	SD1 1層	陶器 染付	中碗	—	—	46	—	外) 明ナリーブ灰 25GY7/1 断) 从白5Y7/2	外) 山水文・團襪 高台外) 團襪	白化粧後透明釉施釉。透明釉は 瓶に貫入が入る。	肥前窯 18世紀前半
104	SD1	磁器 染付	中碗	—	—	44	—	外) 白 断) 白	外) 團襪 高台外) 二重團襪	透明釉は貫入が入る。	肥前系
105	SD1 1層	磁器 染付	小碗 平型	94	38	30	—	外) 白 断) 白	外) 鶴		肥前窯
106	SD1 1層	磁器 色絵	酒杯	100	38	40	—	外) 白 断) 白	内) 文様不明・赤 による鉢	高台脇に泡痕。	肥前窯
107	SD1 1層	白磁	紅葉 菊花形	46	14	14	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊花 聖押成形。下面下半無釉。		肥前窯
108	SD1 1層	磁器 染付	鉢 折線形	166	—	—	—	外) 明紺灰7.5GY8/1 断) 白	口綫内) 菓鏡に花 文か.		肥前窯又は肥前 系
109	SD1 1層	陶器	中碗	108	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 从白25Y8/2	灰釉	灰釉は光沢が強く無い貫入が入 る。	肥前窯又は肥前 系
110	SD1 1層最下	陶器	小皿	—	—	40	—	外) 帽褐7.5YR3/3 断) 从灰10YR4/1	鐵釉	見込み蛇の目釉剥落後白土を刷 毛塗り。外面下位無釉。	龍窯山窯 1820年代～幕末
111	SD1 1層	陶器	小皿	—	—	42	—	外) 暗オーブ 5Y5/3 断) 从白10YR8/1	綠釉	見込み蛇の目釉剥落。外面無釉。	肥前窯又は肥前 系
112	SD1 2層	陶器	鉢	—	—	—	—	外) 帽褐7.5YR3/3 断) 从5Y6/1	鐵釉	外面上半ナデ、下半ケズリ後ナ デ。内面ロクロ目。外面下半無 釉。	肥前窯又は肥前 系
113	SD1 1層最下	陶器	土瓶	108	—	—	—	外) 黒褐10YR2/1 断) 从褐10YR5/1	鐵釉	口縁端部に白土を施釉。内面下 半無釉。黒色の釉。	龍窯山窯 1820年代～幕末
114	SD1 1層	陶器	土瓶蓋	笠部径 130	3.0	62	—	外) 黒褐7.5YR3/1 断) 淡黄褐10YR8/4	鐵釉	外面無釉	龍窯山窯 1820年代～幕末
115	SD1 1層最下	陶器	火鉢 六角形	—	—	140	—	外) 灰黄25Y7/2 断) 从黄25Y7/2	外) 型による薄削 文様・灰釉・銅錫 釉 内) 銅錫	三足を貼付。内面と外底に銅錫 を刷毛塗り。	瀬戸・美濃
116	SD1 1層	土師質 土器	五寸鉢	160	—	—	—	外) 淡黄褐10YR8/4 断) 淡黄褐10YR8/4		外面回転ケズリ、内面回転ナデ。	
117	SD1 1層	土師質 土器 又は 未製品	蓋	笠部径 108	2.0	—	—	外) 棱5YR7/6 断) 棱5YR7/6		外面回転ケズリ、内面ナデ。	
169	SD3	磁器 染付	小碗	7.5	33	43	—	外) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	口綫外) 二重團襪 高台外) 二重團襪		肥前窯
170	SD3	青花	大皿	—	—	—	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	内) 植物	白濁した釉。高台に灰白色の 粉砂が多量に付着。	中国津州窯系 16世紀末～17世 紀初期

Tab.7 遺物觀察表（陶磁器・土器）

団版 番号	出土 地点	種類	器種 形形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調性)	備考 (生産地・ 生産年代・器・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径	最大 径				
171	SD3	磁器 染付	鉢	20.4	6.1	11.4	—	外) 白 断) EI	外) 花唐草文・二 重團襷 高台外) 二重團襷 (口内) 雷文帶 見込み) 花文		肥前產
172	SD3	磁器 染付	中瓶	—	—	13.2	—	外) 白 断) 白	外) 連續唐草文 内) 竹・手描きに よる五片花文 高台内) 「□□化 作製」・團襷	高台内ハリ支え痕。	肥前產 18世紀前半
173	SD3	青花	大瓶	—	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y7/1	外) 團襷 内) 七宝文		中国瀋州窯系 16世紀末～17世 紀初頭
174	SD3	青磁	不明	—	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY7/1 断) 灰白N8/	外) 型による階層 文様 青磁釉	型押成形。内面ナデ。	
175	SD3	青磁	不明	—	—	—	—	外) オリーブ灰 断) 灰白10Y8/1	外) 型による階層 文様 青磁釉	型押成形。内面ナデ。	
176	SD3 上層	陶器	中瓶	—	—	5.6	—	外) にい・黄 断) 黄25Y6/3 断) 黄25Y8/3	灰釉	高台施釉。にい・黄色を帯びる 半透明の釉で貫入が入る。	肥前產 又は肥前 系
177	SD3	陶器	中瓶 丸形	—	—	4.4	—	外) にい・橙 7.5YR6/4 断) にい・橙 7.5YR7/4	灰釉	高台無釉。にい・橙色を帯びる 透明の釉。	肥前產 又は肥前 系
178	SD3	陶器	小瓶	10.8	3.7	5.0	—	外) 黄褐25Y5/3 断) 黄褐25Y7/2	灰釉	高台無釉。黄褐色の釉。	肥前產
179	SD3	陶器	小瓶	—	—	4.8	—	外) 灰黄25Y7/2 断) 灰白25Y8/2	外) 灰釉 内) 銅綠釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台無釉。	肥前 内野山窯 18世紀前半
180	SXI 上層	磁器 染付	中瓶 丸形	9.6	5.0	3.6	—	外) 白 断) 白	外) コニャック印 柄による樹木・團 襷 高台外) 二重團襷	具頭は淡い青色。	肥前產 18世紀前半
181	石列2	素焼き	土管	残存長 62.3	全幅 21.0	孔径 17.0	厚さ 1.4	外) にい・黄橙 10YR6/4 断) にい・黄橙 10YR6/4	素焼き	粘土練搗み上げ成形。外面ハケ。 内面ユビオサエ・ユビナデ・ハケ。 内面に粘土帶接合痕。	
182	瓦溜1	磁器 染付	中瓶 端反形	12.4	5.8	5.2	—	外) 灰白5Y8/1 断) 白	外) 稲束・草花・ 枝葉 高台外) 团襷 (口内) 五葉襷 見込み) 团襷	透明釉は施成不良で白渦。	能茶山窯 1820年代～幕末
183	瓦溜1	磁器 染付	小瓶 丸形	13.8	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 意頭連枝唐 草文 内) 花文 唐草文		肥前產
184	瓦溜1	磁器 染付	皿 又は鉢	—	—	7.6	—	外) 白 断) 白	外) 草・土埃 内) 山水文 高台内) 角棒内 「茶」	蛇の目凹形高台。透明釉は貫入 が入る。	能茶山窯 1820年代～幕末
185	瓦溜1	磁器 染付	小瓶 辣匙形	18	11.0	3.8	5.5	外) 白 断) 白	外) 草花文・團襷	具頭は淡い青灰色。	肥前產
186	瓦溜1	青磁	中瓶	—	—	4.8	—	外) オリーブ灰 25GY6/1 断) 灰白5Y7/1	青磁釉	高台施釉。高台内無釉。オリーブ 灰色の釉。	中国 龍泉窯系
187	瓦溜1	陶器	中瓶	12.3	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/2	外) 譜絵 灰釉	灰オリーブ色を帯びる半透明の 釉で細かい貫入が入る。	尾口窯
188	瓦溜1	陶器	中瓶 丸形	—	—	5.0	—	外) 黄褐25Y8/3 断) 灰白25Y8/2	灰釉	高台無釉。灰釉は貫入が入る。 内面に目痕。	尾口窯
189	瓦溜1	陶器	小碗 半球形	—	—	2.8	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	灰釉	高台無釉。	京都系
190	瓦溜1	陶器	中瓶 広東形	—	—	5.6	—	外) 黄オリーブ 5Y4/2 断) 黄褐25Y6/1	灰釉	高台施釉。光沢の強い灰オリーブ 色の釉。内底に目痕。	能茶山窯か
191	瓦溜1	陶器	小瓶 端反形	13.0	4.6	5.0	—	外) 黄褐75YR2/2 断) にい・黄橙 10YR7/3	灰釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台無釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
192	瓦溜1	陶器	鍋	—	—	6.4	—	外) 黄褐75YR3/3 断) 黄褐10YR6/1	灰釉	三足を貼付。内面クロ目。外面 下底無釉。内底に目痕。	能茶山窯か

Tab.8 遺物觀察表(陶磁器・土器)

國版 番号	出土 地點	種類	器種 形	法量(cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴(成形・調整・施調他)	備考(生産地、 生産年代、鉢、 使用状態)	
				口径	器高	底径					
193	瓦瀬1	陶器	擂鉢	—	—	—	外)にぶい赤褐 25YR4/3 断)灰N6-/裡 5YR6/6	燒締め	口縁部内面回転ナダ後揚目、外 面2条の凹継。体部外面回転ナ ダ。	肥前	
194	瓦瀬1	土師質 土器	撻印 丸形	—	—	230	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6	石英・長石・雲母、 金雲母、赤色系鉱 物の粗糲を含む。	貼付高台。体部外面ナダ。内面 回転ナダ。高台内外面回転ナダ。	同西系
195	瓦瀬1	土師質 土器	撻印 丸形	—	—	200	—	外) 橙75YR6/6 断) 橙75YR6/6	石英・長石・雲母、 赤色系、赤色系鉱 物の粗糲を含む。	貼付高台。体部外面ナダ。内面 回転ナダ。高台内外面回転ナダ、 外底ナダ。	同西系
196	瓦瀬1	瓦質 土器	火鉢	—	—	220	—	外) 黒 断) 黒	外) 多段の沈澱	貼付高台。外側ミガキ。体部内面 回転ナダ。	同西系
197	瓦瀬1	土師質 土器	甌	330	—	—	外) 灰褐75YR4/2 断) にぶい黄褐 10YR5/4			前方に窓。口縁部内外面回転ナ ダ。体部外側イタナダ、内面ヨコ ナダ、ヨコハケ。	口縫部外外面に 保。
218	瓦瀬3	織器 染付	擂口	—	—	40	—	外) 白 断) 白	外) 草花文か 高台外) 二重圓錐 高台内) 圓錐		肥前產
219	瓦瀬3	陶器	打明受 皿	64	—	—	外) 橙75YR4/3 断) 灰N5/	鉄袖	外底回転系切り。褐色の袖。	鹿茶山窯 1820年代～幕末	
220	瓦瀬3	陶器	擂鉢	—	—	84	—	外) 橙灰10YR4/1 断) 灰黄褐10YR4/2	燒締め	体部内面鶴目。内底ナダ後不定 方向の鶴目。外底に凹凸、砂が 付着。	堺・明石系
230	瓦瀬4	織器 染付	中碗 環反形	98	—	—	外) 白 断) 白	外) 草花 口縁内) 五重圓錐		鹿茶山窯か	
231	瓦瀬4	織器 染付	中碗 広張形	106	—	—	外) 白 断) 白	外) 草・塵 口縁内) 二重圓錐	焼け歪み、内面に別個体の染付 繩が沿著する。	鹿茶山窯 1820年代～幕末	
232	瓦瀬4	織器 染付	小碗 丸形	90	49	40	—	外) 白 断) 白	外) 二重圓錐 高台外) 二重圓錐		肥前產
233	瓦瀬4	織器 染付	小碗 環反形	94	—	—	外) 白 断) 白	外) 不明、圓錐 口縁内) 圓錐・圓錐		肥前產又は肥前 系 19世紀	
234	瓦瀬4	白磁	小杯	—	—	28	—	外) 白 断) 白			肥前產
235	瓦瀬4	青磁	不明	—	—	40	—	外) 明緑灰10GY7/1 断) 白N8/	青緋袖	輪花形で数箇所に円形の透かし、 外側無袖。明緑灰色の袖。	肥前產
236	瓦瀬4	白磁又 は染付	瓶	—	—	78	129	外) 白灰10Y8/1 断) 白灰N8/		内面ロクロ目。内面無袖。	
237	瓦瀬4	陶器	鉢	—	—	58	—	外) 灰白25Y8/2 断) 灰白25Y8/2	灰袖	高台無袖。灰白色を帯びる平透 明の袖。	尾戸山又は鹿茶 山窯
238	瓦瀬4	陶器	甌	—	—	50	—	外) 黒25Y2/1 断) 黒25Y7/2 断) にぶい褐 75YR5/3	燒袖・黒灰袖	高台無袖。黒色の袖と白瀬した 灰黄色の袖を掛け分ける。	高取窯 内々窯 1610～1620年代
239	瓦瀬4	陶器	小皿	—	—	50	—	外) オリーブ黒 75Y3/1 断) 黄灰25Y5/1	燒袖	高台無袖。オリーブ黒色の袖。	福岡 17世紀初頭
240	瓦瀬4	陶器	小鉢	68	26	40	—	外) にぶい黄褐 10YR6/3 断) にぶい黄褐 10YR6/3	灰袖	外側ロクロ目。外底無袖。	鹿茶山窯 1820年代～幕末
241	瓦瀬4	陶器	擂鉢	320	—	—	外) 灰褐5YR4/2 断) 灰白10Y8/1	燒締め	口縁部内面回転ナダ。外側凹 溝。体部内面鶴目。外側ヨコナ ダ。	肥前 17世紀後半～18 世紀	
242	瓦瀬4	土師質 土器	撻印 丸形	220	—	—	外) にぶい黄褐 10YR7/3 断) にぶい黄褐 10YR7/3	石英・長石・雲母、 金雲母、赤色系鉱 物の粗糲を含む。	上位に円孔数穴。体部外面ナダ、 内面回転ナダ。	同西系	
243	瓦瀬4	土師質 土器	撻印 丸形	—	—	200	260	外) 橙75YR7/6 断) 橙75YR7/6	石英・長石・雲母、 金雲母、赤色系鉱 物の粗糲を含む。	貼付高台。体部内外面ナダ。高 台内外面回転ナダ。外底に凹凸、 砂が付着。	同西系
244	瓦瀬4	窯道具	匣鉢	220	83	216	—	外) 橙75YR7/6 断) 橙75YR7/6	燒締め	内外面に深いロクロ目。外底回 転系切り。	尾戸山窯
246	瓦瀬5	白磁	小皿	11.0	—	—	外) 灰白75Y8/1 断) 白	白磁袖		中国產 白磁玉類	
247	瓦瀬5	織器 染付	小皿	102	16	60	—	外) 白 断) 白	外) 折松葉か 内) 区画間に四方 棒(高台外) 二重圓錐	口縁部輪花形。	肥前產

Tab.9 遺物観察表（陶磁器・土器）

団版番号	出土地点	種類	器種 形態	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・生産年代・器・使用痕跡)
				口径	器高	底径				
248	包含層Ⅱ層	磁器 色絵染付	碗蓋	—	—	—	摘み径44 外)白 内)白	外)赤の上絵付による亀甲文と乳頭による焼文 内)乳頭による亀		肥前産
249	包含層Ⅱ層	白磁	紅皿 菊花形	48	14	14	— 外)白 内)白	外)型による菊介	型押成形。外面無釉。	肥前産
250	包含層Ⅱ層	磁器 色絵染付	小皿	126	24	52	— 外)白 内)白	外)面涙 高台外)二重圓涙 内)赤・黒・緑の上絵付による文様		肥前産
251	包含層Ⅱ層	陶器	碗又は 蓋物	—	—	—	外)浅黄25Y7/4 断)灰白25Y8/2	外)鉄筋と乳頭による内面施釉。 高台無釉。浅黄色を帯びる半透明の釉で細かい貫入がある。	京都	
252	包含層Ⅱ層	陶器	土瓶蓋 笠部詳 98	—	かえり 径7.6	—	外)浅黄25Y8/4 断)灰白25Y8/2	外)乳頭による櫻 灰釉	かえりと内面無釉。淡黄色を帯びる透明の釉。	尾戸窯又は能美山窯内面に墨書き。
253	包含層Ⅱ層	陶器	瓶	—	—	63	— 外)灰白5Y8/4 断)灰白5Y8/4	灰釉	内面と高台施釉。釉は焼成不良 気味で口開。	
277	包含層Ⅰ層	磁器 色絵染付	中碗	—	—	38	— 外)白 内)白	外)不明 高台内)大□□京 [口柏山製]		高台内に「大□□ 京□柏山製」轍。
278	包含層Ⅰ層	磁器 色絵	皿	—	—	—	外)白 内)赤	内)赤の上絵付による文様	口縁部輪花形。胎土は透明感をもつ。	関西系か
279	包含層Ⅰ層	磁器 色絵染付	中皿	—	—	136	— 外)白 内)白	高台外)二重圓涙 内)圓涙・赤・黄 心の盤の上絵付による文様 高台内)團羅	心の四凹形高台。雲付施釉。高 台内側剥落。	
280	包含層Ⅰ層	陶器	碗又は 鉢	—	—	50	— 外)に赤い赤褐色 25YR5/4 断)に赤い赤褐色 25YR5/4	外)型による陽刻の文字文 焼め		

Tab.10 遺物観察表（石製品・金属製品）

団版番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)			重量(g)	特徴
				全長 〔〕残存長	全厚	全幅		
99	SK2床	石製品	五輪塔	[190]	—	13.2	3800	砂岩製。空・軸輪の部分。軸輪部の三面は削られて平たくなっている。
122	SD1-1層最下	鉄製品	釘	121	0.5	0.6	109	断面四角形。
123	SD1-1層最下	鉄製品	釘	[58]	0.4	0.5	[63]	断面四角形。
124	SD1-1層	鉄製品	釘	62	[0.8]	[0.8]	[82]	
125	SD1-1層	鉄製品	釘	65	0.4	0.4	35	
126	SD1-1層最下	鉄製品	釘	[6.1]	0.4	0.4	[29]	断面四角形。
127	SD1-1層最下	鉄製品	釘	[40]	0.3	0.3	[1.1]	断面四角形。
245	瓦窓4	石製品	砥石	—	—	—	[41.9]	粘板岩製。鏡を砥石に転用。 鏡面に擦痕。

※欠損、錯等がみられるものは法量・重量を〔〕表記した。

Tab.11 遺物観察表(古銭)

国版 番号	出土地点	器種	法量(cm)			重量 (g)	備考
			外径	穿径	厚さ		
118	SD1 - 1層最下	寛永通宝(新)	23	06	01	23	118・119が2枚重なり溶着する。
119	SD1 - 1層最下	寛永通宝(新)	22	06	01	25	118・119が2枚重なり溶着する。
120	SD1 - 1層最下	寛永通宝(新)	23	06	01	19	
121	SD1 - 1層最下	寛永通宝(新)	22	06	01	18	
254	包含層Ⅱ層	寛永通宝(新)	23	06	01	22	

Tab.12 遺物観察表(瓦)

国版 番号	出土 地点	種類	法量(cm)			色調	特徴	備考(生産地・銘)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
63	包含層 Ⅲ層	平瓦	—	—	15	外)に赤い黄澄 10YR7/3 断)に赤い黄澄 10YR7/3	内面布目。	古代又は中世
128	SD1 1層最下	鬼瓦	—	—	—	外)に赤い橙 7SYR7/4 断)に赤い橙 7SYR7/4	陰刻による猪の目文。型作り。外 面ナガレ目。	2次焼成を受け変色。
129	SD1 1層最下	樋瓦	—	—	—	外)灰N4/ 断)灰白17SY7/1	三巴文。キラ粉を使用。	
130	SD1 1層	軒丸瓦	[156]	[120]	—	外)灰灰N3/ 断)灰白17SY8/1	三ツ葉稻文。瓦当に稻穀が多量に 付着。	
131	SD1 1層	軒丸瓦	[152]	[121]	—	外)灰N4/ 断)灰白17SY8/1	三巴文。珠数12個。キラ粉を使 用。	
132	SD1 1層最下	軒丸瓦 右线条瓦	49	28	16	外)灰灰N3/ 断)灰N6'	中心彫りは三巴文。両側に均整唐 草文。	
133	SD1 1層	軒丸瓦 右线条瓦	47	28	19	外)灰N4/ 断)灰白15Y7/1	中心彫りは三巴文。両側に均整唐 草文。キラ粉を使用。	高知県安芸市 「側瓦脚」鉢印あり。
134	SD1 1層	軒丸瓦 右线条瓦	49	32	17	外)灰灰N3/ 断)灰白16N6'	中心彫りは三巴文。両側に均整唐 草文。	高知県安芸市 「側瓦脚」鉢印あり。
135	SD1 1層最下	軒丸瓦 右线条瓦	—	—	17	外)灰灰N3/ 断)灰白N7	中心彫りは不明。両側に均整唐草 文。	高知県安芸市 「側瓦脚」鉢印あり。
136	SD1 1層	軒丸瓦 右线条瓦	51	28	17	外)灰灰N3/ 断)灰白N7	中心彫りは三巴文。両側に均整唐 草文。	高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
137	SD1 1層	軒丸瓦 左线条瓦	—	—	16	外)灰N4/ 断)灰白N7	中心彫りは丁字文。両側に均整唐 草文。	高知県香南市香我美町惣王子 角桟内「他民」鉢印あり。
138	SD1 1層	軒丸瓦 左线条瓦	—	—	16	外)灰灰N3/ 断)灰白N8'	中心彫りは丁字文。両側に均整唐 草文。	高知県香南市香我美町惣王子 角桟内「他民」鉢印あり。
139	SD1 1層	軒丸瓦 右线条瓦	—	—	16	外)灰灰N3/ 断)灰白N7	中心彫りは不明。両側に均整唐草 文。	高知県香南市野市町中山田 「中友」鉢印あり。
140	SD1 1層	軒丸瓦 右线条瓦	—	—	16	外)灰N4/ 断)灰白N7	中心彫りは不明。両側に均整唐草 文。	高知県香南市野市町中山田 小判桟内「中己」鉢印あり。
141	SD1 1層最下	軒丸瓦 右线条瓦	—	—	17	外)灰N4/ 断)灰白15Y7/1	中心彫りは丁字文。両側に均整唐 草文。	鉢印は不明。
142	SD1 1層	軒丸瓦	47	25	15	外)灰N4/ 断)灰白N7	中心彫りは花文。両側に均整唐草 文。	
143	SD1 1層最下	軒平瓦	37	22	15	外)灰灰N3/ 断)灰白N8'	中心彫りは略化した丁字文又は三 花文。両側に均整唐草文。	角桟内鉢印あり。
144	SD1 1層最下	軒丸瓦	—	—	19	外)灰N4/ 断)灰白N7	中心彫りは不明。両側に木葉文。	
145	SD1 1層	丸瓦	—	—	17	外)灰5Y5/1 断)灰白5Y7/1		高知県安芸市 「アキ五」鉢印あり。
146	SD1 1層最下	丸瓦	—	—	18	外)灰N5/ 断)灰白15Y7/1	内面に布目。	高知県安芸市 「口」鉢印あり。
147	SD1 1層最下	丸瓦	—	—	18	外)灰N4/ 断)灰白N7		高知県安芸市 「安喜」鉢印あり。
148	SD1 1層最下	樋瓦	—	—	16	外)灰灰N3/ 断)灰白N7		高知県香南市北町桑生野 角桟内「桑生町」鉢印あり。
149	SD1 1層	樋瓦	—	—	16	外)灰N4/ 断)灰白N7		高知県香南市野市町中山田 小判桟内「中己」鉢印あり。
150	SD1 1層最下	樋瓦	—	—	17	外)灰N4/ 断)灰白N7		高知県香南市野市町中山田 角桟内「中山田」鉢印あり。
151	SD1 1層最下	平瓦	—	—	17	外)灰灰N3/ 断)灰白5Y7/1	キラ粉を使用。	高知県安芸市 「側瓦脚」鉢印あり。
152	SD1 1層	线条瓦 は 平瓦	—	—	18	外)灰N4/ 断)灰白15Y7/1	キラ粉を使用。	高知県安芸市 「側瓦脚」鉢印あり。

Tab.13 遺物觀察表(瓦)

図版番号	出土地点	種類	法量(cm)			色調	特徴	備考(生産地・鉢)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区徑	平瓦厚			
153	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	17	外)灰N4/ 黒)灰15Y7/1		高知県安芸市 「御瓦鉢」鉢印あり。
154	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	18	外)灰N6/ 黒)灰N4/		高知県安芸市 「御瓦鉢」鉢印あり。
155	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	19	外)暗灰N3/ 黒)灰15Y7/1		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
156	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	21	外)灰N4/ 黒)灰NS/		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
157	SD1 1号	线瓦	—	—	15	外)灰NS/ 黒)灰15Y7/		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
158	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	17	外)灰NS/ 黒)灰15Y7/		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
159	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	16	外)灰NS/ 黒)灰15Y7/		高知県香南市野市町中山田 小判枠内「中己」鉢印あり。
160	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	15	外)灰N4/ 黒)灰NS/		高知県香南市野市町中山田 角枠内「中乙」鉢印あり。
161	SD1 1号最下	线瓦	—	—	15	外)暗灰N3/ 黒)灰15Y7/		高知県香南市香我美町他王子 角枠内「他民」鉢印あり。
162	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	16	外)灰NS/ 黒)灰15Y7/		高知県香南市香我美町他王子 角枠内「他民」鉢印あり。
163	SD1 1号最下	线瓦又は 平瓦	—	—	17	外)暗灰N3/ 黒)灰15Y7/		高知県香南市香我美町他王子 角枠内「他民」鉢印あり。
164	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	15	外)灰NS/ 黒)灰SY6/		大阪府堺市 角枠内「柳小路」鉢印あり。
165	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	17	外)灰N4/ 黒)灰15Y7/		角枠内「横瀬源」鉢印あり。
166	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	13	外)灰N4/ 黒)灰15Y7/		大阪府堺市 「○」印あり。
167	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	22	外)黄灰25Y6/1 黒)にふく黄橙10YR7/3	酸化沈成気味。	大阪府堺市 「○」印あり。
168	SD1 1号	线瓦又は 平瓦	—	—	20	外)灰N4/ 黒)灰15Y7/1		大阪府堺市 丸枠内「景」鉢印あり。
198	瓦罈1 右斜瓦	軒瓦 右斜瓦	47	31	15	外)灰N4/ 黒)灰15Y7/	中心彫りは三巴文。両側に均整唐草文。	高知県香美市香北町五百歳 角枠内「いよいぞ栄」鉢印あり。
199	瓦罈1 右斜瓦	軒瓦 右斜瓦	—	—	—	外)灰15Y7/1 黒)灰15Y7/1	キラ粉を使用。	高知県香美市香北町五百歳 角枠内「いよいぞ栄」鉢印あり。
200	瓦罈1	軒瓦 又は 平瓦	—	—	—	外)灰N4/ 黒)灰NS/	中心彫りは花文。	
201	瓦罈1	丸瓦	—	—	18	外)灰N5/ 黒)灰15Y7/		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
202	瓦罈1	丸瓦	—	—	16	外)灰N4/ 黒)灰15Y7/1		高知県香南市野市町中山田 小判枠内「中己」鉢印あり。
203	瓦罈1	丸瓦	—	—	15	外)灰N5/ 黒)灰15Y7/1		角枠内鉢印あり。
204	瓦罈1	线瓦又は 平瓦	—	—	15	外)灰N4/ 黒)灰17.5Y7/1		高知県安芸市 角枠内「御瓦鉢」鉢印あり。
205	瓦罈1	线瓦又は 平瓦	—	—	16	外)灰N4/ 黒)灰NS/		高知県安芸市 「御瓦鉢」鉢印あり。
206	瓦罈1	线瓦又は 平瓦	—	—	16	外)灰N4/ 黒)灰15Y7/1		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
207	瓦罈1	线瓦又は 平瓦	—	—	—	外)灰N4/ 黒)灰NS/		高知県安芸市 「安往」鉢印あり。
208	瓦罈1	线瓦又は 平瓦	—	—	15	外)灰N4/ 黒)灰17.5Y8/1		高知県香南市野市町中山田 角枠内「中山林」鉢印あり。
209	瓦罈1	线瓦又は 平瓦	—	—	15	外)暗灰N3/ 黒)灰15Y7/		高知県香南市野市町中山田 角枠内「中山乙」鉢印あり。
210	瓦罈1	线瓦又は 平瓦	—	—	16	外)灰N4/ 黒)灰NS/		高知県香南市野市町中山田 角枠内「中乙」鉢印あり。
211	瓦罈1	线瓦又は 平瓦	—	—	16	外)灰N4/ 黒)灰15Y7/		高知県香南市野市町中山田 小判枠内「中乙」鉢印あり。
212	瓦罈1	线瓦又は 平瓦	—	—	16	外)灰N4/ 黒)灰15Y7/		角枠内鉢印あり。
213	瓦罈1	线瓦又は 平瓦	—	—	16	外)灰NS/ 黒)灰15Y7/		角枠内「小の忠」鉢印あり。

Tab.14 遺物観察表(瓦)

国版 番号	出土 地点	種類	法量(cm)			色調	特徴	備考(生産地・銘)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
214	瓦面1	純瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 瓦N4/ 筋) 瓦白N7/		角棒内鉢印あり。文字は不明。
215	瓦面1	純瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 瓦N5/ 筋) 瓦N6/		大阪府堺市 角棒内「堺大小路」鉢印あり。
216	瓦面1	純瓦又は 平瓦	—	—	21	外) 瓦N5/ 筋) 瓦N7/		大阪府堺市 丸棒内「堺」鉢印あり。
217	瓦面1	純瓦	—	—	16	外) 瓦N4/ 筋) 瓦N6/		大阪府堺市 「○」印あり。
221	瓦面3	丸瓦	—	—	16	外) 瓦N4/ 筋) 瓦E175Y7/1		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
222	瓦面3	丸瓦	—	—	20	外) 瓦N5/ 筋) 瓦E175Y8/1	内面に布目。	高知県香南市野市町中山田 小判杵内「中己」鉢印あり。
223	瓦面3	純瓦又は 平瓦	—	—	17	外) 瓦N4/ 筋) 瓦E1N7/		高知県安芸市 「側瓦頭」鉢印あり。
224	瓦面3	純瓦又は 平瓦	—	—	17	外) 瓦N4/ 筋) 瓦E1N7/		高知県安芸市 「安芸」鉢印あり。
225	瓦面3	純瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 帽瓦N3/ 筋) 瓦E1N7/		高知県香南市香我美町櫻王子 角棒内「他民」鉢印あり。
226	瓦面3	純瓦又は 平瓦	—	—	14	外) 帽瓦N3/ 筋) 瓦E1N7/		高知県香南市野市町中山田 「中口」鉢印あり。
227	瓦面3	純瓦	—	—	14	外) 瓦N5/ 筋) 瓦E175Y8/1	キラ粉を使用。	高知県香南市野市町中山田 角棒内「中己」鉢印あり。
228	瓦面3	純瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 瓦N4/ 筋) 瓦E1N7/		角棒内「三山口」鉢印あり。
229	瓦面3	純瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 帽瓦N3/ 筋) 瓦E1N7/		角棒内鉢印あり。
235	包含層 Ⅱ層	丸瓦	—	—	17	外) 帽瓦N3/ 筋) 瓦N5/		高知県安芸市 角棒内「安善」鉢印あり。
236	包含層 Ⅱ層	軒丸瓦	14.9	10.5	17	外) 瓦N4/ 筋) 瓦E175Y7/1	三巴文。珠数12。	
257	包含層 Ⅲ層	丸瓦	—	—	全厚 15	外) 帽瓦N3/ 筋) 瓦E1N7/		
258	包含層 Ⅲ層	軒丸瓦 右丸瓦	46	29	15	外) 瓦N4/ 筋) 瓦E125Y7/1	中心彫りは三巴文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 「側瓦頭」鉢印あり。
259	包含層 Ⅲ層	軒丸瓦 左丸瓦	—	—	15	外) 瓦N4/ 筋) 瓦白N8/	中心彫りは丁字文。両側に均整唐草文。キラ粉を使用。	
260	包含層 Ⅲ層	軒丸瓦	45	30	16	外) 瓦N4/ 筋) 瓦E1N7/	中心彫りは丁字文。両側に均整唐草文。	
261	包含層 Ⅲ層	軒丸瓦 左丸瓦	—	—	15	外) 帽瓦N3/ 筋) 瓦E1N8/	中心彫りは丁字文。両側に均整唐草文。キラ粉を使用。	高知県香南市香我美町櫻王子 角棒内「他民」鉢印あり。
262	包含層 Ⅲ層	軒丸瓦 左丸瓦	43	28	15	外) 帽瓦N3/ 筋) 瓦白N8/	中心彫りは丁字文。両側に均整唐草文。キラ粉を使用。	
263	包含層 Ⅲ層	軒丸瓦 右丸瓦	41	25	15	外) 帽瓦N3/ 筋) 瓦E10Y6/1	中心彫りは萬文。両側に均整唐草文。	
264	包含層 Ⅲ層	軒丸瓦 右丸瓦	45	30	16	外) 瓦N4/ 筋) 瓦白N8/	中心彫りは丁字文。両側に均整唐草文。	高知県香南市野市町中山田 小判杵内「中己」鉢印あり。
265	包含層 Ⅲ層	丸瓦	—	—	17	外) 瓦N4/ 筋) 瓦N6/		高知県安芸市 「側瓦頭」鉢印あり。
266	包含層 Ⅲ層	純瓦又は 平瓦	—	—	17	外) 瓦N4/ 筋) 瓦E1N7/		高知県安芸市 「側瓦頭」鉢印あり。
267	包含層 Ⅲ層	純瓦又は 平瓦	—	—	20	外) 瓦N4/ 筋) 瓦N5/		高知県安芸市 「安善」鉢印あり。
268	包含層 Ⅲ層	純瓦又は 平瓦	—	—	—	外) 瓦N5/ 筋) 瓦E15Y7/1		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
269	包含層 Ⅰ層	丸瓦	—	—	15	外) 瓦N4/ 筋) 瓦E1N7/		高知県香南市野市町中山田 小判杵内「中己」鉢印あり。
270	包含層 Ⅱ層	純瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 瓦N4/ 筋) 瓦N5/		高知県香南市野市町中山田 小判杵内「中己」鉢印あり。
271	包含層 Ⅱ層	純瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 帽瓦N3/ 筋) 瓦N6/		高知県香南市野市町中山田 角棒内「中山林」鉢印あり。
272	包含層 Ⅱ層	純瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 瓦N4/ 筋) 瓦N7/		高知県香南市野市町中山田 「中支」鉢印あり。
273	包含層 Ⅱ層	純瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 瓦N4/ 筋) 瓦白N7/		高知県香南市香我美町櫻王子 角棒内「他民」鉢印あり。

Tab.15 遺物觀察表(瓦)

図版番号	出土地点	種類	法量(cm)			色調	特徴	備考(生産地・銘)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
274	包含層 Ⅱ層	焼瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 灰N4/ 内) 灰白N7/		高知県香南市香我美町他王子 角棒内「他民」鉢印あり。
275	包含層 Ⅱ層	焼瓦又は 平瓦	—	—	19	外) 灰灰N3/ 内) 灰白N3Y7/1		大阪府堺市 側面に丸印内「堺」鉢印あり。
276	包含層 Ⅱ層	平瓦	全長 27.2	扶縁面幅 23.0 広縁面幅 25.4	21	外) 灰灰N3/ 内) 灰白N7/		

※復元径は法量を[] 表記した。

【遺物觀察表凡例】

- 色調欄の略号「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面を表している。
- 色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。

第V章 考察

第1節 古墳時代から中世の検出遺構について

はじめに

今回の高知城跡北曲輪地区の調査では、古墳時代から近世にかけての遺構と遺物が検出された。大高坂山北側の地域で古墳時代から古代の遺構が検出された事例は今回が初めてであり、周辺域での該当期の動向を知る貴重な成果が得られている。また中世については、これまでに高知城跡の御台所屋敷跡発掘調査^(注1)にて該当期の遺構が確認されているが、今回、城山の北側山裾部分まで中世の遺跡が広がっていることが新たに確認できた。

本節では、古墳時代から中世までの検出遺構と遺物について特徴をまとめた。遺構数、遺物量とも少なく不十分なところが多いが、文献史料や周辺域での発掘調査成果も照合させながら、今次検出遺構の特徴と性格について検討しておきたい。

1. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、土坑3基 (SK3・4・10) が調査区南東部の標高2.15m前後的位置で集中して検出された。土坑は径1~1.5m前後と何れも小型で、遺物量も少量であったが、遺構内から土師器高杯(4)・小型丸底鉢(3)・壺(1)・壺又は壺(2)など、古墳時代初頭～前期の遺物が得られている。また、調査区の南壁セクション (Fig6) によると、古代の遺構群が検出された南端部側では標高2.2mの高さまで岩盤からなる地山が露出しており、これらの土坑群が山裾の微高地に掘削されていたことが分かる。

今回確認された古墳時代の遺構群の性格については、検出面積も少なく、周辺域での遺跡の分布も明らかでないため分かり難い。近隣の遺跡では、大高坂山の北西に位置する尾戸遺跡にて弥生時代の石斧が発見されているが、古墳時代の遺構は検出されていない。しかし、大高坂山の南西側の山麓にあたる高知城伝下屋敷跡の調査^(注2)では、弥生時代終末期の土坑が検出されており、山裾の微高地付近に該当期の遺跡が存在していたことが明らかにされている。今次調査区を含めて、大高坂山周辺での遺跡の広がりが推察される。

2. 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、調査区の南東部で土坑5基 (SK1・5・6・9・14)、ピット7個 (P2~5・7~9)、北東部側で炭化物溜り（炭化物溜り1）を検出している。土坑の形態は梢円形、円形等様々で、調査区南端の山裾に沿った部分に土坑が集中する傾向がみられる。出土遺物は、須恵器杯(10・57)・皿(12)・高杯(61)・蓋(13・38・40)・瓶(41)、土師器杯(6)・皿(7・21・22)・壺(49)・土鍾(56)、製塙土器(8・9)等、8世紀から9世紀までの遺物が主体を占めるが、京都系の縁軸陶器杯(37)・小皿(59)、灰釉陶器杯又は碗(36)等、10~11世紀の遺物も少量認められる。この他、包含層Ⅲ層内より古代又は中世の布目瓦(63)も出土している。

さて、これらの遺構群の性格であるが、古代の遺跡は、北を流れる久万川以北の台地上に東久万池田遺跡、西秦泉寺遺跡等が存在するものの、大高坂山周辺域では遺跡の分布状況が殆どつかめない。しかし史料によると、10世紀初めの『倭名類從抄』には、土佐国四三郷中で高知市域にあたるものは「土佐（一宮）・高坂・鶴部・朝倉・神戸（神田）」とあり、今次調査区を含む大高坂山周辺地域は古代の高坂郷に属すると考えられる。^(註3) そして同史料の記載から、10世紀には大高坂山の周辺地域も律令制下において開発が進められていたと考えられる。また、古代の高坂郷についてはこれ以外の記録が見えず、実態が不明であるが、高知市の北部を流れる久万川以北の地域については、『性畫集』に天長3年（826）に和氣氏が土佐國久満ならびに田村ノ庄を神護寺に寄進するとの記事があり、「久満」が9世紀以前から和氣氏の庄園として開発されていたことが窺われる。

この様に、久万川以北の地域は9世紀にはすでに庄園化が進められていたのであるが、古代の高坂郷ではどの部分まで開発が進んでいたのだろうか。この問題について、横川末吉氏は等高線の分布をもとに、城山より西までには古代の開発が進められていただろうと推定されている。^(註4) これによると、今次調査区は氏の推定ラインの東端辺りに位置することとなり、周辺に古代の集落が展開していたことも推察されよう。

3. 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、土坑3基（SK7・11・13）、溝1条（SD2）、ピット1個（P6）を検出している。このうち、SK13が12世紀後半～13世紀前半、SK7が15～16世紀、SD2が16世紀に位置付けられるものであり、2時期の遺構が確認されている。

まず、SK13は調査区の南部で検出されたもので、検出状況からみると、当時は山裾の斜面近くに掘削されていたとみられる。埋土中からは土師質土器片、須恵器片、須恵器甕、瓦器椀が出土しており、瓦器椀の内容からみて12世紀後半から13世紀前半に比定される。

この時期の周辺域での動向は文献史料が乏しく、実態がつかみ難いが、10世紀の『和名抄』に示された高坂郷が、その後開発されて約田、串田として大黒氏の所領となり、その後、高坂郷では地頭大高坂氏が大高坂城を中心鎌倉時代以降発展したとされる。^(註4)一方、遺跡調査からはこの時期の遺構は周辺地域では確認されておらず、今回の遺構の確認によって、古代末から中世初めまで大高坂山周辺で生活が営まれていたことが新たに確認されることとなった。

次に15～16世紀の遺構では、調査区の北部側で検出されたSK7と南部側で検出されたSD2がある。このうち、SD2は大高坂山山裾の斜面に沿って南東から北西方向に延びるもので、山の岩盤層を掘削することによって形成されている。検出規模は幅約1.9m、深さ68cmで、大型の溝であったとみられるが、堆積状況からは、機能時において常時水の溜まっていた様な痕跡は確認できない。出土遺物は在地系の土師質土器杯（66～80）、皿（82・83）、土鍤（94）、須恵器甕（90・91・93）と、播磨型の土師質土器鍋（84）、備前焼の擂鉢（85）、甕（87・88）、壺又は瓶（89）等である。播磨型鍋と備前焼擂鉢、甕等の15世紀代の遺物も含まれるが、土師質土器杯（66～71）は芳原城跡出土資料^(註5)に共通するプロポーションをもつもので16世紀第2～第3四半期に比定されるものである。また、SK7からは土師質土器杯（64・65）と備前焼甕の体部片が出土している。

大高坂山とその周辺域で、中世後期の遺構の検出例をみると、高知城跡伝御台所屋敷跡の調査^(註1)にて、柱穴、土坑等の15～16世紀代の遺構とともに土師質土器、備前焼、中国産青磁、青花などの遺物が出土しており、本山氏、長宗我部氏の支配下にあった頃の大高坂城の遺構、遺物が確認されている。また、三ノ丸石垣整備事業に伴う調査^(註6)では、大高坂城が長宗我部氏の居城であった天正16年(1588)から19年(1591)の間に構築された石垣が検出されている。

今回検出されたSD2・SK7は、出土遺物の内容からみると長宗我部期以前の遺構であった可能性が高く、出土遺物も伝御台所屋敷跡に共通するものであった。こうしたことから、北曲輪地区の中世の遺構は大高坂城との関係が深かったとみられ、山城に付随する遺構が北側の山麓に造成されていたことが推察される。

[註]

- 1)「高知城跡－伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書」高知県文化財団埋蔵文化財センター1995年
- 2)「高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地理文化財発掘調査報告書」高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
- 3)「長宗我部地検帳」の「大高坂郷地検帳」によると、高坂郷の範囲はおよそ現在の鏡川以北、久万川以南、比島以西、升形－江の口川－小高坂以東の地域を指すと考えられている。
- 4) 横川末吉「第一編 古代・中世」『高知市史 上巻』高知市1958年
- 5)「芳原城跡発掘調査報告書」高知県教育委員会1984年、「芳原城跡II－第2～4次発掘調査報告書」春野町教育委員会1993年、「芳原城跡III－第5次発掘調査報告書」春野町教育委員会1995年
- 6)「史跡高知城跡－三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書」高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2010年

第2節 高知城跡北曲輪地区の性格と近世の検出遺構

はじめに

近年、高知城跡では、御台所屋敷跡^(註1)、黒鉄門前と本丸石垣^(註2)、三ノ丸石垣^(註3)、丸ノ内緑地地区^(註4)の調査が行われ、考古学的手法によって近世城郭の構造が徐々に明らかにされている。また、城の北側部分では、平成10年度に江ノ口川南岸石垣部分の調査^(註5)が行われている。

今回の調査区は城の北側にある北曲輪地区にあたっているが、ここでの本格的な発掘調査は今回が初めてであり、石列や溝、土坑などの近世の遺構が検出され、成果が得られた。これらの成果をまとめることにあたって、以下では、絵図や史料から知り得る遺跡の立地と景観の変遷なども照合しながら、今次検出遺構の性格を検討しておきたい。

1. 史料による高知城跡北曲輪地区の景観と性格

北曲輪は高知城北側の山裾に広がる平地で、北は当時内堀の役割を果たしていた江ノ口川（大川）の南岸に接している。この郭の東北には「北ノ口御門」と呼ばれた建物があり、廟内には武器弾薬、食料の倉庫や、作事方の詰所などがあったとされる。

平成18年度調査区はこの北曲輪の西側隅にあり、数箇所で近世の遺構が確認されている。これら検出遺構の性格を考えるためにあたって、以下では、まず絵図や史料に表れる北曲輪の景観の変化やその機能について見ておきたい。

江戸前期

この時期、北曲輪の概況を知ることができる絵図としては、幕府差し出しの絵図である正保年間（1644～1648）の『正保城絵図』^(註6)と、寛文九年（1669）の『寛文己酉高知絵図』^(註7)を挙げることができる。

まず『正保城絵図』では、北東の入り口部分に、当時「北口御門」と呼ばれた北門が描かれている。また、内部には「侍屋敷」の記述が見え、この段階には北曲輪の敷地全体が侍屋敷として利用されていたことが分かる。この他には、江ノ口川南岸の北曲輪に沿う部分に「石垣長八十間高一間三尺」との記述が見えていることも注目される。すなわちこの絵図で内堀の岸は何れも土手とされており、石垣の記載があるのは、北曲輪に接するこの部分のみである。そのため、運河としての機能も果たした江ノ口川に接する立地から、北曲輪は城内への物資搬入に関わる地点として、江戸初期より重要な役割を果たしていたことが推察される。また、江ノ口川の氾濫時に備えて、その護岸が重点的に整備されたことも窺われる。

次に『寛文己酉高知絵図』（Fig.50－図1）を見てみたい。これによると、北曲輪北岸に石垣が表現されている点は、先の『正保城絵図』の内容と同じである。しかし、内部の構造には変化があり、北門から入った平地の東部分には「御米蔵」と記された瓦葺きの長い建物が南北に並んで描かれている。また、北側の江ノ口川岸に沿った位置には、「御武具蔵」と記された瓦葺きの長い建物が描かれている。その南側には「馬渕八右衛門」の侍名を記した区間があり、侍屋敷が引き続き残るが、その南には「御作事場」と記された一画が現れている。この他、各々の施設や侍屋敷は堀とみられ

る境界施設によって区画されている様子が描かれる。また南の山裾斜面のすぐ下には、堀と同じ薄茶色で彩色した性格不明の施設が見られるが、溝や排水用の池などであろうか。

江戸中期

次に江戸中期になると、製作年代が明らかで、且つ城内の施設を詳細に記した近世の絵図資料が見当たらず、北曲輪内の様相が分かり難い。しかしこの時期、城内の施設の動向に影響を与えたと考えられる事象に、元禄11年(1698)と享保12年(1727)の大火がある。

まず、元禄11年(1698)の大火では、城下のうち北奉公人町、内堤、帯屋町筋、大門町、本町筋、中島町、与力町、南片町が甚大な被害を受けたが、この時には城内の下屋敷と太鼓丸が焼失している。^(註8) 続いて、享保12年(1727)の大火でも城内の大半が焼失しており、この時の被害の内容について『皆山集』に収められた記事「享保十二年公義へ差出高知城出火被害」^(註9)に、焼けた建物について「一、天守 一、本丸ニノ丸三ノ丸但櫓五ヶ所門廊下長屋解并土蔵共 一、役所三ヶ所 一、城外役屋敷四ヶ所」、焼け残った建物について「一、大手門 西ノ口大門 北ノ口大門 但堀并長屋番所共 一、城内櫓三ヶ所但堀共 一、同廊下三ヶ所 一、同所ニ門六ヶ所但堀共 一、同堀所々焼残り申候 一、同土蔵所々焼残り申候 一、屋敷一ヶ所 右之分焼残り申候」との記載がみえる。これららの記事から、北曲輪内の諸施設は元禄11年、享保12年ともに焼失を免れていたことが分かる。

しかしながら、これらの火災を契機にして、城内の建物の配置にも変化がもたらされたとみられる。『皆山集』には「詔謀記事云西大門廣小路も元禄十一寅年火事以前ハ西ノ口瀬戸氏門前より南不破氏の辺迺向輪侍屋敷二て第十某なと云侍居けると也 火事以後東側ハ除きて廣小路と成也」^(註10)とあり、城内に置かれていた西ノ口門周辺の侍屋敷が、元禄11年の大火を契機に取り除かれたとの内容が示されているが、この様な動きは、北曲輪内の侍屋敷についても少なからずの影響を与えたとみられる。後述する江戸後期以降の絵図では、北曲輪内の侍屋敷はすでに無く、役所及び米や武器の保管所としての機能がさらに強められている。

江戸後期

江戸後期の資料では、まず、天保元年(1830)の『天保元年高知之図』^(註11)(Fig.51 - 図4)が挙げられる。同絵図の性格からみると、城内の描写には、先の『寛文己酉高知絵図』に認められた内容の正確さは期待できないが、記事としては、建物や周辺施設の特徴が詳細に描かれている。これによると、北曲輪の東北に「北ノ口」と記した門が描かれ、門の内側に「御番所」、内部東側に「北御蔵」と記した数棟の切り妻屋根の建物、内部西側に「御武具方」とした一棟の建物、「武具蔵」とした切り妻屋根の建物数棟、西端の山裾に近い部分に「御蔵」とした数棟の長い建物が描かれている。また、西側敷地の周囲には、江ノ口川の岸に沿って石垣と並木、南の山裾から東の境界部分にかけて柵と性格不明の帶線(溝や堀を表したものか)が描かれている。

この他、天保12年(1841)の『土佐国高知城下町絵図』^(註12)では、城内建物の描写は見られないが、北曲輪の西方の一画に「御武具方」、東方に「北御蔵」の文字が見えている。

明治

最後に、高知城懐德館所蔵の『高知城の圖』^(註13)(Fig.51 - 図5)は近代の資料であるが、記載の年代が明らかであるため引用する。この絵図には「此の城郭圖は寶永二年六月十五日山内家より石垣

修繕のため頼出でし書に添へ徳川幕府へ提出せし圖を基礎とし明治六年五月城内諸建築物を取扱つ前に技師の實測調査せし記録と實測圖とによりて描き尙日記を参考として附加記入せしものなり」との付記があり、明治6年に城内的一部建築物を解体する直前の概況が示されている。この絵図によると、北門の内側に「番所」、敷地の中央に南北方向の堀とみられる境界があり、境界から東の区画に5棟の「米倉」、1棟の「作事方倉」、西の区画には入り口付近に「武器倉」、その奥に8棟の「武器庫」、各1棟の「武器庫方役所」と「作事方」、南側には「張付方」と「米倉」の建物があり、これらが明治6年に解体されたものとして輪郭線で描き分けられている。そして、所々に「井戸」、「石垣」、「射場」、「櫻ノ並木」等の付属施設の位置が書き加えられている。

この他、明治6年の高知城内建物に関する記録では、「皆山集」に「明治五、六年ノ此朝廷御届扣 土佐郡高知城」^(注14)とする記事が収められている。これは朝廷への届出という性格をもつため、城内建物の名称、棟数、広さ等が正確に記録されているとみられる。また、届出文の末行には「但委細別紙図面上ノ通」とあり、これに別紙の図面が添えられていたことが分かるが、「明治五、六年ノ此朝廷御届扣 土佐郡高知城」の記載内容と、先の『高知城の圖』での武器庫、米倉、その他の建物数が一致している。

さて、同記録で北曲輪に関連する建物の広さを見ると、「番所」が13坪5歩、「作事方」が70坪、「作事方蔵」が24坪、「張付方」が21坪2歩5厘、「武器庫方役所」が28坪7歩5厘である。倉庫群についてみると、武器庫は合計9棟があり、60坪のものが2棟、30坪が3棟、36坪、23坪7歩5厘、12坪5歩、11坪2歩5厘のものが各1棟である。また、米倉は合計6棟あり、100坪のものが1棟、60坪が1棟、30坪が2棟、21坪が1棟、離れて作事方の側にある米倉1棟が39坪となっている。そして、これらの主要な建物が明治6年に解体に至っている。

2. 検出遺構の特徴と性格

(1) 遺構の概要

近世の遺構は土坑3基 (SK2・8・12)、溝及び溝状遺構3条 (SD1・3・4)、ピット1基 (P1)、性格不明遺構1基 (SX1)、石列4箇所 (石列1～4) を検出し、その他、瓦溜りを5箇所で確認している。以下、特徴的な遺構について検討を加えておきたい。

①石列

石列1～3は調査区の東部側で検出したもので、廃絶年代は19世紀中葉に比定されている。全体を見ると、南北方向の2条の石列が幅約2.5mの間隔をもって並行しており、これと直角に交わる東西方向の石列も一部残存している。また、周囲には漆喰と瓦片を廃棄した瓦溜1～3が広がっており、この中に鉄釘も多く含まれていた。このため石列1～3は、幅約2.5mで南北に細長い長方形のプランをもつ建物の礎石あるいは敷地境界の石列であった可能性がある。ただし建物とした場合、石組は不揃いで小規模であるため、非常に簡素な建物か、長屋堀などの敷地境界であったのかもしれない。

また、東西方向の2列の石列間には、排水又は導水施設とみられる素焼きの土管 (181) が据えられていた。土管 (181) は外径21.0cm、残存長は62.3cmで、内面にユビオサエ痕や粘土紐接合痕が顯著

に残り、外面にハケ、内面にユビナデとハケ調整が施されるものである。胎土中にはチャートの粗砂と金雲母が含まれており、関西産の可能性がある。

近世の土管に関わって類例の資料を挙げると、姫路城跡発掘調査^(註15)の事例があり、侍屋敷の19世紀の土坑内から土師質土器製とされる土管が複数出土している。また、近世の上水道施設が完成されていた赤穂城下町の発掘調査では、町屋の上水道関連遺構が確認されており、給水管と排水管の管材に17世紀から18世紀までは竹管が使用され、19世紀以降は瓦管や陶器製土管が使用されたことが報告されている。^(註16)

こうした事例に照合させると、本調査区出土の土管も19世紀以降幕末までの間に使用されていた可能性が高い。そしてこの場合、排水管としての機能を果たしたものであろう。

②溝

溝はSD1とSD3を検出しており、廃絶年代はSD3が18世紀以降、SD1が19世紀中葉にあたる。共に調査区の南側に位置しており、SD3は城山の斜面に沿うように東西に延びている。SD1も南側の山裾に近い部分で検出されたもので、北岸のみの検出であるが、確認幅は2.6m、確認深度は130cmであり、大型の溝であったと予想される。

SD1の埋め戻し土の最上面には、漆喰と瓦、鉄釘等が多く廃棄されており、同じく19世紀中葉に比定される石列1～3の廃絶状況と共通している。しかし、石列1の南部端の石がSD1の上面に乗つておらず(Fig.26・27)、SD1と石列1の廃絶には若干の前後差があったと考えられる。

③土坑

調査区の北西端で大型の土坑SK2を検出した。部分的な検出のため全体の形態が明らかになっておらず、性格も特定し難いが、周縁に巡らせた石組に特徴がある。東側に並んだ2組の石は大型で扁平であり、足場などの目的も想定される。また、SK2の周縁へ浅い掘り込みを巡らした後に石を設置しており、石組の上面が揃う様に工夫されていたことが分かる。遺構の検出規模は南北確認長4.08m、東西確認長1.50m、深さ41cmであるが、推定される遺構の全体規模はさらに大型になるとみられる。埋土は最下層に粗砂が含まれており、機能時には下位に水が流れ込んでいた痕跡が認められる。

こうした石組の作りや、全体の規模、埋土の状況などからみると、池や貯水施設等の性格をもつ遺構であろうか。SK2の廃絶年代は19世紀中葉で、上面には瓦溝4が広がっていることから、石列1～3等の諸施設とともに廃絶に至ったと考えられる。

(2) 遺構の性格

それでは、これらの遺構群は北曲輪のどの位置に該当し、どのような機能を果たしていたのだろうか。先に挙げた『寛文己酉高知絵図』は藩撰図と推定され、縮尺その他に高い精度が認められているため、この絵図と現在の調査区の位置とを比較し、手掛かりとしたい。(Fig.50－図2・3)これによると、平成18年度調査区は、『寛文己酉高知絵図』で「御武具蔵」「馬渕八右衛門」と記した区画よりさらに西に外れた、北曲輪の西端の位置に相当していることが分かる。

次に、石列1～3、SD1、SK2は19世紀中葉に廃絶しているため、この時期に最も近い様相を示していると思われる明治6年の『高知城の圖』と比べてみたい。ただし、先に触れた『明治五、六年

ノ此朝廷御届扣「土佐郡高知城」での建物の面積と、『高知城の圖』の建物の大きさは、縮尺が合っておらず、この絵図の縮尺や建物位置には精度が求められることには注意しなければならない。そこでこのような絵図の性質も考慮した上で、北曲輪西側部分の施設配置を見てみると、同絵図には南北にのびる長屋風の建物、溝、土坑、池の記述は認められない。これについては、絵図の性格からみて、記録の必要がない小規模な建物や素掘りの溝、土坑、池などが省略された可能性も考えられよう。また、発掘調査では、各遺構から明治以降の遺物が出土していないことから、SD1、SK2の廃絶や石列1~3を伴う施設の解体が、明治以前に完了していたことも考えられる。

では、絵図上に表れないこれらの遺構はどのように捉えたら良いのだろうか。『高知城の圖』では、城内の堀について「瓦葺堀」「コケラ葺堀」の表示がみられており、同絵図の北曲輪部分にも、南北に延びる堀状の境界施設が明治6年に取り壇されたものとして表示されている。また、先に取り上げた「享保十二年公義へ差出高知城出火被害」⁽³⁹⁾の記載からは、本丸、二ノ丸、三ノ丸に「長屋堀」があったことも窺われ、城内に「瓦葺堀」「コケラ葺堀」「長屋堀」などの境界施設が存在していたことが分かる。

とすれば、石列1~3も長屋堀に類似する境界施設としての機能をもつ建物であり、北曲輪内の諸施設を外部と区画する、西の境界としての役割を果たしたものであろうか。そして石列に付属した土管の年代観からみて、この境界施設の機能した時期は19世紀以降とみられる。

さて、ここで再び『寛文己酉高知絵図』に注目すると、今次調査区が該当する北曲輪南西隅の山裾部分には、灰色の性格不明な表記(Fig.50-図1・3)がなされており、これが城山の斜面に沿って設けられた溝や池を表現しているように見える。さらに、この溝又は池状の施設に接して、石組(或は石垣か)の様なものが南北方向に設けられている様子も描かれている。そして今回検出したSD1と石列1~3の位置を先の方法にて絵図上に落とすと、ちょうどこれらの溝と石組みの位置に重なるのである。これらの遺構が幕末まで継続していたかどうかは疑問であるが、該当地点が山裾の溝や、敷地境界施設が置かれ易い場所であったことが分かる。

北曲輪は、米倉、武具倉などの倉庫群や関連の役所が幕末まで置かれ、近世を通じて城内の武器、食料の管理や諸経営の場として機能した。そして、今次検出の遺構群は、北曲輪内の主要施設を外部と区画し、敷地内の排水を調整するなどの役割をもつものであった。北曲輪は江ノ口川に接し、城山のすぐ下に位置するなど利便な立地にあったが、その立地ゆえに、川の増水時への対応や山斜面から流れ出る雨水の処理が必要であったのだろう。こうした目的に関わる小規模な施設は、絵図や記録上に表れることが少ないと、実際にはこの様な整備が北曲輪の随所に施されていたと推察される。

[註]

- 1)『史跡高知城跡1－高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1994年『高知城跡－伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- 2)『史跡高知城跡－本丸石垣整備事業報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年
- 3)『史跡高知城跡－三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書』
高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2010年
- 4)『史跡高知城跡－丸ノ内縁地試掘確認調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2006年
- 5)『秦泉寺廃寺（第5次調査）－店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、附 高知城北側外堀石垣の調査』
高知市教育委員会 2002
- 6)『正保城絵図』国立公文書館内閣文庫所蔵。
- 7)『寛文己酉高知絵図』高知市立市民図書館平尾文庫所蔵。
- 8)「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」『土佐国史料集成 南路志 第七卷』高知県立図書館 平成6年より引用。
- 9)「享保十二年公義へ差出高知城出火被害」『土佐之国史料類纂 皆山集 第六卷』高知県立図書館より引用。
- 10)「高知市街誌稿」『皆山集』『土佐之国史料類纂 皆山集 第九卷』高知県立図書館より引用。
- 11)『天保元年高知之図』吉松靖峯氏所蔵。吉松清氏による現代の写し。高知市発行『図録高知市史』より引用。
- 12)『土佐国高知城下町絵図』国立公文書館所蔵。竹内重意が天保12年に作図との奥書きあり。
『中・四国の市街古図』鹿島出版会 昭和54年より引用。
- 13)『高知城の圖』高知城懐徳館所蔵。
- 14)『土佐之国史料類纂 皆山集 第三卷』高知県立図書館より引用。
- 15)『特別史跡 姫路城跡－学校法人淳心学院整備事業に伴う発掘調査報告書』姫路市教育委員会 2007
- 16)『発掘された赤穂城下町－赤穂駅前大石神社線街路整備事業に伴う赤穂城下町跡発掘調査報告書1』兵庫県赤穂市教育委員会 2005

[絵図出典その他]

- 『正保城絵図』国立公文書館内閣文庫所蔵。
- 『寛文己酉高知絵図』高知市立市民図書館平尾文庫所蔵。
- 『天保元年高知之図』吉松靖峯氏所蔵。吉松清氏による現代の写し。
- 『土佐国高知城下町絵図』国立公文書館所蔵。竹内重意が天保12年に作図との奥書きあり。
- 『高知城の圖』高知城懐徳館所蔵。

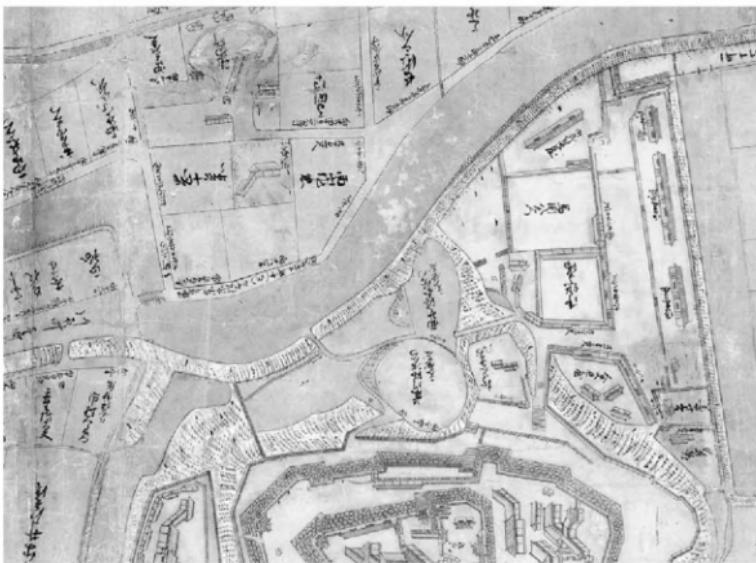


図1 「寛文己酉高知絵図」寛文9年（1669）
(高知市民図書館所蔵の絵図より抜粋。)



図2 平成3年地図 (S=1/5,000)
(『高知広域都市図38』より抜粋。一部加筆。)



図3 「寛文己酉高知絵図」
(高知市民図書館所蔵の絵図より抜粋。一部加筆。)

Fig.50 絵図にみる北曲輪の変遷（1）

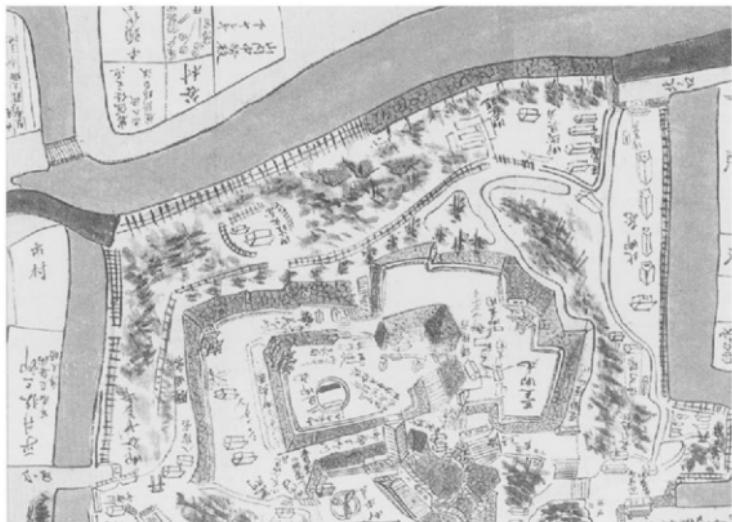


図4 「天保元年高知之図」天保元年（1830）

（吉松清峯氏所蔵の絵図より抜粋。）

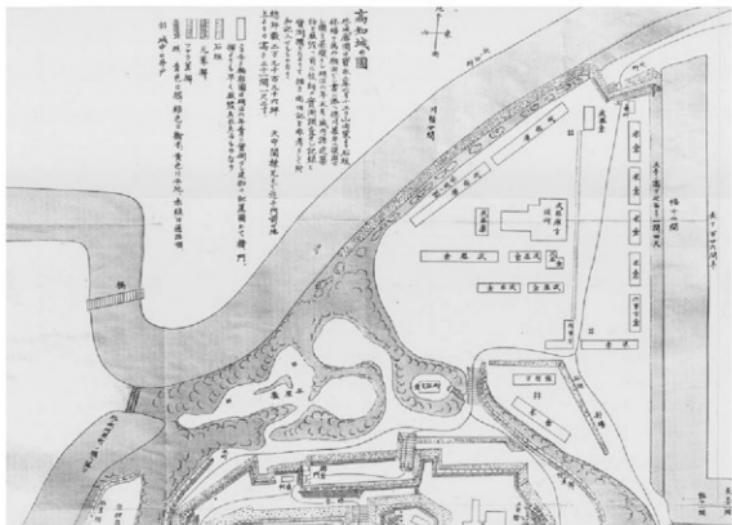


図5 「高知城の図」（高知城権徳館所蔵の絵図より抜粋。）

Fig.51 絵図にみる北曲輪の変遷（2）

第3節 高知城跡北曲輪地区出土の近世陶磁器・土器、近世瓦について

はじめに

今回の調査区では、18世紀以降に廃絶する溝と19世紀中葉に廃絶する溝、土坑、石列等があり、2時期の近世の遺構群が認められた。特に後者では瓦や漆喰など建物の解体に伴う遺物が多く廃棄されており、北曲輪の諸施設が終焉を迎える際の状況を示している。

本節では、これらのうち、19世紀中葉の廃棄資料である瓦溜1～3と大溝SD1出土資料を取り上げ、北曲輪における陶磁器・土器の所有のあり方と、瓦の様相について検討したい。

1. 近世陶磁器・土器

今次調査区についてみると、近世の遺構内から出土する陶磁器・土器の量は比較的少なく、廃棄遺物の主体は瓦片であった。このうちで比較的多くの陶磁器・土器が得られ一括りが高い出土状況を示したものは、19世紀中葉の瓦溜1～3と溝SD1－1層出土遺物である。19世紀中葉に廃絶した溝SD1－1層の廃棄遺物については、瓦溜1～3との間に若干の前後差があったとみられるが、遺物の内容はほぼ共通している。以下では瓦溜1～3と溝SD1－1層出土資料にみられる、陶磁器・土器の様相について触れておきたい。

器種組成

瓦溜1～3・SD1－1層から出土した陶磁器・土器の器種 (Tab.18) は、碗・小杯・皿・鉢・猪口等の供膳具、擂鉢・捏鉢・鍋・焰燈・土瓶等の調理具、壺・瓶等の貯蔵具、焜炉・火鉢・竈等の暖房具と火具、灯明受皿・土器小皿等の灯明具、紅皿等の化粧具である。

これらの器種組成を、城下町の上級武士の屋敷跡にあたる金子橋遺跡や西弘小路遺跡での廃棄資料と比較すると、今次資料では器種のバリエーションが乏しく、特に神仏具(香炉・仏飯器・神酒德利)、化粧具の一部(うがい茶碗・髪油壺・合子・段重)、文房具(水滴・筆立て)、喫煙具(灰吹き・火入れ)、飼育具(餌鉢・鳥の水入れ)、その他(植木鉢・水鉢)、人形と玩具などの用途の器種が認められない点に特徴がみられる。

今次資料が廃棄された地點は北曲輪の南西隅にあたっており、北曲輪に存在した武器庫方役所、作事方、張付方など、城内の施設で使用された陶磁器・土器が廃棄された可能性が高い。このため、詰所に控える侍が使用した必要最小限の生活用具が廃棄されたとも考えられる。本資料にて、家族の生活に関わる多様な用途の遺物が見られない点も、こうした廃棄場所の性格に起因するものであろう。ただし、今次資料では城内の業務に関わる遺物は確認されず、日用の雑器が多数を占める内容であった。

生産地別にみると、肥前、備前、丹波、関西、京都系、瀬戸・美濃、及び在地の能茶山窯と尾戸窯の製品が認められる。このうち能茶山窯の製品では染付中碗(182)、染付皿又は鉢(184)、鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿(110・191)、鉄釉土瓶(113・114)、鉄釉鍋(192)、鉄釉灯明受皿(219)、尾戸窯では灰釉中碗(187)が認められている。なお、本資料中では、明治以降に生産された酸化コバルトを用いた染付磁器は含まれていない。

2. 近世瓦

今回の調査区では、包含層資料も含めて総重量580kgの近世瓦片が出土した。このうち、瓦溜1～3では重量245kg、総破片数1109点、SD1では重量108kg、総破片数278点の瓦片が出土している。

前節にて挙げた近世の絵図や明治初頭の資料によると、北曲輪では明治初頭まで、武器倉、米倉などの倉や、武器庫方役所、作事方、張付方などの瓦葺き建物が置かれたことが分かっており、これらの建物や堀などの境界施設に関わる瓦片が廃棄されたと考えられる。瓦の廃棄年代も共伴の陶磁器から19世紀中葉に位置付けられているもので、この時期、城内の施設にどういった製品が使用されていたのかを知る良好な資料である。以下では、瓦溜1～3とSD1～1層出土の瓦を取り上げ、種類、瓦当文様、刻印等についてまとめておきたい。

(1) 種類別組成

瓦溜1～3・SD1～1層出土の瓦には完形のものは含まれておらず、破片も種類の区別がつかない小片が大多数であった。しかし、部位の観察によって特定できるものもあるため、Tab.16に種類別の破片点数と推定個体数^[註1]を示した。これによると同出土資料の推定個体数は、軒丸瓦18点、丸瓦62点、軒平瓦11点、平瓦2点以上、軒棟瓦35点、棟瓦約70～80点前後、袖瓦9点、棟瓦6点、棟飾り瓦1点・鬼瓦2点であった。

これを見ると、今次資料では棟瓦と軒棟瓦、丸瓦が最も多いが、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦も一定量含まれており、少数ではあるが鬼瓦も認められる。こうした内容から、瓦溜1～3・SD1には、棟瓦葺きの建物や堀に関わる瓦が多く廃棄されたことが分かるが、本瓦葺きの建物や鬼瓦を用いた建物も周間に存在し、それらの瓦片が混じって廃棄されていることが推察される。

今回、瓦片が特に多く廃棄されたSD1と瓦溜1は、北曲輪南西隅の山裾に近い場所に位置しており、こうした場所に周囲の複数の建物からの瓦が廃棄されたと考えられよう。

(2) 各種瓦の特徴

次に、瓦溜1～3・SD1出土資料のうち、特徴を捉え易い軒丸瓦、軒平瓦、軒棟瓦、鬼瓦を取り上げ、文様、刻印、調整等の諸特徴についてまとめておきたい。また類例の遺跡出土資料についても触れ、補足しておきたい。

①軒丸瓦

軒丸瓦では、A.三ツ葉柏文、B.三巴文の2タイプの瓦当文様が認められた。

A.三ツ葉柏文 (130)

三ツ葉柏文軒丸瓦は山内家の家紋瓦で、SD1から1点(130)が出土している。130は瓦当表面に離れ砂とみられる粗砂が多量に付着している点に特徴がある。法量は瓦当の復元径15.6cm、文様区径12.0cmである。これまでに三ツ葉柏文軒丸瓦の出土が確認された発掘調査は、高知城跡では三ノ丸石垣整備に伴う調査^[註2]、本丸石垣整備に伴う調査と黒鉄門前の調査^[註3]丸ノ内縁地試掘確認調査^[註4]、高知城跡以外では高知城伝下屋敷跡^[註5]などがあり、高知城内の各地点及び藩閥連の屋敷から三ツ葉柏文を伴う瓦片が出土している。

B.三巴文 (131)

三巴文軒丸瓦は瓦溜1～3から6点、SD1から11点(131)が出土している。131は珠数12個で、と

もに瓦当にはキラ粉が付着している。ただし両者は瓦当径、文様区径に僅かな違いがあり、同范ではない。

②軒平瓦

軒平瓦の瓦当文様ではA.橘文、B.丁字文を確認した。この他にも唐草文が異なる資料が認められたが、中心飾りを欠損しており文様タイプは不明である。

A. 橘状文 (SD1未実測資料)

高知城跡伝下屋敷跡^(注3)出土の軒平瓦Ⅵ類（同報告書図版番号904・905）と同范とみられるもので、唐草は上向きと二股に分かれる飛び唐草の組み合わせである。今次出土資料では中心飾りを欠損するが、同范瓦と照合して橘状文に分類した。

B. 丁字文 (143)

軒平瓦 (143) は丁字文が略化したもの又は三花文とみられる文様を中心飾りとする。茎の部分は線状で、側面の唐草は下向き－上向きの組み合わせである。刻印は、角枠内字体不明の印を認める。

143と同范の資料を高知城跡の他地点に求めると、黒鉄門前の発掘調査^(注3)にて同范瓦が出土している。この他、瓦溜1出土の未実測資料に、高知城跡伝下屋敷跡出土の軒平瓦Ⅱ類（同報告書図版番号857）と同范のものがある。

③軒棧瓦

軒棧瓦の瓦当文様では、中心飾りがA.三巴文、B.丁字文、C.花文の3タイプがあり、文様の各々にもバリエーションがみられた。なお、以下の文様タイプの類例には一部包含層資料も補足した。

A. 三巴文 (132・134・136・198)

三巴文を中心飾りとする。両側の唐草は、内側から順に上向き－下向き－巻き込みの無い上向きの唐草の組み合わせである。唐草の巻き具合には僅かな違いも見えるが、唐草の組み合わせは共通する。刻印では「御瓦師」(133・134)、「アキ□」(136)、「いおろい栄」(198)印を伴うものがある。

B. 丁字文 (137・138・141)

丁字はフトモモ科の常緑高木で、蕾の時に乾燥させたものは「丁香」「丁字」といい、古来より香料や薬、染料として珍重された。この丁字の実を象ったものが宝尽くしの文様の一つとなっており、近世の陶器にも丁字文が描かれている。軒棧瓦に認められた丁字文は、何れも丁字三本を組み合わせるパターンであるが、茎部分の太さなど個々の表現には違いがあり、複数のタイプが見える。包含層資料にも類例が見られるため、これも含めて以下に示した。

B-a : 丁字は太い茎に花部がつくもの。唐草は上向き－下向き－巻き込みの無い上向きの組み合わせ。(137・138・包含層259～261)

B-b : 丁字は太い茎に花部がつくもので、花部の中に点が付く。唐草は下向き－上向きの組み合わせ。(141・包含層264)

B-c : 丁字は太い茎に花部がつくもので、花部の中に点が付き、茎の中に線が付く。唐草は下向き－上向き－巻き込みの無い下向きの唐草の組み合わせ。(瓦溜1未実測資料・包含層262)

刻印では角枠内「徳民」印を伴うもの(137・138)があり、「徳民」印が文様タイプのB-aに対応する。なお、包含層資料では小判枠内「中己」印(264)も認められており、「中己」印が文様タイプのB

- bに対応する。

C. 花文 (200)

瓦溜1出土の200があるが、小破片のため刻印の有無は分からない。

④鬼瓦

猪ノ目文を施す鬼瓦の破片(128)が出土している。128は二次被熱を受けにぶい橙色に発色する。

(3) 刻印瓦について

今回、瓦溜1～3・SD1出土資料のうちに、軒平瓦、平瓦、軒棧瓦、棧瓦の占める推定個体数(Tab.16)を推定したところ、122～152個体前後になるとみられる。⁽³⁶⁾このうち刻印が認められた破片の点数は96点(Tab.17)で、刻印瓦の比率は63%～79%前後になる。この様に、今回の資料中には刻印瓦が比較的多く含まれるが、無銘の瓦もあるため、どの生産地の瓦がどの程度需要されていたのかについては、確実なところが分かり難い。しかし、各生産地製品の需要の在り方を知る一定の手掛かりは得られると思われるため、以下、同資料にみられる刻印瓦を生産地別に取り上げた。なお、生産地別に刻印瓦の出土点数を見てみると、堺8点、安芸34点、徳王子12点、中山田38点、蘿生野1点、五百蔵2点、産地不明5点、文字が解読できない部分資料7点であった。

A. 堺 (大阪府堺市)

角枠内「堺大小路」(164・215)、丸枠内「堺」(168・216)、「○」(166・167・217)

B. 安芸 (高知県安芸市)

「御瓦師」(133～135他)、角枠内「御瓦師」(204)・「アキ□」(136・157)・「アキ五」(145・158)・「アキ」(155・156他)・「安喜」(147・224)・「安姫」(207)、角枠内「安喜」(包含層255)

C. 徳王子 (高知県香南市香我美町徳王子) 角枠内「徳民」(137・138他)

D. 中山田 (高知県香南市野市町中山田)

「中友」(139)・小判枠内「中己」(140・149他)、角枠内「中己」(210)、角枠内「中山林」(150・208)、角枠内「中山乙」(209・227)

E. 蘿生野 (高知県香美市香北町蘿生野) 角枠内「蘿生□」(148)

F. 五百蔵 (高知県香美市香北町五百蔵) 角枠内「いおり栄」(198・199)

G. 産地不明 角枠内「横濱源」(165)・「小の忠」(213)・角枠内不明(228)

これらの刻印と瓦生産地について、以下では、史料等からつかめる生産地の記録や、高知城跡及び城下町遺跡での出土状況等についても若干触れておきたい。

①堺産瓦について

堺瓦の生産開始時期については、生産遺跡である堺市北瓦町の下田源兵衛屋敷跡発掘調査の成果から、北瓦町では1620年代頃から生産が始まるとされている。また、同遺跡では18世紀前半～中葉頃に丸枠内「堺」の刻印が見られると報告される。⁽³⁷⁾今回出土した「堺大小路」刻印瓦は、元禄2年(1689)の「堺大絵図」に見える「大小路口瓦町」で生産されたと推定されるものである。また、丸枠内「堺」と「○」刻印瓦も、同絵図の「北瓦町」に記される「下田源兵衛」の屋敷跡発掘調査から出土しており、ともに堺産と推定されている。⁽³⁸⁾

これらの「堺大小路」・丸枠内「堺」・「○」刻印瓦は、これまでに高知城跡の御台所跡、黒鉄門前、

三ノ丸石垣整備に伴う調査、丸ノ内緑地の調査、及び高知城伝下屋敷跡、西弘小路遺跡^(註9)から出土している。このことから、高知城内を中心として、藩関連の屋敷や城に近隣する上級武士の屋敷で、堺産瓦が使用されたことが分かる。

なお、堺産瓦の流通時期であるが、佐々木志穂氏は高知城伝下屋敷跡出土の堺産瓦について、丸枠内「堺」・「○」印が堺では18世紀中葉以降見られなくなることや、高知城伝下屋敷跡出土の堺産瓦が享保の大火以降の瓦溜にまとまって出土していることなどから、同遺跡出土の「堺大小路」・丸枠内「堺」・「○」刻印瓦が享保の大火の直後に購入されたと推定している。

②県中央部の瓦

产地不明の刻印瓦も含まれていると予想されることから、高知市域の在銘資料については実態が良く分からなかった。近年の発掘調査で高知城跡と藩関連の屋敷跡、城下町の侍屋敷跡から刻印瓦の出土が確認された瓦生産地には、布師田（高知市布師田）^(註10)、小津（高知市小津）^(註11)、一宮（高知市一宮）^(註12)等があるが、今次調査区では出土が確認できていない。

③県東部地域の瓦

今回多くの刻印瓦が出土した、安芸、徳王子、中山田、並生野、五百蔵は、現在の安芸市、香南市、香美市に位置する県東部の瓦生産地である。刻印瓦の点数が生産地別比率に直接結びつくとは言えないが、刻印瓦の出土点数をみると、北曲輪の施設にこれら県東部に分布する生産地の製品が多く使用されていることが分かる。

多くの製品搬入が認められた安芸については、「皆山集」^(註13)に「…元禄十三年庚辰 御用の瓦を作らん為に豫州野間郡菊間濱村半兵衛といふ瓦工を招き寄せられ安喜舗にて工みし事あり その宿せし清右衛門といふもの翌十四年辛巳濱村の瓦工茂兵衛同人子五郎兵衛を雇入れ製す 是安喜瓦のはじめにて兩人とも居留り御用をも勤めたり…」と見え、伊予からの技術導入によって、安芸瓦の生産が元禄13年（1700）以降開始されたことが分かる。この記事から土佐国内での瓦生産の本格化は18世紀以降と考えられ、以後、自国製品の流通が進められたとみられる。

さて、上述の県東部諸窯の製品は、高知城跡の他、高知城伝下屋敷跡、西弘小路遺跡、金子橋遺跡^(註14)でも出土が確認されている。また、今回刻印瓦が出土した生産地以外にも、和食、夜須、手結、片地、久礼田、蒲原等の東部地域の製品も確認されている。こうしたことから、近世後期には、これら県東部地域の製品が高知城内はもとより城下町の侍屋敷にも需要され、広く流通したことが推察される。

【註】

- 1) 推定個体数の算出は次の方法で行った。
 - ①軒丸瓦、軒平瓦、軒棟瓦は、文様をもつ瓦当部の破片で別個体と判断できるものをカウントした。
 - ②丸瓦は、段部をもつ破片で別個体と判断できるものをカウントした。
 - ③平瓦は、幅が完形に近いものを取り上げた。ただしこの場合、個体数は実際より少なくカウントされ易い。棟瓦の点数が軒棟瓦の2倍程あることを参考にすると、少なくとも軒平瓦（11点）の2倍程度はあったのではないかと推定される。
 - ④棟瓦は、基本的に棟を含む破片の数から破片点数を出したが、この場合、小片が混じったり軒棟瓦の平瓦部が混じるなどして実際の個体数よりも多くなってしまうという問題が生じる。そこで、次の2種類の方法によって個体数を推定した。[算出法A] 棟をもつ破片の点数が

- ら小破片を除いた数(119点)を出し、ここから軒桟瓦の個体数(35点)を引いて、桟瓦のみの個体数(84個体)とした。[算出法B] 軒平瓦、平瓦、軒桟瓦、桟瓦、種類不明の平瓦部全破片の側面の長さを合計し(13572cm)、これを平瓦と桟瓦1個体分の平均的な周縁の長さ(111cm)で割って、軒平瓦、平瓦、軒桟瓦、桟瓦の総個体数(122個体)を割り出した。さらに、これから軒平瓦、軒桟瓦の個体数を引き、残りを平瓦と桟瓦の個体数の合計(76個体)とした。
- 2)「史跡高知城跡－三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書」高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2010年
 - 3)「史跡高知城跡－本丸石垣整備事業報告書」高知県文化財団埋蔵文化財センター2004年
 - 4)「史跡高知城跡－丸ノ内縁地試掘確認調査報告書」高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2006年
 - 5)「高知城伝下屋敷跡－高知地家簡載序含敷地埋蔵文化財発掘調査報告書」高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
 - 6) 軒平瓦、平瓦、軒桟瓦、桟瓦の推定個体数の合計は、算出法Bによって、下限を122個体とした。また算出法Aでは132個体以上となるが、カウントできなかった平瓦が20点程加わると仮定して、推定個体数の上限を152個体とした。
 - 7) 嶋谷和彦「近世・堺北瓦町における瓦生産の展開」『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告－SKT755地点』堺市教育委員会2000年
 - 8)「○」刻印瓦の産地同定については、高知城伝下屋敷跡出土の丸枠内「堺」と「○」刻印瓦の胎土が共通すること、及び、生産地遺跡である堺北瓦町の瓦屋下田源兵衛屋敷地の調査で、丸枠内「堺」と「○」刻印瓦が出土していることから、両者が堺産と推定されている。佐々木志徳「高知城伝下屋敷跡出土の瓦」「高知城伝下屋敷跡」高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
 - 9)「西弘小路遺跡」高知市教育委員会2010年
 - 10) 発掘調査では、布師田産の刻印瓦は、史跡高知城跡 丸ノ内縁地試掘確認調査、高知城跡西堀地区試掘確認調査、高知城伝下屋敷跡、西弘小路遺跡、金子橋遺跡で確認されている。
 - 11) 発掘調査では、小津産の刻印瓦は、史跡高知城跡 丸ノ内縁地試掘確認調査、高知城伝下屋敷跡で確認されている。
 - 12) 発掘調査では、一宮産の刻印瓦は、西弘小路遺跡で確認されている。
 - 13)「土佐之国史料類纂 皆山集 第六卷」高知県立図書館 昭和48年
 - 14)「金子橋遺跡」高知市教育委員会2008年

Tab.16 瓦溜1～3・SD1出土瓦の破片数と推定個体数

種類	瓦溜1～3 破片数	SD1 破片数	瓦溜1～3・ SD1 総破片数	瓦溜1～3・SD1 推定個体数 (桟瓦は算出法Aによる)	瓦溜1～3・SD1 推定個体数 (平瓦・桟瓦は算出法Bによる)
軒丸瓦	6	12	18	18	18
丸瓦	135	54	189	62	62
軒平瓦	6	5	11	11	11
軒桟瓦	7	28	35	35	35
平瓦	0	2	2	不明(2点以上)	
桟瓦	105	35	140	84	76
種類不明の平瓦部	843	131	974		
袖瓦	6	3	9	9	9
棟瓦	0	6	6	6	6
棟飾り瓦	0	1	1	1	1
曳瓦	1	1	2	2	2
計	1109	278	1387		

Tab.17 瓦溜1~3・SD1出土の刻印瓦

生産地	印	平瓦・軒平瓦・焼瓦・軒焼瓦・不明半瓦部	丸瓦・その他の	計	生産地別点数	生産地別組成比
堺	角桟内「堺大小姓」	3		3	8	75%
	角桟内「堺」	2		2		
	「○」	3		3		
安曇	「アキ」	3	3	6	34	31.8%
	「アキ五」	8	1	9		
	「安曇」	3	1	4		
	「安灰」	1		1		
	「御瓦助」	14		14		
	無			5		
祇王子	角桟内「祇民」	12		12	12	11.2%
中山田	角桟内「中山」	9		9	38	35.5%
	小角桟内「申乙」	17	3	20		
	角桟内「中山林」	1	1	2		
	角桟内「中山乙」	2		2		
	「中友」	5		5		
龜井野	角桟内「龜井○」		1	1	1	0.9%
五百歳	角桟内「いおりい栄」	2		2	2	1.9%
不明	角桟内不明	2	1	3	3	2.8%
	角桟内「小の忠」	1		1	1	0.9%
	角桟内「猪瀬源」	1		1	1	0.9%
	不明の部分破片	7		7	7	6.5%
	計	96	11	107	107	99.9%

Tab.18 瓦溜1~3・SD1出土遺物の器種別出土点数と組成比

器種	瓦溜1~3		SD1		出土点数計	組成比
	陶磁器	土器・金属製品	陶磁器	土器・金属製品		
中瓶	16		22		38	29.9%
小瓶	7		4		11	8.7%
小杯			2		2	1.6%
小皿・五寸皿	6		5		11	8.7%
中皿	1				1	0.8%
大皿	1		1		2	1.6%
鉢	2		5		7	5.5%
盆口	2				2	1.6%
碗蓋			1		1	0.8%
蝶鉢	4		1		5	3.9%
呑鉢・片口	1				1	0.8%
鍋	2		1		3	2.4%
焰格				1	1	0.8%
土瓶・急瓶	3		7		10	7.9%
瓶(徳利)・その他の	3		1		4	3.1%
壺・甕	3		1		4	3.1%
壺印・七輪		4			4	3.1%
甕		1			1	0.8%
火鉢	2	1	2	1	6	4.7%
灯受明鏡	1				1	0.8%
紅皿			1		1	0.8%
土器小瓶		1		7	8	6.3%
土器中瓶		1		1	2	1.6%
白土器小瓶				1	1	0.8%
計	54	8	54	11	127	100.1%
古銭				4		
鉄釘		25		141		

※組成比は古銭、鉄釘を含まない数値。

写 真 図 版



調査前全景（北東より）



調査区全景（北より）



調査区南壁



調査区南壁（西部）



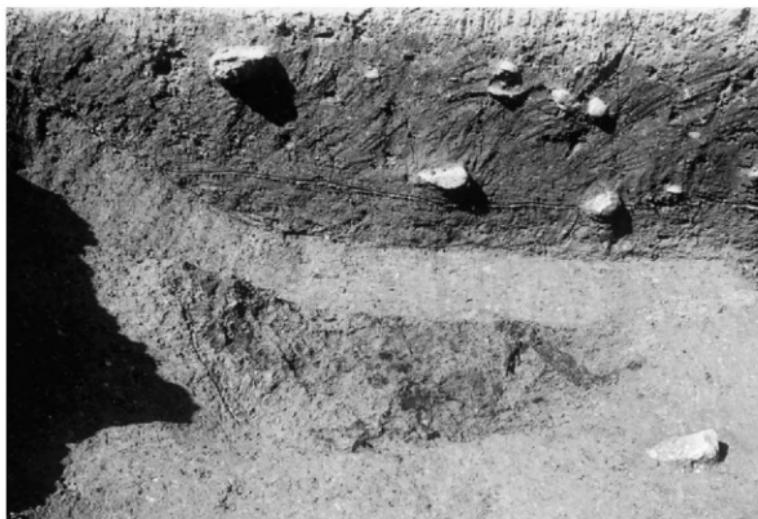
SK3・4 (試掘調査 TP7)



SK4 セクション (南より)



SK10 遺物出土状況



SK6・10 セクション



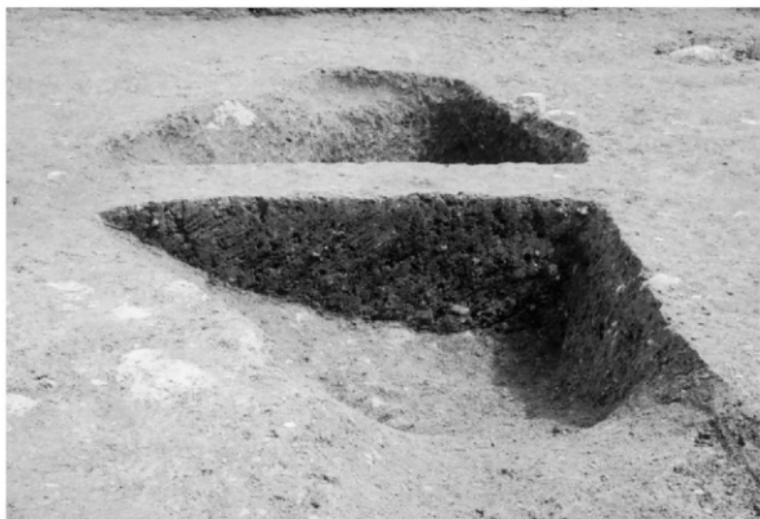
SK1 遺物出土状況（北より）



SK1 セクション（北より）



SK5 (東より)



SK9 セクション (西より)



SK6 完掘状況（北より）



同上（西より）



SK7 セクション (東より)



SK11 セクション (南より)



SD2 検出状況（北より）



SD2・SD3 セクション（西より）



SD2・SD3（西より）



SD2・SD3 完掘状況（西より）



SK1 完掘状況（南より）



SK5（西より）



SK9（西より）



P2（南より）



SK13 セクション（南より）



P6 セクション（南より）



炭化物溜り 1（試掘調査 TP2）



M'層出土状況（試掘調査 TP2）



SK2・瓦溜 4 (北より)



SK2 遺物出土状況



SD1 完掘状況（北より）



SD1 セクション（北より）



石列 1・瓦溜 1 検出状況（試掘調査 TP1・北より）



石列 1・SD1（同・北より）



石列 1・SD1 (試掘調査 TP1・西より)



石列 1 セクション (同・北より)



石列 2・3 (南より)



石列 2 (東より)



石列 2 (北より)



石列 3・瓦溜 3 (西より)



石列 4 (南西より)



SX1 セクション (南より)



石列 1・SD1 (試掘調査 TP1・北より)



SD1 セクション (同・西より)



SD1 遺物出土状況 (同・西より)



瓦溜 1 検出状況 (同・南より)



瓦溜 1 (同)



石列 3・瓦溜 3 (西より)



石列 3・瓦溜 3 (北より)



石列 3 セクション (南より)



石列 2 (試掘調査 TP2・東より)



石列 2 (同・西より)



石列 2 遺物出土状況 (西より)



SK2 検出状況 (東より)



SK2 セクション (東より)



石列 4・SX1 (南より)



作業風景



現地説明会風景



SK3 遺物出土狀況 (2)



SK10 遺物出土狀況 (4)



SK1 遺物出土狀況 (12)



SK1 遺物出土狀況 (14)



SD2 遺物出土狀況 (66)



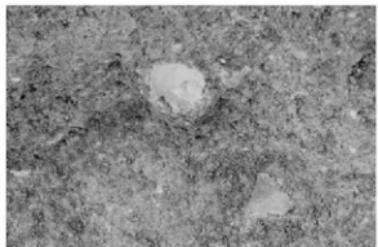
SD2 遺物出土狀況 (67)



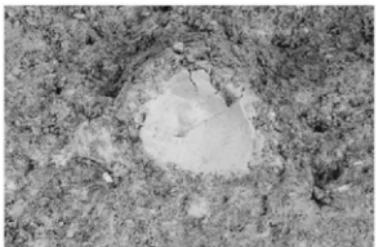
SD2 遺物出土狀況 (70)



SD2 遺物出土狀況 (73)



SD2 遺物出土状況 (80)



SD2 遺物出土状況 (80)



SD2 遺物出土状況 (73・83)



SD2 遺物出土状況 (83)



SD2 遺物出土状況 (84)



SD2 遺物出土状況 (87)



SD2 遺物出土状況 (89)



SK2 遺物出土状況 (99)



石列 2 遺物出土狀況 (181)



SD1 遺物出土狀況 (134)



瓦溜 1 遺物出土狀況



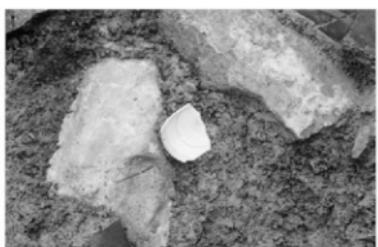
瓦溜 1 遺物出土狀況 (185)



SD1 遺物出土狀況 (130)



SD1 遺物出土狀況 (130)



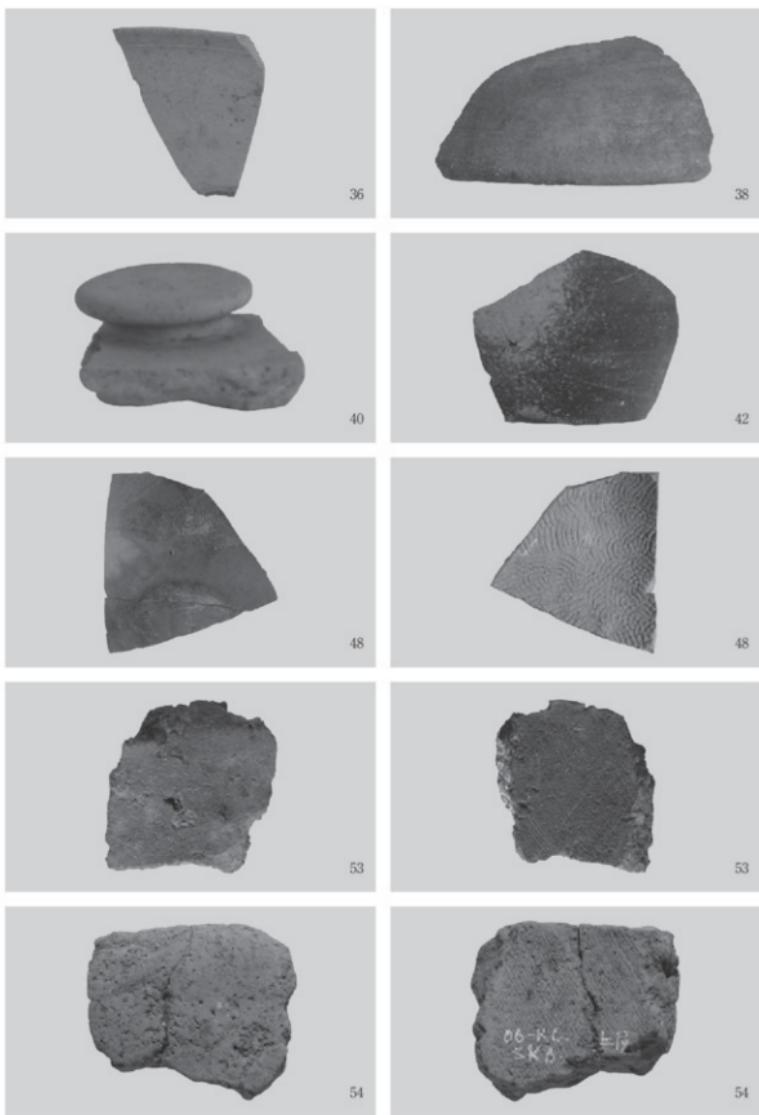
SD1 遺物出土狀況 (100)



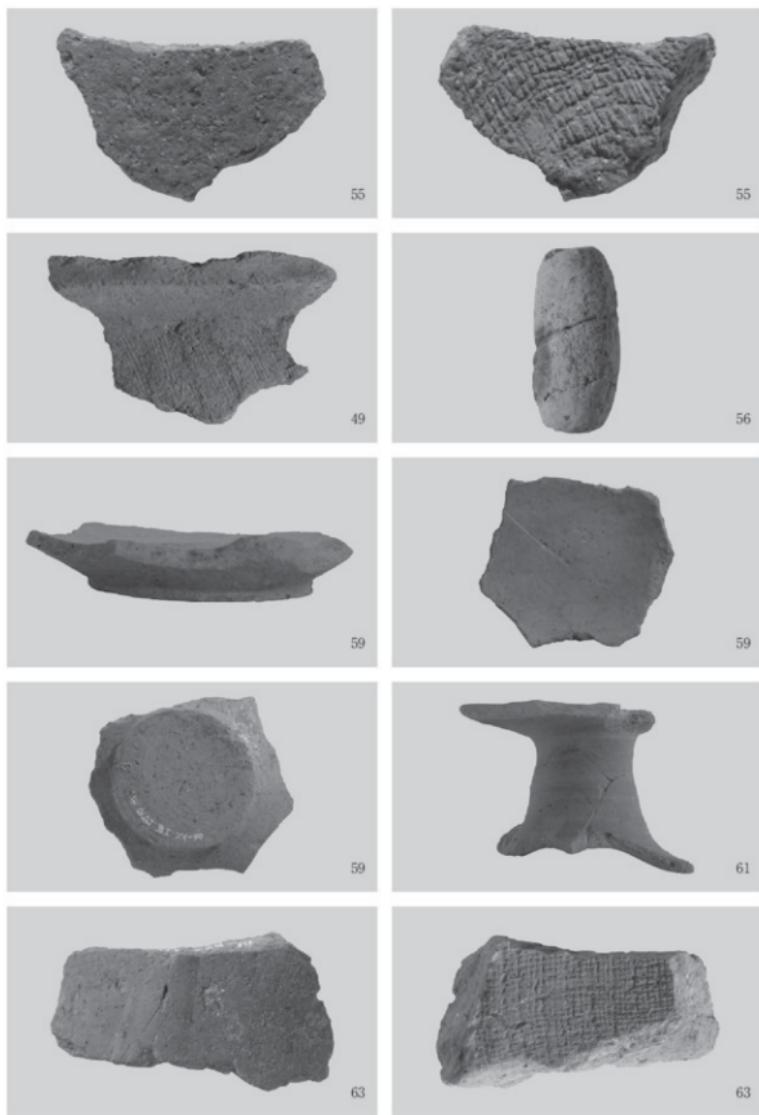
瓦溜 3 遺物出土狀況 (218)



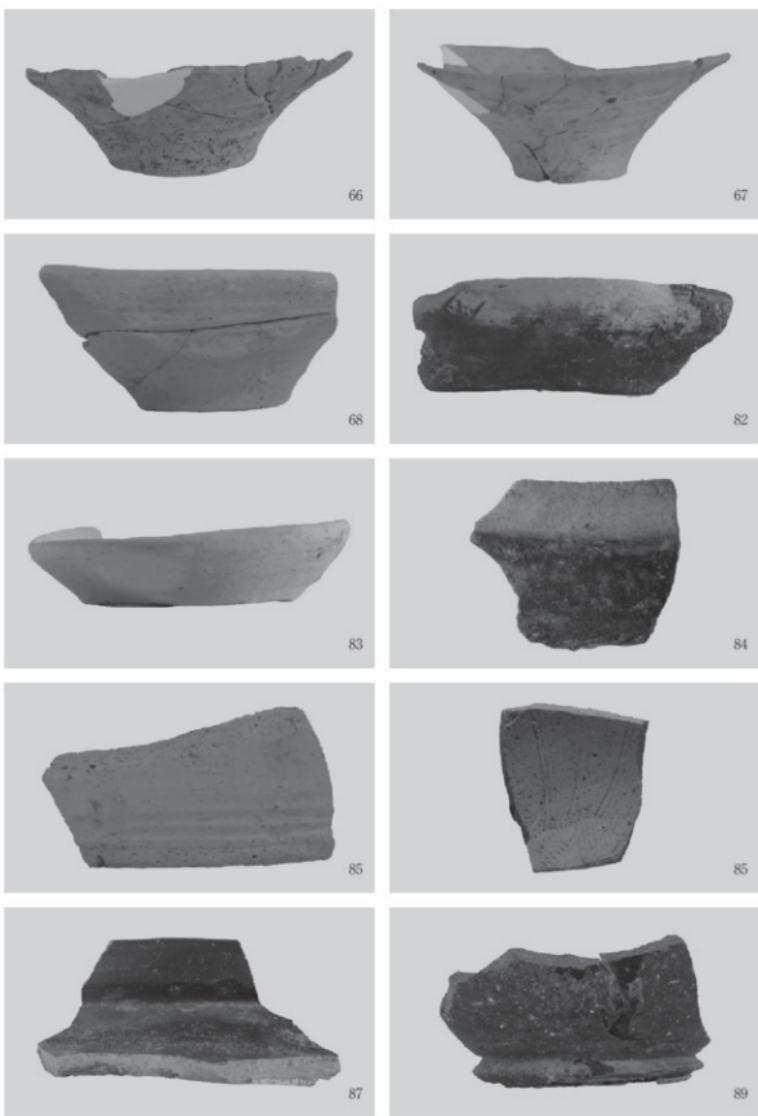
SK1 · 6 · 10 出土遺物



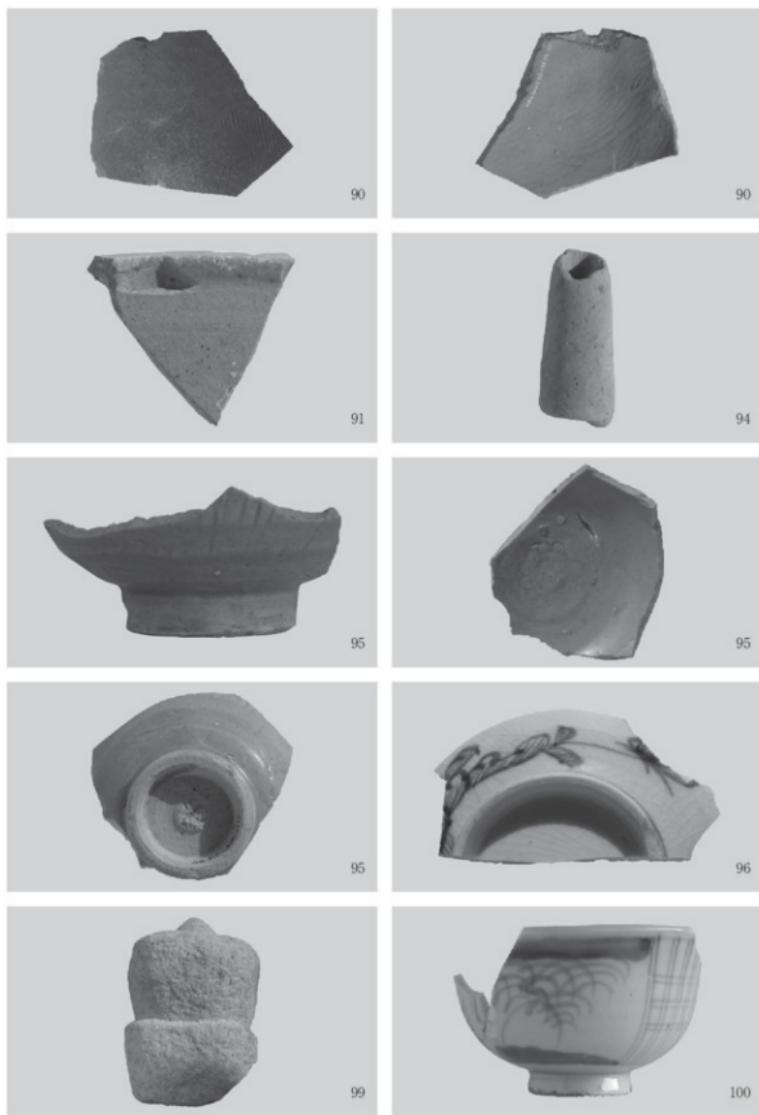
SK6 出土遺物



SK6 · 包含層Ⅲ層出土遺物



SD2 出土遺物



SK2 · SD1 · 2 · 包含層III層出土遺物